

2020年度  
日本学生オリエンテーリング選手権大会  
スプリント競技部門  
報告書



期 日	2020年(令和2年)12月6日(日)
開 催 地	栃木県那須塩原市
競技会場	那須野が原公園
主 催	日本学生オリエンテーリング連盟 栃木県オリエンテーリング協会
主 管	2020年度日本学生オリエンテーリング選手権大会 スプリント競技部門実行委員会
共 催	一般社団法人大学スポーツ協会(令和2年度スポーツ庁補助事業)
後 援	那須塩原市 那須塩原市教育委員会 公益社団法人日本オリエンテーリング協会

協 賛

**FRENSON**  
RUN WITH CONFIDENCE

**SALMING.**  
no nonsense.



## 目次

## ご挨拶

Page 2

## 1

## 公式成績

Page 3 - 7

- 1.1 選手権の部(決勝)----- 3
- 1.2 選手権の部(予選)----- 4
- 1.3 一般の部----- 7

## 2

## 入賞者コメント

Page 8 - 12

- 2.1 スプリント競技部門 男子選手権----- 8
- 2.2 スプリント競技部門 女子選手権----- 10

## 3

## 競技結果と解説

Page 13 - 24

- 3.1 コース設定にあたって----- 13
- 3.2 女子選手権決勝 解説----- 15
- 3.3 男子選手権決勝 解説----- 19
- 3.4 おわりに(コース設定者より)--- 24
- 3.5 調査依頼と提訴の回答----- 24

## 4

## 大会運営報告

Page 25 - 38

- 4.1 大会企画の経緯----- 25
- 4.2 活動実績----- 25
- 4.3 競技面の準備経緯----- 27
- 4.4 会計----- 33

## 5

## イベント・アドバイザー報告

Page 39 - 47

- 5.1 はじめに----- 39

- 5.2 業務実施報告 概要----- 39
- 5.3 業務実施報告----- 41
- 5.4 本大会において見られた課題----- 44
- 5.5 おわりに・将来への提言----- 45

## 6

## 将来への提言

Page 48 - 49

- 6.1 運営組織、人事、会計及び運営全般 48
- 6.2 競技全般----- 48
- 6.3 日本学連に向けた提言----- 49
- 6.4 加盟校に向けた提言、お願い----- 49

## 7

## 付録資料及びインカレスプリントガイドラインについて

Page 50 - 56

- 7.1 はじめに----- 50
- 7.2 スプリント黎明期----- 50
- 7.3 インカレスプリント開始まで----- 51
- 7.4 インカレスプリントガイドラインについて----- 52
- 7.5 テレイン選択と渉外面からみる最初の5年間の評価----- 52
- 7.6 まとめ----- 55
- 7.7 最後にガイドラインへの提言----- 56

## 8

## 選手権の部(決勝)スタートリスト

Page 61

## 9

## 大会役員一覧

Page 62

## 10

## 寄附協力者一覧

Page 63 - 64

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

# ご挨拶

日本学生オリエンテーリング連盟会長  
河合 利幸



ロング競技と合わせて実施されるはずだったスプリント競技ですが、コロナ禍の影響で、日程とテレインだけでなく競技方式も変更しての単独開催となりました。それだけでなく、運営に現役学生が関わるなど、スプリント競技史上異例づくめでした。ロング競技と比較的近接した日程で、テレインから遠方の大学の参加者が少なかったりということもありました。それでもなお開催するということには、異論もあつたことでしょう。結果的にはインカレと冠するにふさわしい大会となりました。極めて短い準備期間中、実行委員の皆さんは相当苦労したのではないのでしょうか。

そのような状況のもと、ロング競技に続き実施されたライブ配信は素晴らしいものでした。ロングのときより洗練されていて、選手の追走映像やテロップの入れ方などは駅伝やマラソン中継を彷彿とさせるもので、実際に会場を観戦するよりレースの状況がよくわかりました。準備や費用の面では大変でしょうが、競技のおもしろさを伝える手段のひとつとして、今後有効に活用できたらと考えます。

ロング競技との2冠を達成した伊部選手と小牧選手、それに入賞した選手の皆さん、おめでとうございます。白熱した戦いこそ、運営した実行委員の皆さんに報いる方法です。今回も十分に伝えることができたことでしょう。3月のミドル・リレー競技がどうなるかは不透明ですが、学生の皆さんには日頃より感染拡大防止策を着実に実行していただき、少しでも実施の可能性を高められるよう努めていただきたいと思います。

最後になりましたが、極めて大変な状況の中、準備を担当した実行委員会とその関係者の皆さんに改めて感謝いたします。栃木県及び那須塩原市の地元関係者の皆様には、様々な面でご指導ご協力をいただきました。主催者の日本学連を代表して、厚く御礼を申し上げます。

日本学生オリエンテーリング連盟幹事長・実行委員長  
谷野 文史



今回のインカレスプリントは、様々な意味でこれからの歴史に残るインカレとなったのではないのでしょうか？

まず、語るべきは開催までの経緯です。予定されていたインカレスプリントが開催不可能となり、一度は中止が検討されました。しかし、日本学生オリエンテーリング連盟幹事および様々な学生の「インカレ」や「スプリント」への熱い思いにより、中止ではなく代替大会の模索を検討することとなりました。そこからは、自分の競技ではなく運営を選んでくれた学生達や、OBOGの方々、そして何よりも我々を受け入れてくださった、那須塩原市の皆様および那須野が原公園の管理事務所の方々のおかげ様で、感染症による厳しい社会状況の中、開催することができました。多くの人の思いと努力により、インカレスプリントを守ることができたこと、感謝申し上げます。

また、今回のインカレスプリントでは主に3つの挑戦をしました。1つ目は、OBOG協働による現役学生も参加する運営です。競技情報をコントロールすることにより、OBOGだけに頼らない運営方式を試すことができました。2つ目は、予選・決勝方式です。この方式により地域でのセレクションが不要になり、運営の負担を軽減するとともに貴重なスプリントのテレインをリザーブすることができました。3つ目は、ライブ配信です。コロナウイルスのために会場に来ていただくことができなかった、OBOGの方や選手のご両親・ご友人、そして何よりも参加できなかった選手の皆さんに、インカレスプリントを体感していただけたのではないかと思います。

こうした挑戦の種が、今後の日本学生オリエンテーリング界の発展に貢献することができれば幸いです。

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザリー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

# 1 公式成績

## 1.1 選手権の部(決勝)

### ME 参加人数 60名

順位	氏名	記録	学校・学年
1	小牧弘季	13:09	筑波大学 4
2	大石洋輔	13:50	早稲田大学 4
3	森清星也	14:05	早稲田大学 1
4	太田知也	14:06	京都大学 4
5	本庄祐一	14:11	東京大学 2
6	金子哲士	14:20	東北大学 4
7	江野弘太郎	14:23	慶應義塾大学 4
8	今野陽一	14:29	東北大学 3
9	朝間玲羽	14:39	東京大学 3
10	谷野文史	14:42	筑波大学 4
11	伊藤元春	14:50	東京大学 3
12	菌部駿太	14:51	東北大学 4
13	唐木朋也	14:56	東北大学 4
14	住吉将英	14:59	名古屋大学 4
15	田中琉偉	15:06	法政大学 3
16	中嶋律起	15:08	横浜国立大学 4
17	根本啓介	15:10	筑波大学 2
17	小林俊介	15:10	東北大学 3
19	二俣真	15:14	京都大学 2
20	古池将樹	15:17	京都大学 4
21	古関駿介	15:19	東北大学 3
22	平岡丈	15:27	京都大学 2
23	宮川靖弥	15:37	東京工業大学 3
23	田淵ヒカル	15:37	慶應義塾大学 3
25	小寺義伸	15:41	東京工業大学 4
26	渡邊寛希	15:43	筑波大学大学院 4
27	豊田健登	15:46	茨城大学 4
28	小林尚暉	15:47	東京大学 3
29	山田峻大	15:54	東北大学 3
29	伊地知淳	15:54	千葉大学 3

順位	氏名	記録	学校・学年
31	櫻井一樹	15:56	東京工業大学 4
32	片岡佑太	16:03	大阪大学 4
33	津田卓磨	16:05	横浜国立大学 4
34	粟生啓介	16:06	名古屋大学 3
35	池田直樹	16:11	東京大学 4
36	菅波崇志	16:15	筑波大学 2
37	羽田拓真	16:26	横浜国立大学 2
38	立松空	16:30	早稲田大学 2
39	嶋崎渉	16:39	東北大学 4
40	祖父江有祐	16:43	筑波大学 2
41	用松知樹	16:44	慶應義塾大学 2
42	山田基生	16:52	東北大学 4
43	鈴木琢也	16:53	横浜国立大学 3
44	金城和志	17:13	大阪大学 4
45	浅井寛之	17:19	東京大学 4
46	平岩伊武季	17:29	筑波大学 2
47	鈴木京佑	17:52	横浜市立大学 4
48	寺田直加	17:53	東北大学 3
49	山崎嘉津人	17:58	東京工業大学 2
50	碓井玲	18:04	横浜国立大学 2
51	堀内颯介	18:39	茨城大学 2
52	根岸龍宏	18:42	筑波大学 2
53	池田匠	19:17	早稲田大学 3
54	菅沼友仁	21:18	茨城大学 4
55	加藤千晴	21:35	東北大学 3
	龍堀巧	DISQ	東北大学 4
	小林伸次	DISQ	東北大学 3
	伊藤嵩真	DISQ	東京大学 3
	稲毛隆太	DISQ	東北大学 2
	保莉優	DISQ	東北大学 4

### WE 参加人数 40名

順位	氏名	記録	学校・学年
1	伊部琴美	13:38	名古屋大学 4
2	阿部悠	14:34	実践女子大学 3
3	世良史佳	14:37	立教大学 4
4	小林祐子	14:39	東北大学 4
5	香取瑞穂	14:52	立教大学 4
6	水上玲奈	15:25	東北大学 2
7	清野幸	15:38	横浜国立大学 4
8	長瀬麻里子	16:08	お茶の水女子大学 2
9	宮本和奏	16:24	筑波大学 4
10	山根萌加	16:36	京都大学 3
11	上島じゅ菜	16:38	お茶の水女子大学 2
12	佐久間若菜	16:42	筑波大学 4

順位	氏名	記録	学校・学年
13	片岡茅悠	16:43	東京大学 4
14	榎戸麻衣	16:50	日本女子大学 2
14	富永万由	16:50	早稲田大学 4
16	近藤花保	16:53	名古屋大学 2
17	吉田菜々子	17:13	東京理科大学 1
18	秋山美怜	17:45	早稲田大学 4
19	岩崎佑美	17:56	慶應義塾大学 3
20	八木橋まい	17:58	東北大学 4
21	阿部朱莉	18:13	東京理科大学 3
22	大栗由希	18:32	茨城大学 3
23	中野真優	18:39	嵯山女学園大学 4
24	松田千果	18:56	横浜市立大学 4

順位	氏名	記録	学校・学年
25	吉永紗弥香	19:44	法政大学 2
26	菊池美結	20:01	岩手大学 3
27	坂巻朱里	20:42	十文字学園女子大学 2
28	鈴木日菜	20:43	実践女子大学 3
29	猪股紗如	20:49	千葉大学 2
30	小林璃衣紗	20:57	青山学院大学 3
31	菅原真優	21:23	日本女子大学 4
32	明田彩里	21:52	椋山女学園大学 3

順位	氏名	記録	学校・学年
33	池ヶ谷みのり	22:43	一橋大学 3
34	佐藤隆奈	23:00	筑波大学 2
35	須本みずほ	23:07	椋山女学園大学 3
36	菊地美里	23:25	東北大学 2
37	中村咲野	24:59	立教大学 3
38	崎原美咲紀	26:03	千葉大学 2
	佐々木亜珠	31:50	宮城学院女子大学 3
	藤井明日香	35:47	関東学院大学 3

## 1.2 選手権の部(予選)

### MEQ1 参加人数 60名

順位	氏名	記録	学校・学年
1	山田基生	13:01	東北大学 4
2	今野陽一	13:06	東北大学 3
3	金子哲士	13:07	東北大学 4
4	小林俊介	13:41	東北大学 3
5	池田匠	13:42	早稲田大学 3
6	稲毛隆太	13:48	東北大学 2
7	住吉将英	13:49	名古屋大学 4
8	太田知也	13:58	京都大学 4
9	中嶋律起	14:02	横浜国立大学 4
10	池田直樹	14:10	東京大学 4
11	平岩伊武季	14:19	筑波大学 2
12	伊地知淳	14:20	千葉大学 3
13	祖父江有祐	14:42	筑波大学 2
14	用松知樹	14:47	慶應義塾大学 2
15	加藤千晴	14:58	東北大学 3
16	碓井玲	15:09	横浜国立大学 2
16	龍堀巧	15:09	東北大学 4
18	根岸龍宏	15:11	筑波大学 2
19	金城和志	15:25	大阪大学 4
20	小林伸次	15:37	東北大学 3
21	鈴木遼賀	15:46	岩手大学 2
21	小林亮太	15:46	岩手県立大学 4
23	村田千真	15:47	筑波大学 3
24	高野陽平	15:51	神戸大学 4
25	小高敦志	15:53	岩手大学 3
26	塚田翔太	15:56	東京工業大学 2
27	荒川悠人	15:57	東京農工大学 3
28	森田邦夫	16:00	静岡大学 3
29	松嶋亮弥	16:16	東京大学 3
30	入江龍成	16:22	早稲田大学 2

順位	氏名	記録	学校・学年
31	三浦開登	16:23	東京工業大学 4
32	野上世蓮	16:27	横浜国立大学 2
33	佐藤隆	16:29	東京工業大学 2
34	安齋音哉	16:30	東京農工大学 3
34	宮嶋哲矢	16:30	千葉大学 4
36	櫻井千尋	16:35	名古屋大学 2
37	高橋忠大	16:36	東北大学 1
38	有澤達哉	16:38	東京大学 3
39	藤澤達也	16:50	東京大学 2
40	磯邊岳晃	16:53	千葉大学 4
41	森恒大	16:59	筑波大学 3
42	野沢星雅	17:38	茨城大学 4
43	森下晃成	18:14	静岡大学 3
44	仲長航	18:42	一橋大学 2
45	笠井虹汰	18:47	千葉大学 3
46	大久保壮途	18:49	東京大学 2
47	板垣星哉	19:07	慶應義塾大学 2
48	澤田直志	19:16	早稲田大学 2
49	佐野良我	19:20	慶應義塾大学 2
50	川崎拓巳	19:22	東京理科大学 2
51	大場隆太郎	19:31	東京工業大学 3
52	市川礼偉	21:01	横浜市立大学 3
53	鈴木海斗	21:46	名古屋大学 2
54	村山泰眸	22:01	千葉大学 4
55	中村諒	22:43	早稲田大学 3
56	瓜生侑	22:58	東京工業大学 3
57	市川幸杜	25:32	早稲田大学 2
58	木村宇快	27:53	東京工業大学 2
	山口龍之介	DISQ	千葉大学 3
	波根竣介	DISQ	東北大学 2

### MEQ2 参加人数 62名

順位	氏名	記録	学校・学年
1	谷野文史	13:34	筑波大学 4
2	本庄祐一	13:43	東京大学 2
3	二俣真	13:53	京都大学 2

順位	氏名	記録	学校・学年
4	大石洋輔	13:58	早稲田大学 4
5	嶋崎渉	14:02	東北大学 4
6	田中琉偉	14:14	法政大学 3

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザリー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザ一報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

順位	氏名	記録	学校・学年
7	菌部駿太	14:16	東北大学 4
7	田淵ヒカル	14:16	慶應義塾大学 3
9	菅波崇志	14:25	筑波大学 2
10	小寺義伸	14:29	東京工業大学 4
11	江野弘太郎	14:33	慶應義塾大学 4
12	宮川靖弥	14:44	東京工業大学 3
13	朝間玲羽	14:49	東京大学 3
14	堀内颯介	14:55	茨城大学 2
15	櫻井一樹	14:56	東京工業大学 4
16	豊田健登	15:09	茨城大学 4
17	山田峻大	15:21	東北大学 3
18	古池将樹	15:29	京都大学 4
19	鈴木琢也	15:34	横浜国立大学 3
20	立松空	15:38	早稲田大学 2
21	豊澤義文	15:43	東京工業大学 4
22	葛西裕樹	15:50	東北大学 2
23	岡田航太郎	15:51	東京理科大学 2
24	藤原悠平	15:58	東京大学 3
25	吉田新史	16:12	大阪大学 4
26	得能渉	16:31	千葉大学 4
27	金子隼人	16:32	東京大学 1
28	西田直人	16:34	茨城大学 3
29	中村僚宏	16:41	東京大学 4
30	角野裕之	17:10	東京工業大学 3
31	伊藤拓馬	17:15	東北大学 4
32	栗山朋大	17:34	横浜国立大学 2
33	山田大雅	17:50	中央大学 4
34	石川諒	18:39	東北大学 2

順位	氏名	記録	学校・学年
35	矢田祐喜	18:45	静岡大学 3
36	佐藤裕太	18:59	千葉大学 1
37	菅野裕貴	19:00	横浜市立大学 4
38	秋元郁	19:11	早稲田大学 3
39	井上諒	19:17	東北大学 2
39	時任晴央	19:17	東北大学 2
41	柿沼晴喜	19:24	筑波大学 4
42	嶋崎彰人	19:40	関東学院大学 2
43	森川輔	20:01	千葉大学 2
44	木本琢登	20:25	早稲田大学 3
45	大槻賢二郎	21:41	東北大学 3
46	関根優樹	22:03	神戸大学 4
46	渡邊大地	22:03	千葉大学 3
48	村岡泰輝	22:05	横浜国立大学 1
49	上保望	22:50	早稲田大学 3
50	松原佑季	23:43	一橋大学 2
51	大六野祐斗	23:54	千葉大学 1
52	高松暉	25:04	筑波大学 2
53	押切嶺於	25:14	東京農工大学 4
54	小俣敦宏	25:21	名古屋工業大学 3
55	藤田翔伍	25:59	東京農工大学 2
56	原柊斗	26:20	岩手大学 3
57	上田礼一	28:53	東京大学 1
	今井悠	32:22	慶應義塾大学 1
	君島健太	33:32	東北大学 2
	佐藤宏紀	DISQ	千葉大学 1
	藤井悠輝	DISQ	名古屋大学 3
	永山遼真	DISQ	筑波大学 2

MEQ3 参加人数 60名

順位	氏名	記録	学校・学年
1	小牧弘季	12:34	筑波大学 4
2	保莉優	13:15	東北大学 4
3	唐木朋也	13:40	東北大学 4
3	浅井寛之	13:40	東京大学 4
5	平岡丈	13:52	京都大学 2
6	小林尚暉	13:58	東京大学 3
7	粟生啓介	13:59	名古屋大学 3
8	森清星也	14:02	早稲田大学 1
9	伊藤元春	14:13	東京大学 3
10	津田卓磨	14:15	横浜国立大学 4
10	山崎嘉津人	14:15	東京工業大学 2
12	根本啓介	14:17	筑波大学 2
13	渡邊寛希	14:20	筑波大学大学院 4
14	片岡佑太	14:22	大阪大学 4
15	古関駿介	14:25	東北大学 3
15	寺田直加	14:25	東北大学 3
17	羽田拓真	14:29	横浜国立大学 2
18	菅沼友仁	14:36	茨城大学 4
19	鈴木京佑	14:46	横浜市立大学 4
20	伊藤嵩真	14:51	東京大学 3
21	名雪青葉	14:52	筑波大学 3
22	衣笠匠斗	14:56	東京大学 2

順位	氏名	記録	学校・学年
22	櫻木嵩斗	14:56	東京工業大学 4
24	石渡望	15:30	東北大学 4
25	相馬哲兵	15:41	東京大学 2
26	森山凌佑	15:42	千葉大学 4
27	倉田瞭一	15:48	東京工業大学 3
28	村井智哉	15:54	東北大学 2
29	竹下晴山	15:57	茨城大学 3
30	宮岡竜也	16:02	早稲田大学 2
31	桑山陽次	16:57	東北大学 2
32	豊田俊哉	17:02	神戸大学 3
33	本多一成	17:04	千葉大学 4
33	安部智晴	17:04	名古屋大学 4
35	大石征裕	17:05	東京農工大学大学院 3
36	岩佐一大	17:14	千葉大学 4
37	高橋洸太	17:15	東京工業大学 4
38	青木航流	17:19	東京工業大学 3
39	網優希	17:31	早稲田大学 2
40	和田佳文	17:36	静岡大学 3
41	伊藤隼太郎	17:37	東京農工大学 3
42	楊泓志	18:19	横浜国立大学 2
43	松井泰道	18:24	早稲田大学 3
44	菅野正太	18:32	福島大学 4

順位	氏名	記録	学校・学年
45	佐藤珠有	18:53	茨城大学 2
46	小森直人	18:58	芝浦工業大学 2
47	鳥野祐作	19:08	東京大学 2
48	中林優樹	19:26	慶應義塾大学 2
49	高橋直道	20:22	東北大学 3
50	石渡雄也	20:38	関東学院大学 3
51	中田成央	22:13	東京農工大学 3
52	水流尚樹	22:18	千葉大学 4

### WEQ1 参加人数 33名

順位	氏名	記録	学校・学年
1	小林祐子	13:38	東北大学 4
2	伊部琴美	13:41	名古屋大学 4
3	阿部悠	14:03	実践女子大学 3
4	世良史佳	14:09	立教大学 4
5	清野幸	14:57	横浜国立大学 4
6	片岡茅悠	15:15	東京大学 4
7	八木橋まい	15:40	東北大学 4
8	上島じゅ菜	16:03	お茶の水女子大学 2
9	山根萌加	16:15	京都大学 3
10	榎戸麻衣	16:37	日本女子大学 2
11	大栗由希	16:48	茨城大学 3
12	吉田菜々子	17:36	東京理科大学 1
13	藤井明日香	17:45	関東学院大学 3
14	中村咲野	18:09	立教大学 3
15	小林璃衣紗	18:33	青山学院大学 3
16	池ヶ谷みのり	19:12	一橋大学 3
17	明田彩里	19:15	椋山女学園大学 3

### WEQ2 参加人数 34名

順位	氏名	記録	学校・学年
1	香取瑞穂	13:36	立教大学 4
2	近藤花保	13:38	名古屋大学 2
3	富永万由	14:36	早稲田大学 4
4	長瀬麻里子	14:49	お茶の水女子大学 2
5	佐久間若菜	14:54	筑波大学 4
6	宮本和奏	15:00	筑波大学 4
7	阿部朱莉	15:09	東京理科大学 3
8	菊地美里	15:12	東北大学 2
9	水上玲奈	15:24	東北大学 2
10	岩崎佑美	15:31	慶應義塾大学 3
11	秋山美怜	15:33	早稲田大学 4
12	須本みずほ	15:53	椋山女学園大学 3
13	菊池美結	16:04	岩手大学 3
14	坂巻朱里	16:08	十文字学園女子大学 2
15	松田千果	16:34	横浜市立大学 4
16	鈴木日菜	16:58	実践女子大学 3
17	菅原真優	16:59	日本女子大学 4

順位	氏名	記録	学校・学年
53	大西諒哉	22:24	千葉大学 2
54	市川竣介	22:30	筑波大学 1
55	真家遼介	22:49	千葉大学 1
56	阿保匠真	23:58	東北大学 2
57	齋藤俊輔	26:02	岩手大学 2
58	渡邊真太郎	27:54	慶應義塾大学 2
59	倉上英	28:38	慶應義塾大学 1
	西原大貴	DISQ	東北大学 2

順位	氏名	記録	学校・学年
18	佐藤隆奈	19:18	筑波大学 2
19	崎原美咲紀	19:19	千葉大学 2
20	吉永紗弥香	19:36	法政大学 2
21	井上千帆里	19:52	相模女子大学 4
22	今井里奈	21:24	椋山女学園大学 2
23	楊馨逸	21:27	早稲田大学 4
24	池田夏希	21:44	日本女子大学 2
25	石黒麻柚菜	21:51	日本女子大学 2
26	中村沙耶	22:18	椋山女学園大学 4
27	中神智香	23:55	静岡大学 3
28	佐藤成美	24:15	福島大学 3
29	矢倉美励	25:20	千葉大学 2
	九津見梓紗	30:05	十文字学園女子大学 2
	松本環	DISQ	早稲田大学 3
	中村莉子	DISQ	宮城学院女子大学 3
	稲邊穂乃果	DISQ	東京農工大学 4

順位	氏名	記録	学校・学年
18	猪股紗如	17:06	千葉大学 2
19	中野真優	17:31	椋山女学園大学 4
20	佐々木亜珠	17:58	宮城学院女子大学 3
21	里見穂	18:18	早稲田大学 3
22	佐藤加奈	18:39	立教大学 3
22	佐藤珠穂	18:39	法政大学 4
24	三浦快嶺	18:58	福島大学 4
25	砥石真奈	19:06	東京農工大学 4
26	山崎璃果	19:24	椋山女学園大学 3
27	三上夏生	20:52	横浜国立大学 2
28	泉夏帆	26:53	千葉大学 1
29	森下遥	27:59	千葉大学 1
	藤中美波	30:19	日本女子大学 2
	宇佐美綾野	DISQ	宮城学院女子大学 2
	角谷侑香	DISQ	京都女子大学 4
	塚本理紗子	DISQ	横浜国立大学 2
	白井千尋	DISQ	東京工業大学 3

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

**MUA 参加人数 35名**

順位	氏名	記録	学校・学年
1	千葉滉平	15:52	東北大学 3
2	西平楽	16:00	東北大学 4
3	藤澤廉	16:11	東北大学 2
4	松本明訓	16:22	東京大学 4
5	竹花佳祐	16:36	東北大学 3
6	小丸幸佑	16:41	京都大学 3
7	木村詠吉	17:13	東京工業大学 2
8	高柳知朗	17:21	筑波大学 4
9	川西翔貴	17:24	東北大学 2
10	吉原慧	18:28	東京大学 2
11	長瀬壮太	19:09	東京大学 1
12	大友秀太	19:48	東京工業大学 2
13	椿原暖人	20:34	名古屋大学 2
14	石井洋一郎	21:01	東京大学 2
15	河野弘士	21:37	東京工業大学 2
16	竹市葵	21:43	群馬大学 2
17	川口綜一朗	21:53	法政大学 1
18	早坂鴻志	24:26	東北大学 2

順位	氏名	記録	学校・学年
19	加賀萌起	24:38	一橋大学 1
20	登内良輔	25:04	法政大学 1
21	公森達郎	25:28	一橋大学 1
22	宗安慧悟	25:35	東京大学 2
23	渡辺陽太	26:34	東京大学 1
24	大熊光汰	28:56	東京大学 1
25	吉良優希	29:19	東京大学 1
26	井上拓紀	31:16	一橋大学 1
27	岩崎隼也	38:33	岩手大学 1
	山田凌平	DISQ	岩手大学 1
	村山蒼悟	DISQ	岩手大学 1
	小川亮太郎	DISQ	一橋大学 1
	中井健介	DISQ	筑波大学 1
	加賀谷湧	DISQ	東京大学 1
	綾野拓全	DISQ	東京大学 1
	竹安宏曜	DISQ	東京大学 2
	小林哲郎	DISQ	東北大学 3

**WUA 参加人数 10名**

順位	氏名	記録	学校・学年
1	福田有紗	15:38	国際基督教大学 1
2	藤平歩	17:21	実践女子大学 4
3	仲田有沙	20:55	実践女子大学 2
4	高倉玲衣	21:54	宮城学院女子大学 3
5	酒井舞子	24:53	京都女子大学 3

順位	氏名	記録	学校・学年
6	野中麻佑子	25:09	聖心女子大学 4
7	門松歩美	25:24	立教大学 3
8	杉山桃菜	25:40	十文字学園女子大学 4
9	田中恵子	26:05	相模女子大学 2
10	宗形和泉	27:37	岩手大学 1

## 2 入賞者コメント

### 2.1 スプリント競技部門 男子選手権

#### 1 小牧 弘季 0:13:09 筑波大学

今年の世界選手権スプリント種目に出場予定であり、スプリント競技に本腰を入れて取り組むつもりでした。4月、5月には海外遠征も計画しており、インカレスプリント、全日本スプリントで成長した自分の力を見せる、という青写真でした。しかしコロナ禍ですべてが中止になり、インカレスプリントも見通しが立たない状態になりました。そのような状況ではどうしてもスプリント競技の練習は後回しになり、レースの機会は限られました。しかしながらインカレという舞台で中途半端なレースをすることは私には耐えられないですし、力を尽くす責任があります。今ある力を最大限発揮することを意識し準備しました。体力面では細かい切り返しや苦手な階段を下る練習を重ねました。テクニック面は筑波大学でコースを組んで正置と基礎的なナビゲーションを徹底できるようにしました。テストレースとなった東北大会前日大会では大きなルートチョイスがごとごとく悪かったので、当日は止まってでも複数の検討をするように意識することにしました。さらに、トレインを対策し決勝では現地を相当加工しルートチョイスが困難なコースが来ることを予想しました。結果的にこれらの対策がうまくはまり、いいレースができたと思っています。準備には少なからぬ時間を割きましたが、それ以上の価値がインカレスプリントにはあると改めて思われました。短期間の準備でこのような素晴らしい大会が開催されたことには驚きと感謝しかありません。ありがとうございました。

最後に、今回筑波大学は非常に多くの選手が予選を通過しました。一方で予選・決勝とも多くの選手が悔しさを顔わにしていたのが印象的であり、嬉しいことでもありました。私たちは少しずつ変わってきています。その悔しさを次のインカレとともに晴らしたいと思います。

#### 2 大石 洋輔 0:13:50 早稲田大学

レース前、インカレの結果を競馬の単勝で予想するならば、小牧が1.3倍で僕は7倍くらいだったと思います。自分で言うのは情けないですが、それくらい小牧は圧倒的な優勝候補でした。それでも本番になれば何が起こるか分からないのがスポーツの良さです。小牧がミスをした際に絶対に優勝をもぎ取れる位置に立てるよう、準備を進めてきました。本番は不整地区間が普段のスプリントより比較的長く、多くのチョイスがあることが予想されていたので、戦略として「とにかくスピードを出して走るためにシンプルかつ最悪でないルートを選択すること」「ハイスピードの中でも先読みをし続けること、ミスをしないこと」を掲げました。そしてこの戦略の精度を高めるため、早稲田や自宅周りのストリートマップを使ってスプリントに明け暮れました。

迎えた本番は練習してきたことを存分に発揮できました。ルートは最善ではなかったものの、常に高速下でナビゲーションを維持し、ほぼ満点のレースが出来ました。結果として小牧に40秒も負けてしまいましたが、ロングの表彰台で遠かった小牧の隣に自分がいて、その隣には一緒に練習してきた森清がいたことは非常に幸せでした。学生の中に8回あるインカレも残すところ1回になってしまいましたが、春も小牧の隣に立てるように、そして今度は自分が一番高いところに立てるように走り続けます。

最後にはなりますが、厳しい情勢にも関わらず素晴らしいインカレを用意して下さった運営者の皆様、日頃からあたたかく支え、共に高めあってくれたOC含め全国の皆様には心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

#### 3 森清 星也 0:14:05 早稲田大学

中高生の時は東海中高で部長を務め、部員と共にインターハイ(中高生の選手権大会)を目指してきました。また、運営の御厚意で高校生の中からインカレの前走をさせて頂き、インカレを間近で見させて貰いました。だから、大学生になってインカレの場に向けて仲間と努力していくことはとても楽しみでした。インカレに必死に取り組む人。仲間の勝利を泣いて喜ぶ人。インターハイや全

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

日本大会とは一味違う、そんなインカレに憧れていました。

しかし、コロナで仲間に出会うことすら許されず、難しい時期を過ごしてきました。もちろん、これは他の人も同じだと思います。なぜ自分はオリエンテーリングをするのか、インカレに出て何になるのか、そんなことを考えたりもしました。

そんな思いを持ちながらも全日本リレー大会に行き、そこで4年生の大石選手を始めOCのメンバーに会い、話をしました。その中で、インカレに向けて共に頑張りたいという想いが強くなり、インカレに出る決心をしました。

インカレロングに出なかったことは勿体無いと少し感じていますが、インカレスプリントでの結果がとても嬉しいです。なにより、大石選手と表彰台に並び立つことができたのが一番嬉しかったです。また、自分が見てきたインカレを、競技者の立場から肌で感じることもできたのが良かったです。

インカレに向けて一生懸命頑張るといえるのは楽しいですね。インカレリレーに向けて、これからもOCや早稲田の仲間と切磋琢磨し、悲願の優勝を成し遂げます！

最後になりますが、この状況の中で大会を開催するためにご尽力を下さった方々、本当にありがとうございました。この場をお借りして、感謝申し上げます。

#### 4 太田 知也 0:14:06 京都大学

ロング・スプリントの2種目入賞を達成できたのは、嬉しいとともに驚きもとても大きいです。出走前、ロング1回きりにはしたくないという思いもありつつ、やはり自身よりも実力が上の選手が多くいる中で不得手なスプリントでの入賞は厳しいのではないかと不安も多くありました。その中で最後までレースの流れを絶やさず十数秒差で入賞に滑り込むことができて本当に良かったです。

また、昨年度はポスト飛ばしで失格だったということもあり、自身への戒めとともにみんなに記録を残して帰ってほしいということで「失格者を出さない」という目標も持って臨み、結果多くの人が決勝に進むことができ、こちらとても嬉しかったです。

入賞できた要因の一つとして NaviTabi を用いた練習をたくさん行っていたことが大きかったかなと思います。NaviTabi で住宅街でいろいろなコースを組み、とっさのルートチョイスを考えたりハイスピードで地図を読む練習をしていたことで、今回の人工柵による大胆なルートチョイスを行うコースにうまく対応できたように思います。

ただ、ロングも然り、上位の選手に比べればまだまだ努力も実力もかなわないので、インカレミドル・リレーが無事開催されることを願って頑張りたいと思います。

最後にはなりませんが、実行委員長の谷野をはじめ、インカレスプリント開催に向けて尽力してこのような舞台を作り上げてくださって、本当にありがとうございます。とても楽しい大会となりました。

#### 5 本庄 祐一 0:14:11 東京大学

改めて、この大会を運営して下さった方々に感謝申し上げます。素晴らしい大会をありがとうございました。

応援してくれたOLKの方々、声援が力になりました。ありがとうございます。さて、二年生で、二度目のインカレスプリントへの出場となった今回ですが、MUFで表彰台にも立てなかった去年に比べてだいぶ自分なりに成長できたのかなと思います。

何が伸びたのか自分なりに思い返してみると、走力だけではないとはっきりと言えます。走力はまだまだトップの人たちには敵わないですし、巡航もそこまで出ていません。

僕が去年から伸びたと思うのは、スプリントへの「慣れ」です。慣れたんです。スプリントで今回の入賞ラインはコースを通じてキロ4:10くらいで回ってくればいいものでした。キロ4:10で3.5km程度なら走り切れる人が多いはずですが、でもタイムが出ないのは自分も含めてそのスピードが出せていないから。スプリントで最も効率よくタイムを出すためにはと考えた時に僕が出した答

えが、「いつものスピードを出せるようになればいい」というものでした。それを意識するようになって、地図を読む精度は一時期大幅に低下しました。それはそうですね。でもそこからだんだんと地図読みもナビゲーションも向上し、まだまだ足りませんが、表彰台に立てるくらいには成長できました。これがスプリントへの「慣れ」だと思えます。来年のインカレスプリントに向けて、また来たるインカレミドル・リレー・ロングに向けてあと何段階も成長しないといけないことはわかっています。2年生の僕には伸び代はまだあると思っているので、成長を続けたいと思います。ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

## 6 金子 哲士 0:14:20 東北大学

最後のインカレスプリント、4年間で初めて選手権クラスで入賞することができ嬉しく思います。応援してくださった東北大 OLC のみんな、OBOG・オフィシャルとして支えてくれた先輩方、そして最高の舞台を用意してくれた運営の方々、ありがとうございました。特に今年のスプリントは地図のテープ表記や現地の立ち禁テープなど、随所に運営の方々の工夫が見えて感動しながら走っていました。

今回、頑張れたのはインカレロングの影響が大きいのかなと思います。自分含め、東北大 OLC ではインカレロングで目標を達成できなかった人が多かったかと思えます。しかしそれがこのインカレスプリントに至るまでの危機感につながり、多くの人が高いモチベーションでトレーニングしていたように思えます。その結果、男子選手権の決勝には東北大から全体の 1/4 を占める 15 人が出場でき、また自分も周りの熱に背中を押され、なんとか入賞に食い込むことができたのかなと思います。

さて、来春のインカレミドル・リレーに向け、自分含め東北大生は例年よりも遙かに強い熱をもってトレーニングに取り組んでいます。私も入賞することができたとは言え、なお開いたままのトップとの差を見せつけられ、今まで以上に強い覚悟を決めてミドル・リレーに向けて準備しています。ミドル・リレーで優勝するのは東北大だと、そう宣言して入賞コメントを終えたいと思います。

## 2.2 スプリント競技部門 女子選手権

### 1 伊部 琴美 0:13:38 名古屋大学

この度は本当にインカレスプリントを開催していただきありがとうございます。

今回元日程での開催が不可となったとき、幹事会でも話し合っただけでこんなご時世で運営の負担もすごいのでなくなってしまうのかなと思っていました。私個人としてはすごくやりたかったので谷野君が実行委員長をやって開催に向けて動いてくれると知ったときはとてもうれしかったです。少しでも手伝おうと思って出場のできる形で運営のお手伝いをしました。学生で出場せず運営をしてくださった方々には頭が上がりません。本当にありがとうございました。

インカレスプリントは3連覇したいとずっと思っていました。なんとか走力はコロナ前に近いぐらいは戻せていたので本番直前は毎日のようにスプリント練習をして感覚を戻していました。でも今年度は他の選手との比較ができる機会もあまりなく不安でした。

当日は快晴で穏やかな天気ですプリント日和でした。予選は数秒差で2位になってしまい焦って、決勝の待機時間はすごく緊張しました。でも最後のインカレスプリントだし、走れるだけでも幸せだ、後悔ないように楽しもう、と言い聞かせていました。決勝のコースは予選よりも難しかったですが、走っている最中はあらゆる所に観戦者の方がいて「頑張らない」という気持ちになれました。優勝が決まったときは本当に嬉しくやり切った感じがしました。予選も決勝も素晴らしいコースでとても楽しかったです。

本当に今回開催されることが当たり前じゃなく幸せなことなのだなと思いました。今後も開催できるかは難しい問題になっていますが、できる限り協力したいと思います。すごく楽しい大会を開いてくださりありがとうございました。

### 2 阿部 悠 0:14:34 実践女子大学

コロナの影響で公園でのスプリントが難しい中インカレスプリントを開催していただきありがと

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

うございます。今回のインカレスプリントでは現役学生も運営する形となっていました。実行委員長の谷野さんをはじめ、様々な人の思いや支えによって開催された大会なのだと、レースを通して強く感じました。本当にありがとうございます。

スプリント競技は好きではあるけれど、毎回レースでは1分ミスをしてしまいレースは速くはなかったです。しかし、今回準優勝と自分の中では良い結果を出すことができ、とてもうれしかったです。目標としていた先輩方に追いつくことができ、競ることもでき自分の成長も感じることができました。

競技についてはとても楽しかったです。予選ではプースサイドの中をオリエンテーリングし、普段走ることのできない場所で走ることができ気持ちが高ぶりました。決勝では、スタートから応援している部員の姿を見ることができ、緊張をほぐすことができました。また、レース中に色々なところから応援の声が聞こえ、最後まで頑張ることができました。コースは予選と難しさが全く違いナビゲーションに時間がかかってしまったり、正解のルートを走ることができなかつたりしたけれど、楽しいという気持ちが大きかったです。

こんなにも素晴らしいインカレスプリントを開催して下さった運営者の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

### 3 世良 史佳 0:14:37 立教大学

最初に、今年のインカレスプリントが本当に本当に楽しかったです。予選決勝方式、人工柵を使った難しいコース、テレイン内のどこでも観戦できる体制、スタート直後に会場を通る形式、YouTubeのライブ配信など、どれもレベルが高く興奮しました。これほど素晴らしい大会で競技者として挑戦させて頂けたことが本当に幸せでした。様々な準備をありがとうございました。

私はスプリントに苦手意識を持っており、インカレ前に少しでも良いレースをして自信につなげたいと考えていました。そんななか参加した東北大学オリエンテーリング大会前日大会では、序盤のレグで飛んでしまいなかなかリロケートができず、決勝に進むことが出来ませんでした。その時、インカレでも同じようなミスをしてしまったらどうしようと弱気になってしまいました。

ですが、レースが始まる前から気持ちで負けてはいけないと思なおし、飛ばないようにするためにはどうすればいいのか、現口スした際のリロケートの手順などを丁寧に考え、対策をしてから大会に臨みました。そのため当日は自信をもって走ることができ、これが今回の結果につながれたと感じています。もうインカレスプリントに参加することはできませんが、これからもスプリントが上手になりたいと思うきっかけになりました。

最後に、新型コロナウイルスによる大変な状況の中で、こんなにも素晴らしいインカレの舞台を作って下さった大会関係者の皆様、大会開催のために自分の競技を諦めて運営をして下さった学生の皆様、全ての関わって下さった皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

### 4 小林 祐子 0:14:39 東北大学

私はスプリントがずっと苦手で、練習してもあまり上手くなれなかったのが楽しくなく、秋インカレではロングの方に重点を置いてスプリントの結果にはあまりこだわっていませんでした。そして、当初予定されていた秋のインカレスプリントが中止となり、もうスプリントは引退だと思っていました。しかし、12月にインカレスプリントの開催が決まり、もう一度スプリントをできるチャンスが生まれました。しかも、今回は単日開催のためロングに逃げることはできません。今年で現役最後というのもあって頑張りたいと思い、入賞を目標に掲げ、少しでも上手くなるためにスプリントの練習をたくさんしました。先読みして止まらないようなスプリントはできるようになりましたが、止まって地図を読む自分のスタイルで、ミスをしないことを第一に考え本番に挑みました。

そして結果は4位でした。今までに比べたらかなりミス率を抑えることができ、先日のインカレロングで学んだ今できる一番のレースをする、という目標を半分くらい果たすことができました。2位まで5秒差だったことは悔しいですが、この悔しさは春インカレで晴らしたいと思います。春インカレでは一番良い色のメダルを獲れるようにもっともっと頑張ります。

最後に、一度は中止になり延期開催も危ぶまれる中、このような最高の舞台を用意して下さった運営者の方々に感謝申し上げます。コースもとても楽しくて、最後の最後にスプリントの楽しさに初めて気付かせて下さいました。本当にありがとうございました。ミドル・リレーも無事に開催できることを願っています。

## 5 香取 瑞穂 0:14:52 立教大学

学生最後のインカレスプリント、悔しさや嬉しさなど様々な感情を味わえた記憶に残る一日になりました。この様な状況の中で素晴らしい舞台を用意して下さった運営者の皆様、サポートして下さいましたオフィシャル・コーチの方、応援して下さいました皆様、本当にありがとうございました。

自身のレースの結果としては、スタ1で大きなミスをしてしまい、その後も小さなミスを重ねてしまいました。原因としては、予想されていたテクニカルなコースを攻略する事が勝負の決め手だと意識しすぎてしまい、公園エリアと森林エリアでの切り替えの意識をあまり持てていませんでした。レース後しばらくは悔しさで頭が一杯でしたが、しっかりと反省をしてこの悔しさを無駄にしないようにします。とは言いつつも、インカレという舞台で5位入賞をさせて頂けたのは本当に恵まれていることであり、嬉しい気持ちも大きかったです。入賞できたのも、共に練習に励んだOLKの皆や、いつも速くて憧れの存在であり続けてくれた全国同期の存在が大きかったです。4年生なのでインカレスプリントは最後になってしまいましたが、どこかでリベンジ出来るように引き続き練習していきたいです。

また、応援することがとても楽しかった大会でもありました。予選決勝方式ということもあり、いつもより沢山の人の応援が出来たこと、一生懸命ゴールに向かって駆け抜けている姿を間近で見られたことがとても楽しくて盛り上がりました。来年もインカレスプリントが開催されることになったら、後輩達の有志を応援することがとても楽しみです。

## 6 水上 玲奈 0:15:25 東北大学

まず、自分の成長を支えてくださった先輩方、一緒に沢山頑張ったり、レース中応援してくれた仲間たち、運営の方々に感謝の気持ちをお伝えします。天気もテレインも良くて、素敵な大会でした。どうもありがとうございました。来年のインカレスプリントがとても楽しみです。

正直、入賞は自分から遠いものだと思っていました。努力する前から諦めていました。走ることも苦でしかなくて、あまり楽しいと感じることができませんでした。こんな自分でしたが、ずっと引きこもっていた自粛期間も明けて夏休みが終わった頃に、その気持ちが少し変わりました。きっかけは自分でも未だにわかりませんが、部活仲間と練習したり、一人で遠いところまで走ったりしていたら、やっぱり頑張りたいと言う気持ちが芽生えてきました。気づいたら意味分からないくらい走り回って、入賞していました。素直に嬉しいです。

しかし、1位とはほぼ2分の差もあって、7位とは13秒の差しかなくて、嬉しくても満足できません。今回が最初で最後の入賞となったら、ちょっと悲しいかもしれません。もっと頑張りたいです。そして、私の入賞がこれから入ってくる新入生たちのモチベーションとなれば光栄です。

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

## 3

## 競技結果と解説

コース設定者 上島 浩平（慶應義塾 2015）

## 3.1 コース設定にあたって

## ▼3.1.1 コンセプトの設定

コンセプトの設定に際し大きく影響を及ぼすのがテレインのタイプである。本大会で使用する那須野が原公園は次のような特徴を有する。

- ・ 広大な土地にオープンや森林、河川、人工的な建造物が遍在し、それぞれのエリアでフィールドの特性が大きく異なる。
- ・ 公園の大部分において通行不能な障害物が少なく、ルートチョイスの設定に工夫が必要である。
- ・ フォレストエリアの範囲が大きく、公平な競技の設計に注意が必要である。コントロールの発見に運の要素が絡むほどルートチョイスによって生じた差が容易に覆されてしまうからである。

これらを考慮した上で、予選と決勝のエリアを分け、公園南東の人工的な建造物が密集するエリアと起伏のある森林部を予選で使用、北から南西にかけての平らで道や水系のネットワークが複雑なエリアを決勝に使用することとした。それぞれのコンセプトは次のように定めた。

## [共通]

IOF フットオリエンテーリング競技規則<sup>1)</sup>の『付録6：競技の構成』で述べられているスプリント競技の原則を満足するよう心がける。特に「スプリントは、競技者が高速で走りながら、複雑な状況下で地図を読み解釈する力、ルートチョイスをプランし実行する力を試す。」の文言に従うようなコース設定を目指す。すなわち、複数のルートチョイスを有するレグを可能な限り多く設定し、スピードの出る環境下で正しい“選択と判断”が行えるかを常に問いかけるコースとする。

## [予選]

できるだけ多くの方にスプリント競技の醍醐味である“非日常感”を楽しんでもらうため、予選でプールエリアを使うこととした。

複雑な形状のプールエリアとその出入り口が複数箇所あることを効果的に利用し、細かなナビゲーションと手続きの正確さを問う。併せて山塊部の利用により、脚力や持久力を含めた総合的な実力を問う。

## [決勝]

スプリント競技の最も大切な「スピード」を試す。道のネットワークを主体とした大胆なルートチョイスを問い、予選以上に“選択と判断”の正確性がタイムに直結するコースとする。また、コロナ渦でスプリントを行う機会が減っているが、その状況下でどれだけ競技に向き合ってきたかというスプリントに対する愛を測るコースを目指す。

## ▼3.1.2 コンセプト達成のための工夫

## ▽人工障壁の設置

ルートチョイスを生むための障害物がテレイン内に不足していたことから、人為的にフェンスを立て障壁とすることを決めた。ただし、5.3.7 項にて記載されているように人工障壁の総距離

<sup>1)</sup>[http://www.orienteering.or.jp/archive/rule/IOF\\_Foot\\_Orienteering\\_Competition\\_Rules\\_2020\\_Japanese%20edition.pdf](http://www.orienteering.or.jp/archive/rule/IOF_Foot_Orienteering_Competition_Rules_2020_Japanese%20edition.pdf)

に制限があったため一部を青黄テープで代用した。地図表記では人工障壁を設置した箇所には ISSprOM2019<sup>2</sup>の記号 518「通過不能の柵または手すり」を使用した。青黄テープを張った箇所には記号 708「立入禁止の境界」を使用した。なお、この記号 708 の使用には注意を払った。というのは、コース記号と同色であるためレース中での識別が困難になる恐れがあるからである。従って、過去の国際大会での事例を参考に以下のような条件で使用することとした。

- ・ 青黄テープは設置箇所の片側のみ通行が想定される場合に限る。両側を通行する可能性がある場合はフェンスによる設置とする。
- ・ 青黄テープを短い距離で使用しない。
- ・ 公園内の通行路を塞ぐ形で使用する場合は記号 709「立入禁止区域」によるクロスハッチングを併用する。
- ・ テクニカルミーティングで記号の例示を行う。

今回はテレインやリソースの都合上やむなくこのような形を取ったが<sup>3</sup>、プランナー個人の考えとしては記号 708 の過度な利用は避けたいところである。今後同様な課題が出てきた際も、競技者にとって最も適切な形は何かを問い続けることが重要である。

### ▽フォレストエリアでのコントロール位置

フォレスト種目でのようなコントロールへのアタックが難しすぎる位置は極力避けた。また、一部方向から難易度が高くても、別の方向からは線状特徴物を辿ることで容易に到達できるような位置とし、競技者のリスクテイキングを問うような課題とした。

### ▽演出のためのコース設定（決勝のみ）

会場での観戦やライブ配信において選手の様子やルートチョイスをできる限り追えるようなコース設定を行った。特にスタート位置からスタートフラッグまでの導線およびビジュアルコントロールとラストコントロールの位置の大まかな位置をコース設定の最初の段階で決めておき、コースを洗練させていった。

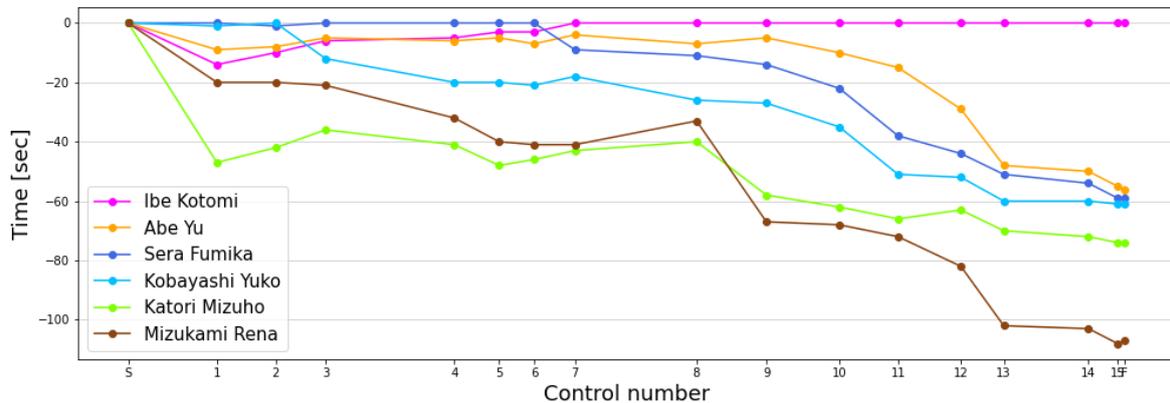
### ▽国際大会レベルの競技性を意識

世界選手権やジュニア世界選手権などの国際大会のコースを参考にし、できる限り現代のスプリント競技のトレンドを反映するよう努めた。特に、新しい取り組みを行う際やコース設定に制約が生じた場合は、競技責任者や競技副責任者と検討を重ね、過去の事例を基に判断するよう心掛けた。

<sup>2</sup>[http://www.orienteering.or.jp/archive/rule/rule\\_037.pdf](http://www.orienteering.or.jp/archive/rule/rule_037.pdf)

<sup>3</sup> 2020年10月のスウェーデン選手権でも同様にテープと記号 708 の利用が観測されたのが後押しとなった。

## ▼3.2.1 レース展開



## トップとの積算タイム差 [女子]

横軸はコントロール番号を表す。間隔はレグ長に応じた比率になっている。

縦軸は各コントロールにおけるトップからの積算タイムの差を表す。

各コントロールにおける積算タイムのトップとの差を図に示す。伊部選手（名古屋大学4年）が圧倒的なタイムで優勝となった。始めにスタート直後の1番コントロールで大きく差がついた。特に香取選手（立教大学4年）はミスタイム44秒を計上したがその後の走りで粘りを見せた。3→4のレグで上位3人がその他を引き離し、またこの時点で入賞ラインがほぼ定まった。続く4・5・6番コントロールでは順位変動は起こらず、6→7で世良選手（立教大学4年）が大きなルートミスをしたことでトップの座を伊部選手に明け渡す。7→8で水上選手（東北大学2年）がレグ順位2位と5秒も差をつける走りで追い上げを見せるが、次のレグで大きくミスをしてしまう。以降順位はそのまま勝負は決着した。しかしながら終盤における伊部選手の他を突き放す驚異の走りが2位以下と56秒差をつける結果を生んだ。また、2位の阿部選手（実践女子大学3年）と3位の世良選手の差は3秒、3位の世良選手と4位の小林選手（東北大学4年）の差は2秒と、かなり接戦で、最後まで目が離せない展開となった。6位の水上選手は5位の香取選手から33秒離れているが、7位と13秒、8位と43秒と大きく差があり、入賞者のレベルの高さが伺える結果となった。

## ▼3.2.2 コース解説

それぞれのレグに対し、設定した意図と入賞者のルートについて考察を述べる。各選手のルートは凡例の通りである。なお、ここでは主に実際のタイムに従って比較を行う。距離によるルート比較と各レグの攻略ポイントは観戦ガイド<sup>4</sup>に記載しているため、適宜参照して頂きたい。

→→→	優勝	伊部琴美(名古屋4)	13'38"
- - - - -	準優勝	阿部悠(実践女子3)	14'34"
.....	3位	世良史佳(立教4)	14'37"
.....	4位	小林祐子(東北4)	14'39"
.....	5位	香取瑞穂(立教4)	14'52"
- - - - -	6位	水上玲奈(東北2)	15'25"

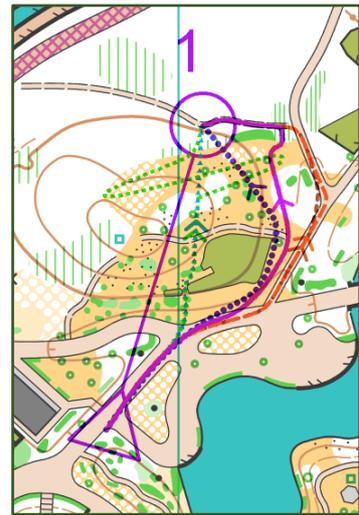
<sup>4</sup><https://drive.google.com/file/d/1t349tYnAqv8ZkB3DeyT5z4kfTax9CkKr/view?usp=sharing>

### S → 1 (男子 S→1 と共通)

全てのレッグの中で最も難易度が高くなったレッグである。その要因としては、スタート直後に観客の目の前を通り気持ちが高ぶっていること、ゆるやかな尾根を越えるために方向維持が難しいこと、ポスト位置は一步林に入ったところであるため意識しないと視認しづらいことなどが考えられる。

また、このレッグは距離と登りのトレードオフを問うた。花壇右端を通る世良選手のルートとまっすぐめの小林選手のルートはほぼ同じタイムだったが、それより膨らむルートは時間がかかるようだ。

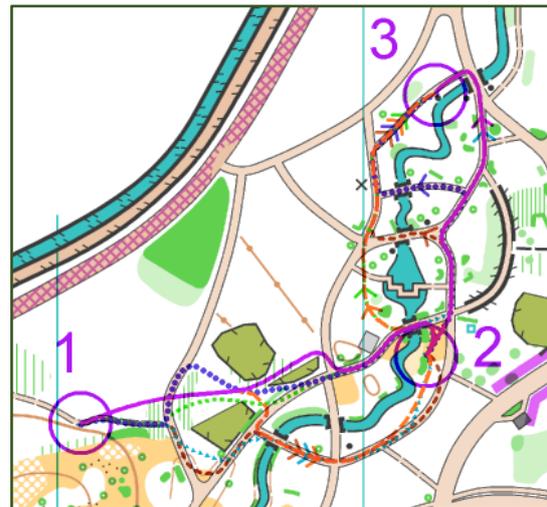
▶世良 1'09" ▶小林 1'10" ▶阿部 1'18" ▶伊部 1'23"



### 1 → 2 (男子 1→2 と共通)

養生エリアの間を通り抜けるルートが早かったようである。地図上では簡単そうに見えるが、実はオレンジ色表記の記号はナビゲーションにおける扱いが難しい。なぜなら、この記号は私有地や花壇、その他立入禁止の領域を示すものであるが、その詳細が地図からは判別不能だからである。そのため、頭の中で実際のイメージを立てることができず、ミスに繋がりがやすい。海外の市街地スプリントが難しいのはこの理由が大きい。自信を持って通行できることはなかなか凄いことである。

▶香取 0'47" ▶伊部 0'48" ▶阿部 0'51"



### 2 → 3

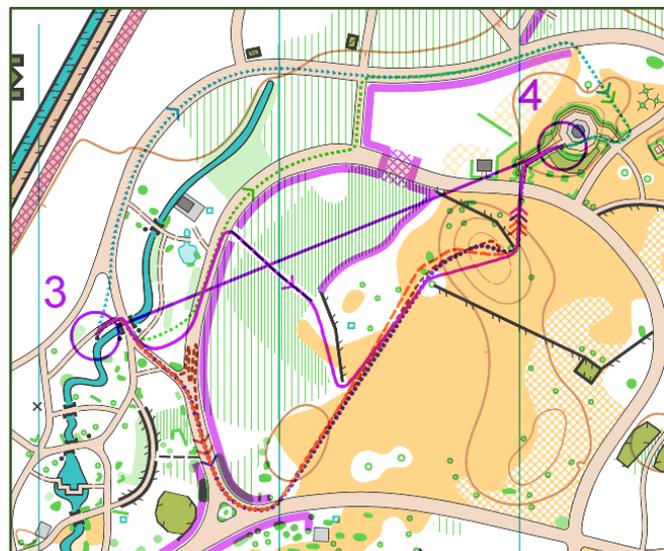
続く 3→4 のルート選択を考えにくくさせるためのショートレッグ。同じような曲がりや橋が沢山あるので、マップコンタクトと現地確認を密に行うことが大切である。どのルートでも大きな差は生じなかったが、小林選手がここでミスをし、1位から4位に転落した。慎重さが求められるレッグであった。

▶香取 0'39" ▶伊部 0'41" ▶阿部 0'42" ▶世良 0'44" ▶水上 0'46" ▶小林 0'57"

### 3 → 4

もっとも距離が短い伊部選手のルートが最速で、次点の長さの世良・阿部選手ルートが次に速い、という、距離がタイムを決定する原則をシンプルに示す結果となった。レッグ難易度も3番目に高く、前述の通り、この区間が入賞とそれ以外を大きく分ける要因の一つとなった。

▶伊部 1'43" ▶世良 1'44"  
▶阿部 1'45" ▶香取 1'49"  
▶小林 1'52" ▶水上 1'55"



目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

**4 → 5 (男子 4→5 と共通)**

池やピークを挟んだ 5 番コントロール側へのどの地点で移るかを判断させるレグ。手前で移るほどナビゲーションは簡単だが、伊部・阿部選手ともに中洲を通るルートであった。

▶伊部 0'36" ▶阿部 0'37" ▶世良 0'38" ▶小林 0'38"

**5 → 6**

池まわりの細かなレグ。3→4、7→8 にて大きなルートチョイスを問うのでアクセントとして設定した。視線が足元に落ちがちだが、遠くを見て池の輪郭を捉えることがポイント。

▶香取 0'27" ▶伊部 0'29" ▶世良 0'29"

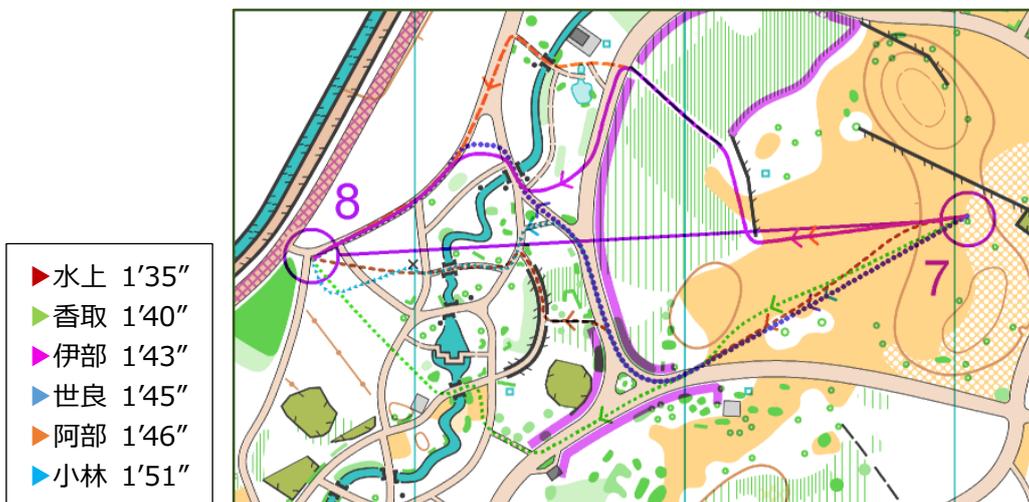
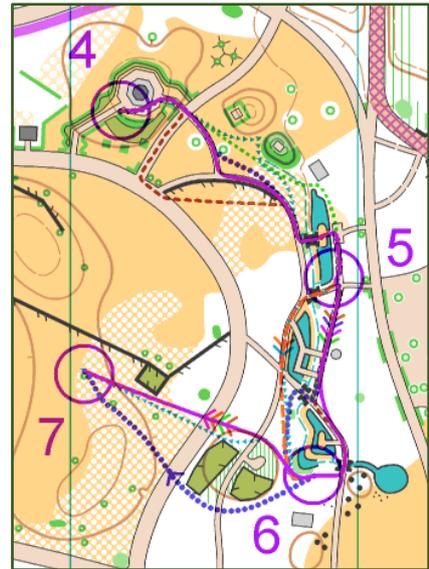
**6 → 7**

つなぎのレグ。6 番コントロールからの脱出時にすばやく方向を右に変えないと南回りに流されてしまう恐れがあった。ここで世良選手がミスタイム 11 秒を生み 1 位から脱落した。

▶伊部 0'33" ▶阿部 0'33" ▶小林 0'33" ▶香取 0'33" ▶水上 0'36" ▶世良 0'45"

**7 → 8**

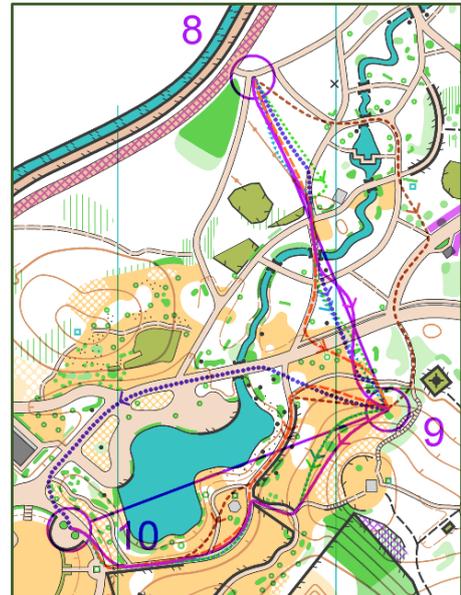
前半で 2 通りにルートが分かれたあと、後半で多様なルートチョイスを問うレグである。北回りはナビゲーションと 8 番コントロールへのアタックが容易だが、距離は長い。南回りは終盤の複雑な小計のネットワークの処理が難しく、逆に距離は短い。レグ順位 1 位の水上選手は最も距離が短い茶色のルートを選択した。水上選手と入賞者内最遅の小林選手の差は 16 秒もあるが、小林選手のレグ順位は 8 位であり、このレグにおいてかなり差がついたと考えられる。



## 8 → 9

レッグ線方向に進めばよい比較的単純なレッグだが、8番コントロールからの脱出で道につられず森の中を直進するには少しかけ勇気が必要。入賞者は水上選手以外真っ直ぐのルートだったが、西回りを選択した選手も何人か見られた。

▶阿部 0'55" ▶伊部 0'57" ▶小林 0'58"



## 9 → 10 (男子 11→12 と共通)

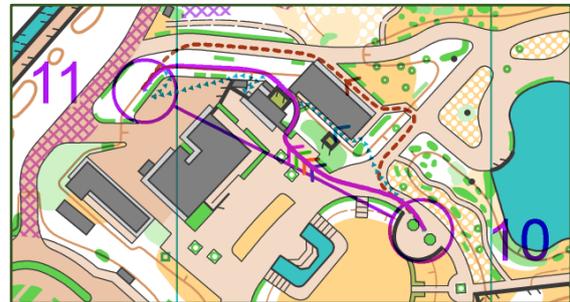
想定ベストルートは池の直上を通るルートだったが、女子入賞者には選択した者はいなかった。とりわけ1位伊部選手・2位水上選手のルートにはできるだけ最短距離を進もうという意思が感じられる。

▶伊部 0'58" ▶水上 0'59" ▶香取 1'02"

## 10 → 11 (男子 12→13 と共通)

伊部選手が突出して速い。このエリアはいままで公園のエリアから打って変わって細かくなり、俊敏な方向転換が求められる。距離が最短なのは小林選手のルートだが、等高線1本分の高さで舗装路の段差 (ISSprOM2019によると舗装区域の縁で段差が表される場合もあるため注意が必要だ) により最速とはならなかった。

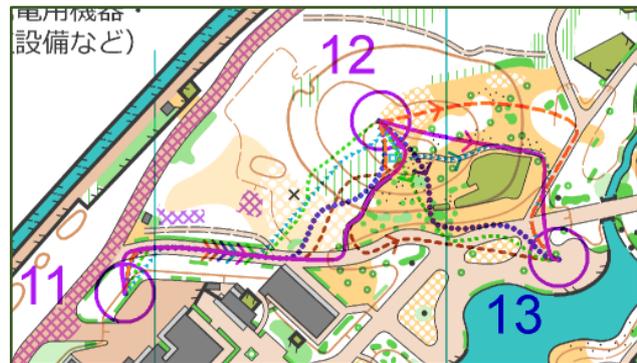
▶伊部 0'45" ▶香取 0'49" ▶水上 0'49" ▶阿部 0'50" ▶世良 1'01" ▶小林 1'01"



## 11 → 12 (男子 13→14 と共通)

11番コントロールからの脱出方向と12番コントロールへの登りにどこを走るかがポイント。最速は阿部朱莉選手 (東京理科大学3年) の0'49"である。伊部選手のようにやや距離は伸びるが徒歩道を使うのも斜面を登る上で有効である。

▶香取 0'51" ▶伊部 0'54"  
▶小林 0'55" ▶世良 1'01"



## 12 → 13 (男子 14→15 と共通)

伊部選手がレッグ順位2位と驚異の7秒差を叩き出した。シンプルなルート取りかつ下りの傾斜を分散させたことがトップスピードの維持に繋がったように思う。

▶伊部 0'30" ▶世良 0'37" ▶香取 0'37" ▶小林 0'38" ▶水上 0'48" ▶阿部 0'49"

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部 (決勝) スタートリスト

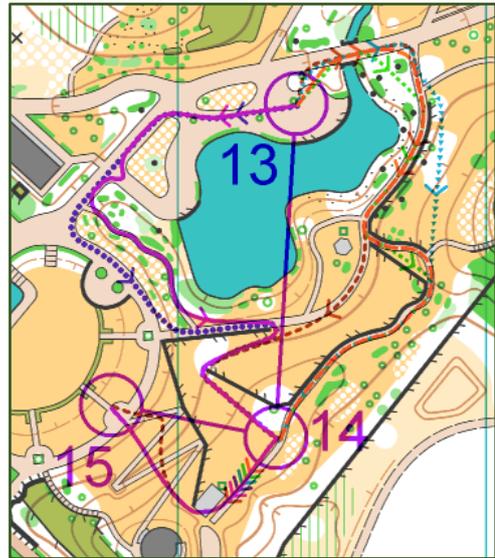
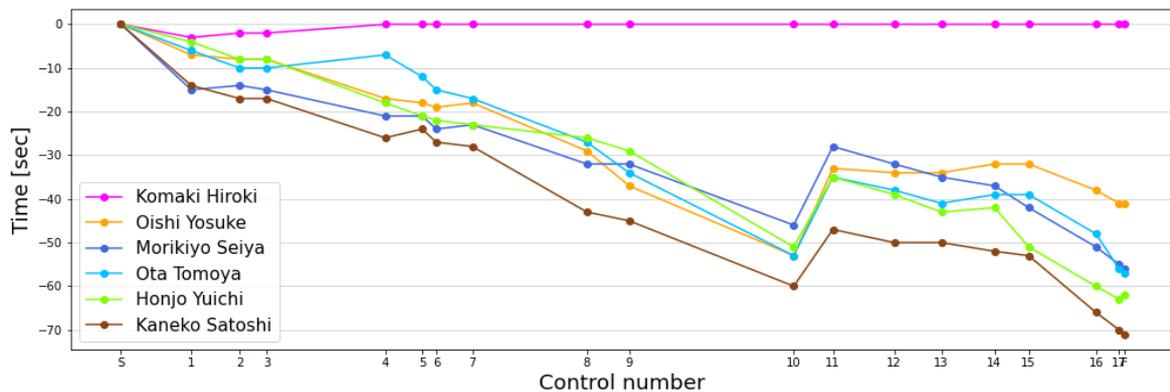
大会役員一覧

寄附協力者一覧

**13 → 14 (男子 15→16 と共通)**

最後のルートチョイスを問うレグ。伊部・小林選手がトップタイムを記録した。ベストルート想定は小林選手のルートだったがそれより 40m も長いルートでの伊部選手の速さたるや。撮影のため追走したが、想像以上のスピードに驚かされた。また、水上選手のルートは想定したルートの中では距離は最長だが、その走りは見た瞬間にこれは入賞だと直感するほどであった。

▶伊部 1'08"   ▶小林 1'08"   ▶水上 1'09"  
▶阿部 1'10"   ▶香取 1'10"   ▶世良 1'11"

**3.3 男子選手権決勝 解説****▼3.3.1 レース展開****トップとの積算タイム差 [男子]**

横軸はコントロール番号を表す。間隔はレグ長に応じた比率になっている。

縦軸は各コントロールにおけるトップからの積算タイムの差を表す。

小牧選手（筑波大学 4 年）が終始他を圧倒するレースとなった。2 位以下はレース中、度々順位が入り替わっており、最後まで結果の読めない展開になった。開始してすぐ、女子と同じく 1 番コントロールに加え 2 番コントロールにおいてミスする選手が多く、焦る気持ちをどれだけ抑えて次のレグに向き合っていたかが勝負に繋がった。森清選手（早稲田大学 1 年）は 1 番コントロール時点で 34 位であったが、以降のレグ全てでミスタイムを 5 秒以内に収め 3 位となっている。3-4 のレグでは入賞者内でも大きく差がつき、小牧選手がトップになると同時に太田選手（京都大学 4 年）が食いついていくかと思われたが、続く 2 つのロングレグにて小牧選手とそれ以外の選手の差は決定的なものになった。小牧選手は 10→11 でミスにより差を縮められたもののすぐに立て直し、その後他を寄せ付けない走りで優勝想定タイムを 1 分近く上回ってフィニッシュした。2 位の大石選手（早稲田大学 4 年）は終始安定した走り和小牧選手に劣らぬ終盤の追い上げにより、3 位森清選手と 15 秒差をつけた。16 番コントロールまで 3 位だった太田選手は最後のつなぎのレグでまさかのミスタイムを計上し、森清選手に 1 秒負ける結果となった。5 位は本庄選手（東京大学 2 年）である。入賞者内で最もミス率は低く、まだ 2 年生であることから今後の成長に期待だ。6 位の金子選手は序盤のミスに耐え、7 位の江野選手（慶應義塾大学 4 年）に 3 秒逃げ切って入賞入りを果たした。

### ▼3.3.2 コース解説

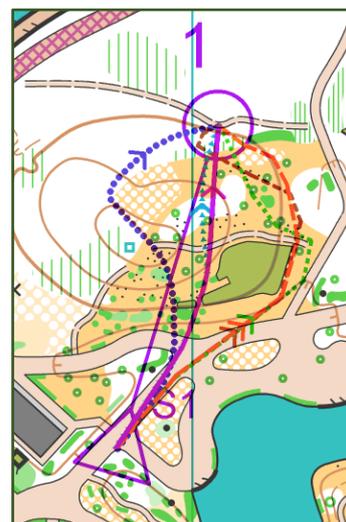
主に入賞者のルートについて比較を行う。女子選手権と共通のレグではコースの設定意図は省いた。各選手のルートは凡例の通りである。距離によるルート比較と各レグの攻略ポイントは観戦ガイド<sup>4</sup>に記載しているため、適宜参照して頂きたい。

	優勝	小牧弘季(筑波4)	13'09"
	準優勝	大石洋輔(早稲田4)	13'50"
	3位	森清星也(早稲田1)	14'05"
	4位	太田知也(京都4)	14'06"
	5位	本庄祐一(東京2)	14'11"
	6位	金子哲士(東北4)	14'20"

#### S → 1 (女子 S→1 と共通)

トップラップは谷野選手(筑波大学4年)の0'52"。ルートによるタイム差はあまりないので、自分の得意な走り方ができるルートを選択するのが良い。藪が点在しているエリアとゆるやかな傾斜面で方向維持が保てなくなったことによるミスが多いと思われる。

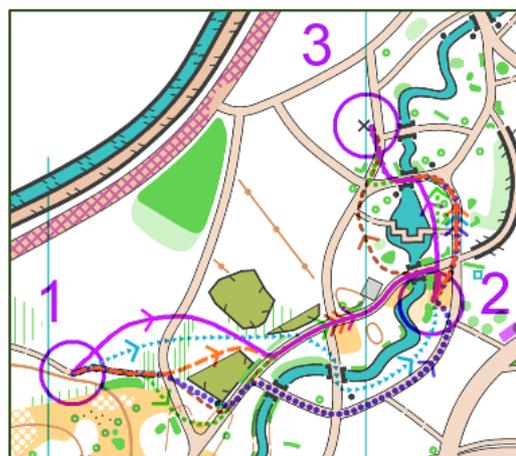
▶小牧 0'55" ▶本庄 0'56" ▶太田 0'58" ▶大石 0'59"



#### 1 → 2 (女子 1→2 と共通)

このレグは比較的簡単な想定であったが、苦戦した選手も多いようだ。地図からは簡単に見えるが、特徴物が色々あるように見えて、実はどれも高さがなく視認性は悪い。道・養生エリア・植え込み・水域どれもが腰より下の高さである。加えて、広葉樹の森であるため、遠くまでの見通しがきかない。そのため1番コントロールとは原因が異なるが、このレグでも方向の意識が重要であった。最速は朝間選手(東京大学3年)・小林選手(東北大学3年)・保莉選手(東北大学4年)の0'37"。

▶小牧 0'38" ▶森清 0'38" ▶大石 0'40"



#### 2 → 3

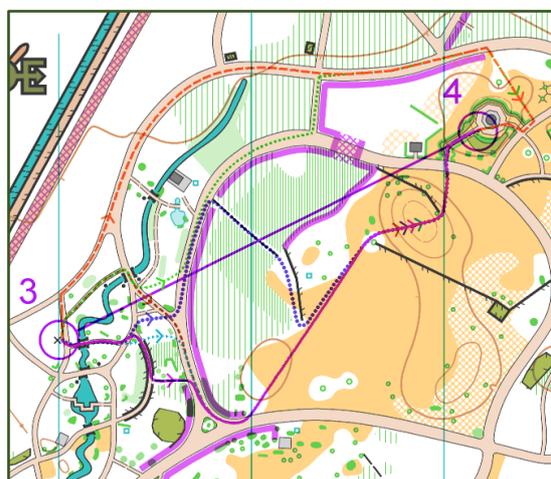
細かなエリアでの手続きの洗練さを試すレグ。入賞者の中では差がつかなかった。しかし3番コントロールに到着するまでに次の先読みが終わっているかが3→4で大きな差を生むことになる。トップラップは鈴木選手(横浜市立大学4年)の0'20"だ。

▶小牧 0'23" ▶大石 0'23" ▶太田 0'23" ▶本庄 0'23" ▶金子 0'23" ▶森清 0'24"

#### 3 → 4

一番南のルートを選択できたかどうかタイムに直結した。太田・小牧選手のルートは大石・本庄選手のルートより50m以上短く、タイムも10秒程度速い。ただ、観戦ガイド<sup>4</sup>に記載したように、南ルートを見抜き迷わず選択するのはなかなか難しい。

▶太田 1'29" ▶小牧 1'30" ▶森清 1'38"  
▶大石 1'41" ▶金子 1'41" ▶本庄 1'42"



目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

**4 → 5 (女子 4→5 と共通)**

入賞者上位4人は皆、池を中洲で渡るルートだった。トップラップは稲毛選手(東北大学2年)の0'28"。

▶金子 0'29" ▶小牧 0'31" ▶森清 0'31"

**5 → 6**

小牧選手のみルートが異なる。曲がり角が全て鈍角なのでスピードが落ちにくいようだ。1秒の差ではあるが、この積み重ねだと思知らされる。

▶小牧 0'11" ▶大石 0'12" ▶本庄 0'12"

**6 → 7**

またしても小牧選手のみルートが異なった。同様の理由であろうか。入賞者内の差はほとんど生じていない。また、6番コントロールまで2位であった保莉選手が池の飛び越えにより失格となってしまった。

▶大石 0'30" ▶森清 0'30" ▶小牧 0'31" ▶本庄 0'32" ▶金子 0'32" ▶太田 0'33"

**7 → 8**

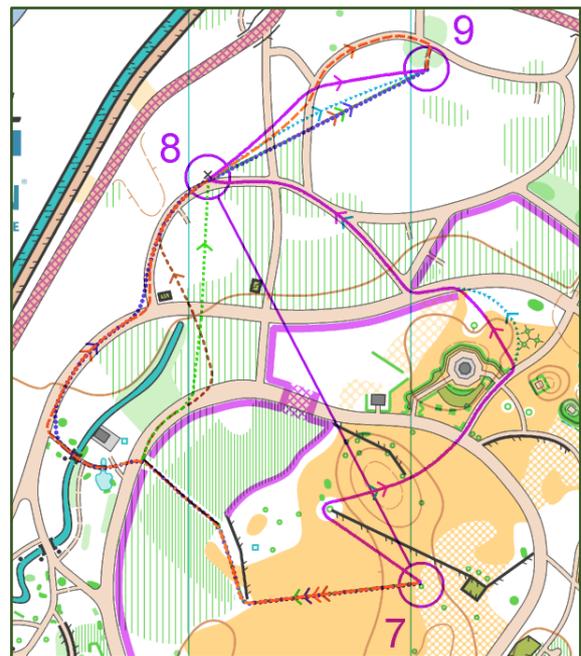
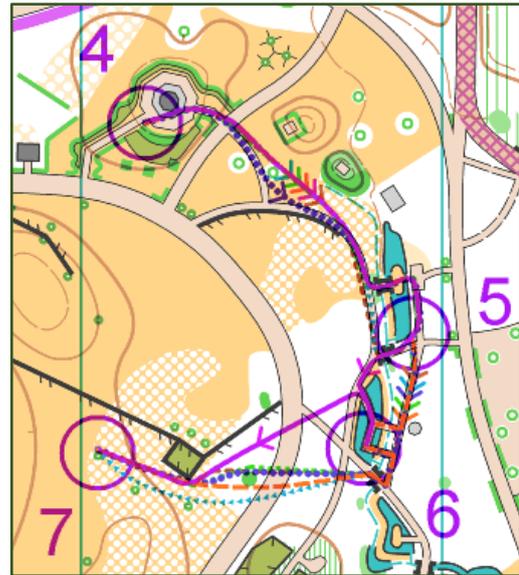
入賞者内で大きくルートが分かれた。レッグ順位2位の小牧選手は舗装路をふんだんに利用するルート、同3位の本庄選手は下草エリアを大胆に抜けるルートを選択している。特にこのレッグは走者の得意不得意を判断させるものであった。ゆえに自信を持ってルートを選択し、信じて走ることができたかがタイムのみならず心理面にも影響したことだろう。最速は二俣選手(京都大学2年)の1'25"。

▶小牧 1'27" ▶本庄 1'30" ▶森清 1'36"  
▶太田 1'37" ▶大石 1'38" ▶金子 1'42"

**8 → 9**

つなぎのレッグではあるが、まわりの景色が全く同じであるためかなり注意を要する。これまでの道辿りや開けた土地での分かりやすいナビゲーションから意識を切り替えることが大切だ。入賞者内で差が大きく現れた。

▶小牧 0'32" ▶森清 0'32" ▶金子 0'34" ▶本庄 0'35" ▶太田 0'39" ▶大石 0'40"



## 9 → 10

男子選手権クラスのメインのロングレグ。入賞者内でも多様なルートチョイスが生まれた。トップラップの小牧選手は2位森清選手を14秒も引き離し異次元の強さを見せつけた。ルート取りの上手さと力強い走りにはプランナーも仰天である。森清選手と金子選手、大石選手はそれぞれ1秒差であり、ルートはきれいに左、真ん中、右に分かれた。このレグの課題は、登りと距離のトレードオフや走りやすい路面の選択、進行方向負方向への切り返し、読図による後半への備えなど多く設定したが、やはり己の得手不得手に応じたルートの選択が1番重要である。走られた方は、9番コントロールの脱出時点でその決断が出来ていたであろうか振り返って頂ければと思う。

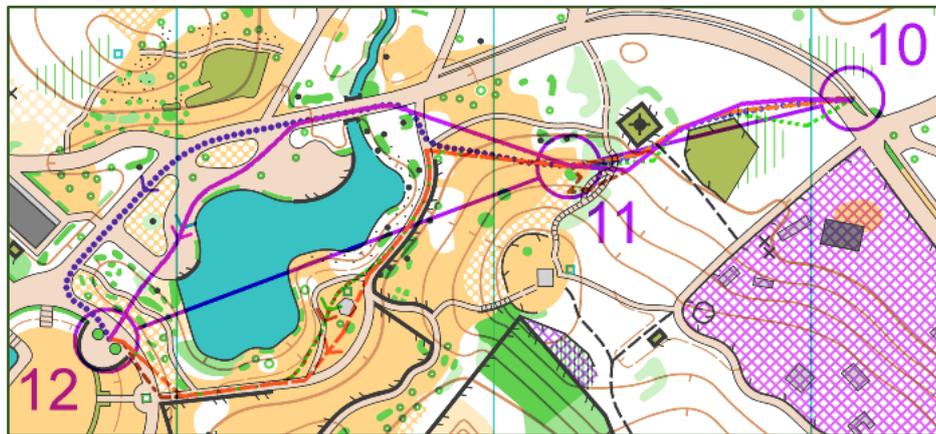
▶小牧 1'56"   ▶森清 2'10"   ▶金子 2'11"  
▶大石 2'12"   ▶太田 2'15"   ▶本庄 2'18"



## 10 → 11

つなぎのレグ。スプリントとしてはやや特殊なコントロール位置<sup>5</sup>ではあるが、視界を遮る障害物を抜けた先にポンと現れるため見えてくるまで我慢が必要。小牧選手が唯一大きなミスをした。

▶大石 0'29"   ▶森清 0'31"   ▶太田 0'31"   ▶本庄 0'33"   ▶金子 0'36"   ▶小牧 0'49"



## 11 → 12 (女子9→10と共通)

最速は池の北を通りコントロールに真っ直ぐアタックするルートの小牧選手である。大きな差こそついていないが、細かくルートを見てみると上位の選手ほど最短距離を進み、余分な走りを削っていることが分かる。

▶小牧 0'47"   ▶大石 0'48"   ▶太田 0'50"   ▶金子 0'50"   ▶森清 0'51"   ▶本庄 0'51"

<sup>5</sup> 国際大会で同様なコントロール位置がある例として世界選手権 2017 決勝やヨーロッパ選手権 2016 決勝などが挙げられる。

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

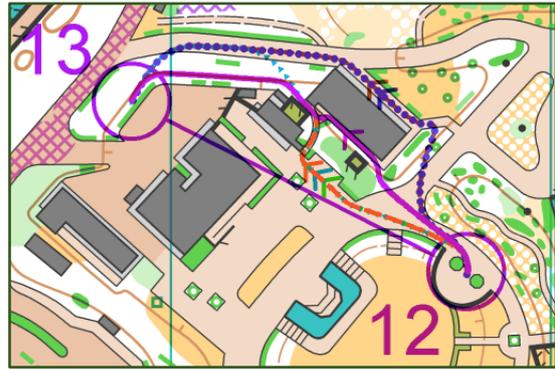
大会役員一覧

寄附協力者一覧

**12 → 13 (女子 10→11 と共通)**

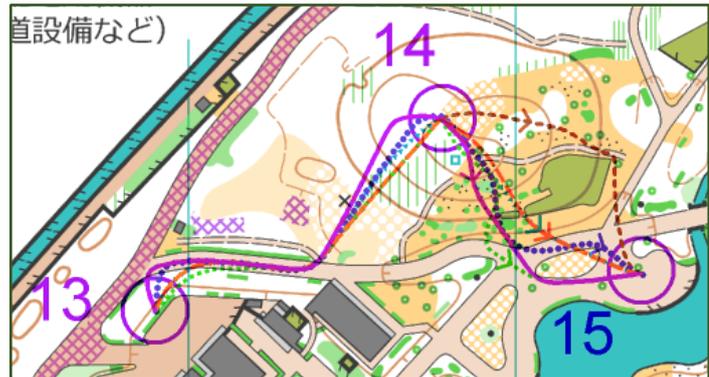
北側の3つのルートに分かれ、どのルートでも最速タイムは同じ結果となった。複雑さと距離どちらを取るかという課題であり、選手の特性がよく分かる。全体のトップラップは唐木選手(東北大学4年)の0'35"だ。

▶小牧 0'37" ▶大石 0'37" ▶金子 0'37"  
▶森清 0'40" ▶太田 0'40" ▶本庄 0'41"

**13 → 14 (男子 11→12 と共通)**

男子入賞者は皆、直登するルートを選択した。13番コントロールからの脱出の方向の正確さが僅かな差に繋がった。トップラップは藪部選手(東北大学4年)の0'40"である。

▶大石 0'41" ▶太田 0'41"  
▶本庄 0'42" ▶小牧 0'43"

**14 → 15 (女子 12→13 と共通)**

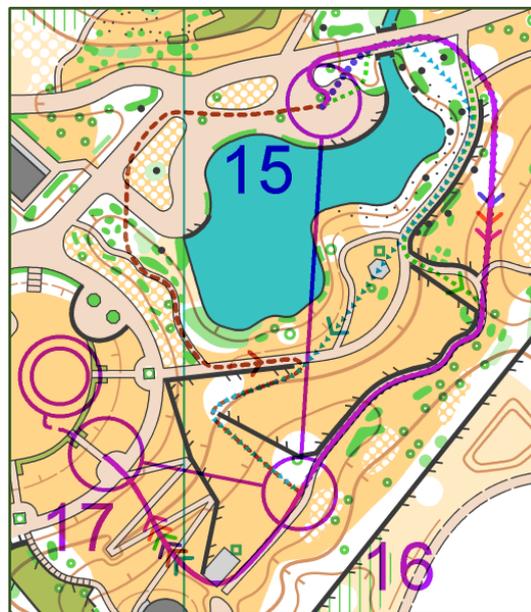
ピークを真っ直ぐに駆け下りるルートが多数を占めた。トップの3人はいずれも滑らかなルートを描いている。藪が点在するため進路が阻害されやすく、どの地点で道に出るかを意識していることが重要であった。

▶小牧 0'26" ▶大石 0'26" ▶太田 0'26" ▶金子 0'27" ▶森清 0'31" ▶本庄 0'35"

**15 → 16 (女子 13→14 と共通)**

入賞者内で大きく差がついた。森清・太田・本庄選手は同タイムであるが、この順位と最終順位は対応しており、選手の実力差を測るレッグになったように思う。特に小牧・大石・森清選手は柵の東側を通行するルートを選択しているが、このルートを選択出来た選手は本当に限られていた。レッグ順位2位(0'52")の朝間選手もその一人である。観戦ガイド<sup>4</sup>記載の通り、最も外側に最短のルートが存在するレッグというのは経験を多く積んでいないとなかなか出会わない<sup>6</sup>。プランナーの私はランニングカメラマンも担当しておりこの区画で追走をしていたが、選手がこのルートを選択するのを目にする度に感動したものである。コース設定した自分でさえこのルートを選択できるかどうか疑わしい。このような課題もあるということをこれを機に覚えていただければと思う。

▶小牧 0'50" ▶大石 0'56" ▶森清 0'59" ▶太田 0'59" ▶本庄 0'59" ▶金子 1'03"



<sup>6</sup> ジュニア世界選手権 2015 や インカレスプリント 2015 などがある。

## 16→ 17 (女子 14→15 と共通)

観客に応援されながら会場に帰還する最後のレグ。ここで太田選手と森清選手の逆転が起こった。トップラップは粟生選手(名古屋大学3年)の0'17"。

▶小牧 0'18" ▶大石 0'21" ▶本庄 0'21" ▶森清 0'22" ▶金子 0'22" ▶太田 0'26"

### 3.4 おわりに(コース設定者より)

大会成立に向けて尽力された運営者の皆様と大会のため日々努力されてきた選手の皆様に深く感謝したい。特にプランナーとして、このようなコースを世に出せたことは大変恵まれたことでもあると感じている。それはひとえに競技班のメンバーのおかげである。競技責任者の西下氏にはあらゆる要求に応じて頂いた。誰よりも競技に関する知識は深く、自分の意図を理解しようと努め実現させてくれた。競技副責任者の瀬川氏には多くの相談に乗って頂いた。困難ばかりであったが向き合ってくれたのは氏の存在が大きい。運営責任者の友田氏にはイレギュラー尽くしの状況で成功の土台を築いて頂いた。そしてイベント・アドバイザーの宮川氏には様々な面でお世話になった。非常に細かいところや自分が思い至らない点まで気を使われておりその姿勢に感銘を受けた。また、YMOE 社の山川氏には素晴らしい渉外をして頂き、地図調査者の宮西氏には大量の要望に沿って頂いた。インカレを振り返る度、コースを見返す度に背後にこのような方々含め多くの想いが詰まっていることを感じていただければ望外の喜びである。

### 3.5 調査依頼と提訴の回答

競技責任者 西下 遼介

本大会において、SIAC の記録に関して 1 件の調査依頼があった。以下に内容とそれに対する回答を記載する。

#### ▶ 調査依頼

Lap center での記録が 11 番不通過で DISQ となっているが、本人は音と光により通過を確認しているため、バックアップ(ステーション等の記録)の確認を要請する。

#### ▶ 調査依頼に対する回答

本競技は SI タッチフリーシステムを使用しているため、ステーションへの記録は残らない。また SIAC 本体にも記録が無かったため、該当選手の記録は失格(DISQ)のままとする。

この件に対する提訴は行われなかった。

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

## 4 大会運営報告

### 4.1 大会企画の経緯

大会実行委員長 谷野 文史

#### ▼4.1.1 前企画大会の中止

インカレロングと連日で開催する予定であったインカレスプリント(栃木県宇都宮市 道の駅うつのみや ろまんちっく村)が渉外上の理由により、中止が2020年7月に決定された。

#### ▼4.1.2 大会開催に向けて

前企画大会の中止を受け、今後の方針について7月の日本学生オリエンテーリング連盟(以下、日学と呼称)幹事会において議論が行われた。その結果、代替大会の開催可能性を模索することが決定された。

#### ▼4.1.3 開催地の決定

8月に(有)ヤマカワオーエンタープライズ(以下、YMOE社と呼称)山川克則氏の提案により、中止された東大大会前日大会の開催地であった「栃木県 那須野が原公園」であれば大会開催が可能ではないかという提案を受ける。これに対し日学では幹事会を開催し、本テレインでインカレスプリントを開催する方針を決定した。

#### ▼4.1.4 実行委員会の発足

例年のインカレスプリントと異なり、セレクションをする時間がないため予選・決勝方式を取り入れることを初期段階から構想を行っていた。しかし、この方式であるとインカレ実施規則を大きく逸脱してしまうため学生の合意が必要であった。そこで現日学幹事長である私が実行委員長を務めることにより、学生の意見を取り入れた、学生の合意の元での運営方法をとっていくことを決めた。また準備期間も短く、かつ運営人員が不足することが見込まれたため、社会人だけでなく学生も運営を行う体制をとることを決めた。以上の運営方針について、日学総会にて承認が得られたため、実行委員会を発足した。

地図作成業務・渉外業務・地図印刷業務についてはYMOE社へ業務委託を行った。ライブ配信業務については坂野山遊地図企画へ業務委託を行った。

### 4.2 活動実績

運営責任者 友田 賢吾

#### ▼4.2.1 運営・組織体制

本大会では実行委員会形式を取り、一部業務については(有)ヤマカワオーエンタープライズ社(以下、YMOE)および坂野山遊地図企画への業務委託契約を締結した。

また実行委員会には実行委員長を始め、選手として出場する者も含まれていたため、一部業務については競技責任者、運営責任者、イベント・アドバイザー管轄のもと管理・運用を行った。運営体制および職務分担は以下の通りである。

[運営体制]

主催：日本学生オリエンテーリング連盟、栃木県オリエンテーリング協会

共催：一般社団法人大学スポーツ協会

主管：実行委員会(関東在住者を中心とした構成)

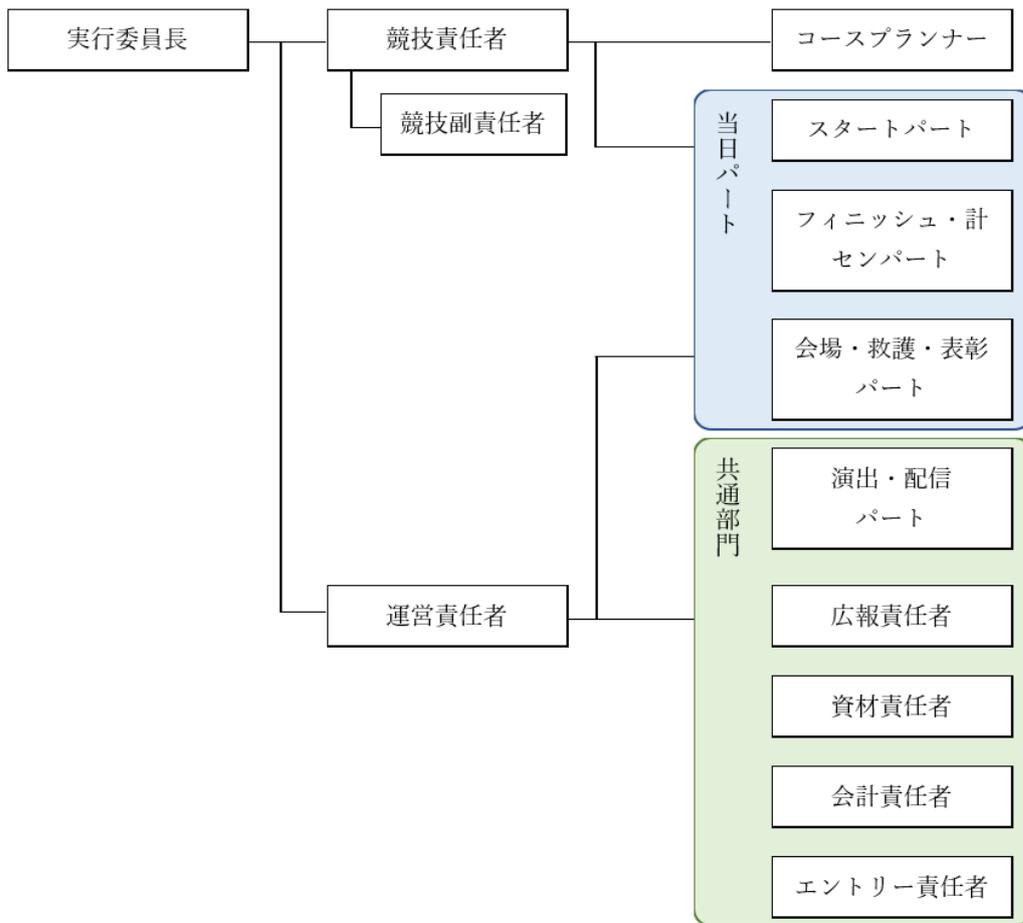
[業務分担]

実働部隊：実行委員会、イベント・アドバイザー

地図作成：YMOE(学連外注先)、宮西山野精図(YMOE下請け)

各種渉外：YMOE(地域、施設、テレイン等)、実行委員会(後援・協賛申請等)

実行委員会の全容については下図に示す。



#### ▼4.2.2 運営の全般計画と実施状況

本大会運営にあたっての全般計画とその実施状況概略を下表に示す。

年	月	当初計画	実施状況・備考
2020	9	主要役員確定 要項 1 公開	
	10	予算案作成 要項 2 公開 エントリー開始 資材リスト作成	
	11	地図調査完了 コースデータ入稿 2 週間前準備 要項 3 公開 1 週間前準備	補助金に関する申請を行った。 運営面・競技面における意思決定について主要役員会議を行った。
	12	大会当日	
2021	1	会計〆 報告書公開	

#### ▼4.2.3 実際の運用と反省, 提言

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

上記内容について、実際の運用とそれに伴う反省や提言を示す。なお、競技用地図の作成次第については 5.3 項を参照されたい。

人事

[役員選定]

開催決定の時期がイレギュラーであったため、実施規則からの逸脱はもちろん、さらに選手として出場する役員もいたため、意思決定と役割分担について例年とは大きく異なる体制となった。この点については社会情勢を鑑みた上で、大会を継続することの意味合いが大きかったため本大会においては特に言及すべき点はない。なお、選手と運営を兼ねる人事については情報共有や意思決定に大きな支障をきたしたが、学生主体運営という本大会に課せられた目的を果たすためには致し方ないものであったと考える。一方で、学連は今後学生運営者の扱いについてよく検討するべきである。

また、主要役員以外の特に当日運営者については本大会への参加を断念してまで関わっていただけの方が思いのほか多く、感謝の極みであるとともに、運営者が全員学生ということは現実的に不可能であることを明記しておく。

プロジェクト進行

[スケジュール管理]

おおむね恙無く進行した。競技情報が含まれる事案など実行委員長が旗を振れない局面においては、競技責任者やイベント・アドバイザーが積極的に先導し、管理・運用を行ったため、通常より業務が大きく増えたが最良の結果を得られた。

また主要役員が決まった段階で開催 3 か月前であったため、運営者全員がスケジュールに対し一定の危機感を感じており、その結果一部を除いて物事がスムーズに進行したように感じる。

## 4.3 競技面の準備経緯

競技責任者 西下 遼介

### ▼4.3.1 競技地図の作成

計画

- ・ 競技地図作成は YMOE 社(宮西)に委託
- ・ 9月11日：第1次地図調査締切
- ・ 10月14日：第1回試走日
- ・ 11月6日：第2次地図調査締切
- ・ 11月14日：第2回試走日
- ・ 11月19日：コース確定
- ・ 11月23日：最終試走日・地図データ入稿
- ・ 11月24日：競技責任者・EA 確認締切
- ・ 11月27日：地図印刷・シーリング締切(全てのクラス)
- ・ 11月28日：大会前最終準備(地図の現物確認)

実施

- ・ 9月4日現地下見の時点で役員でスケジュール打ち合わせを行い、全体の流れを共有した。
- ・ 地図調査成果が上がった際は必ず 1~2 週間以内に競技責任者・EA, 作者やプランナー等によるフィードバックを行った。
- ・ 11月24日にコースが確定した。
- ・ シーリング前の地図確認も行うためシーリングは 28 日に行った。その後裏刷りも含め再度地図確認を行った。

## 提言等

今年から地図図式が ISSprOM2019 に変化したこともあり、特に地図確認に際しては、

- ① 地図図式に準拠しているか
- ② 現地と描写が合致しているか
- ③ 競技者がレース中に視認可能か

の3点に注意して行った。また、コース完成後は、競技責任者・EAによってオーバープリント記号と各コントロールの位置説明を確認、その後フィードバックを何度も挟みながらプランナーと共同でコースを修正し、印刷業者とも全体のレイアウトや立ち入り禁止に被るコントロール円の切断の確認をした。段階に応じてマッパーと、プランナーと、そして印刷業者との綿密な連絡によって、地図を仕上げた。インカレのような大きな大会においては、こうした各担当との密な連携が必要不可欠である。

一方、これら関係者の OCAD のバージョン違いによって、記号の置換え等のムダ作業が発生しており、業務の遅滞が見られた。今後のインカレでは統一できるようなシステムを導入していく必要があるだろう。

### ▼4.3.2 コースの設定

#### 計画

- ・南東のキャンプエリアやわんぱく広場を除いた公園内のほぼ全域が使用可能であり、予選と決勝とでメインの使用範囲を分けた
- ・既存の特徴物だけではルートチョイスを考慮したコースが組めないと判断し、人工柵の使用・通行不能な境界の設定を計画
- ・決勝は会場付近スタート・フィニッシュ(演出面を考慮)

#### 実施

- ・下見時点でプールエリアの使用を公園側に提言したところ認められたため、予選コースの設定に選択の余地が増えた。
- ・当初は予選から決勝時に柵の位置を変える案であったが、時間の制約を考慮して最終的に追加のみで良い形にまとめあげた。
- ・決勝スタート1分前は演出を考慮し、会場から見える位置に設置した

## 提言等

プランナーの目標に沿ったコース作りを行うには、プランナーとの密な連絡体制作りが必要である。今大会では、Slack や Zoom を用いた結果、例年と比較して容易にやり取りができ、綿密なコース練り・及び運営者同士の意識共有が常に行えたことが、ミスや工程の削減に大きく貢献した。ただし、今大会は渉外者の住居とトレインとの距離が近く、公園側と連絡が取りやすかったケースである。これからのインカレ運営においては、今回のケースのように開催地と連絡が取りやすいケースも多くはなく、新型コロナウイルスの対応も加わり、自由に動きづらくなると考えられる。そのため、新たなコミュニケーションツールを駆使し、なるべく少ない工程でコースを決定可能とする体制作りが今後のインカレ運営の焦点となるだろう。

### ▼4.3.3 安全対策

#### 計画

本大会では競技者の安全確保のため、以下の点を考慮した。

- ・各コントロールにコントロールガードを設置
- ・事務所裏など車の出入りが起きるような注意箇所に監視員を設置
- ・プールエリア入口四か所に監視員を設置
- ・人工柵が倒れた場合に対応可能な監視員を設置

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

- ・ 競技者の安全を確保するため、車道の立ち入りを禁止

## 実施

- ・ 車道において地図上ではパープルハッチをかけ、現地では競技者が通りうる箇所に青黄テープを張って侵入を防ごうとした
- ・ 一般の公園利用者が特に集まりやすいレンタサイクル場所近辺に監視員を追加した
- ・ 一般利用者との接触を防ぐため、コース上通る可能性が高いレンタサイクル裏のトイレにも監視員を追加した
- ・ 現地の視認性を良くするため、見えにくい柵やロープ及び立ち入り禁止の道を青黄テープによって補強した。

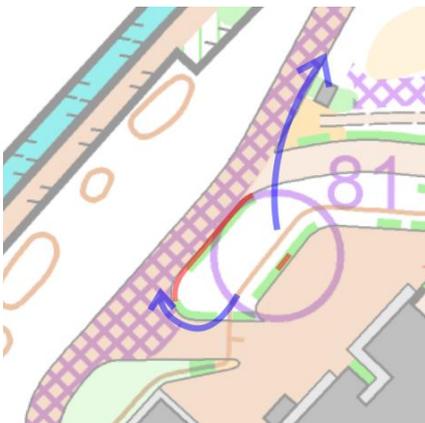


現地で通行不能箇所の視認性を良くするための取り組み例

## 提言等

危険防止のための対策を万全に準備してきてはいたものの、当日の決勝レースでは、81番コントロール(MEF 13・WEF 11)にて選手が車道側に脱出するという問題が生じた。該当の車道は公園外周を通る道で、途中で減速のための凹凸が何箇所か存在するため、危険性は低いものの、比較的車の通りが多いことから、事前に地図上で立ち入り禁止区域としていた。発生した問題については運営側にとっても想定外であったため、本来、監視員から競技者への声掛けを禁止としていたが、安全のため、車道側に出た選手については声をかけ、車道に出ないように注意喚起するよう、EA承認のもと方針を変更した。車道を通るルートを通った場合、13番から14番コントロールへは最短距離ではないこともあり、該当する選手を失格とせず、注意のみに留めた。

このような事態となったのは、運営側の競技者の動向の想定が不十分であったことが原因である。特に、スプリントではレース中に予想以上に体力を消耗するため、運営者は起こりうるあらゆる動きを想定してコースの設定や安全対策を施さなければならない。後述する立ち入り禁止の私有地への侵入対策についても同様のことが言える。今回は幸いにも事故は発生しなかったが、今後のスプリント選手権への良いモデルケースとなったといえるだろう。



左図の通り、今回は競技者が車道側に出ないように、赤線部分に青黄テープを施していた。しかし、81番コントロールをタッチした後、青矢印のように脱出する選手が出てしまった。競技者自身が安全意識を持つことも大切ではあるが、競技者を危険にさらさないように競技全般をコントロールしていく運営者内で意識することも非常に重要である。

#### ▼4.3.4 競技成立に向けて

##### 計画

- ・ 運営者同士の認識共有を心掛ける
- ・ 競技者に配慮した青黄テープの配置
- ・ IOF ルールに則ったコース設定と地図図式の確認
- ・ 地図のダブルチェック

##### 実施

- ・ 全体のスケジュールを本番時点から逆算して考え、余裕を持ったスケジュールリングを行った
- ・ 認識の齟齬が発生しないよう、運営者同士では定期的なミーティングの開催を心掛け、議論の内容について何度も確認した
- ・ 旧地図図式からの変更点など競技者がミスを犯しやすい点において、テクニカルミーティング資料や公式掲示板による徹底した掲示を施した
- ・ 地図とコースとの食い違いを防止するため、該当箇所を事前に図式化し、運営者に周知した。特に青黄テープや人工柵は競技者が視認しやすいよう本番直前まで長さ・高さを調節している

##### 提言

今大会では、大会の公平性及び競技性担保のため、競技内では非常に多くの資材を使用した。しかし、用いる資材が多くなれば、全体の管理が難しくなり、管理ミスによる競技不成立の可能性が大きくなる。そこで、テレイン内で使用する資材をまとめた全体図と、全体をいくつかのエリアに分け、各エリアに資材がどれだけ必要なかを分かりやすく示した競技資料を作成した。この資料によって、ヒラパートへの確実な指示が可能であり、資材分配や情報伝達もスムーズに実行できた。特に青黄テープ等の資材が多くなるスプリントにおいて、今後は、どの大会でも利用できるように資料のフォーマット化が喫緊の課題である。

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザ一報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

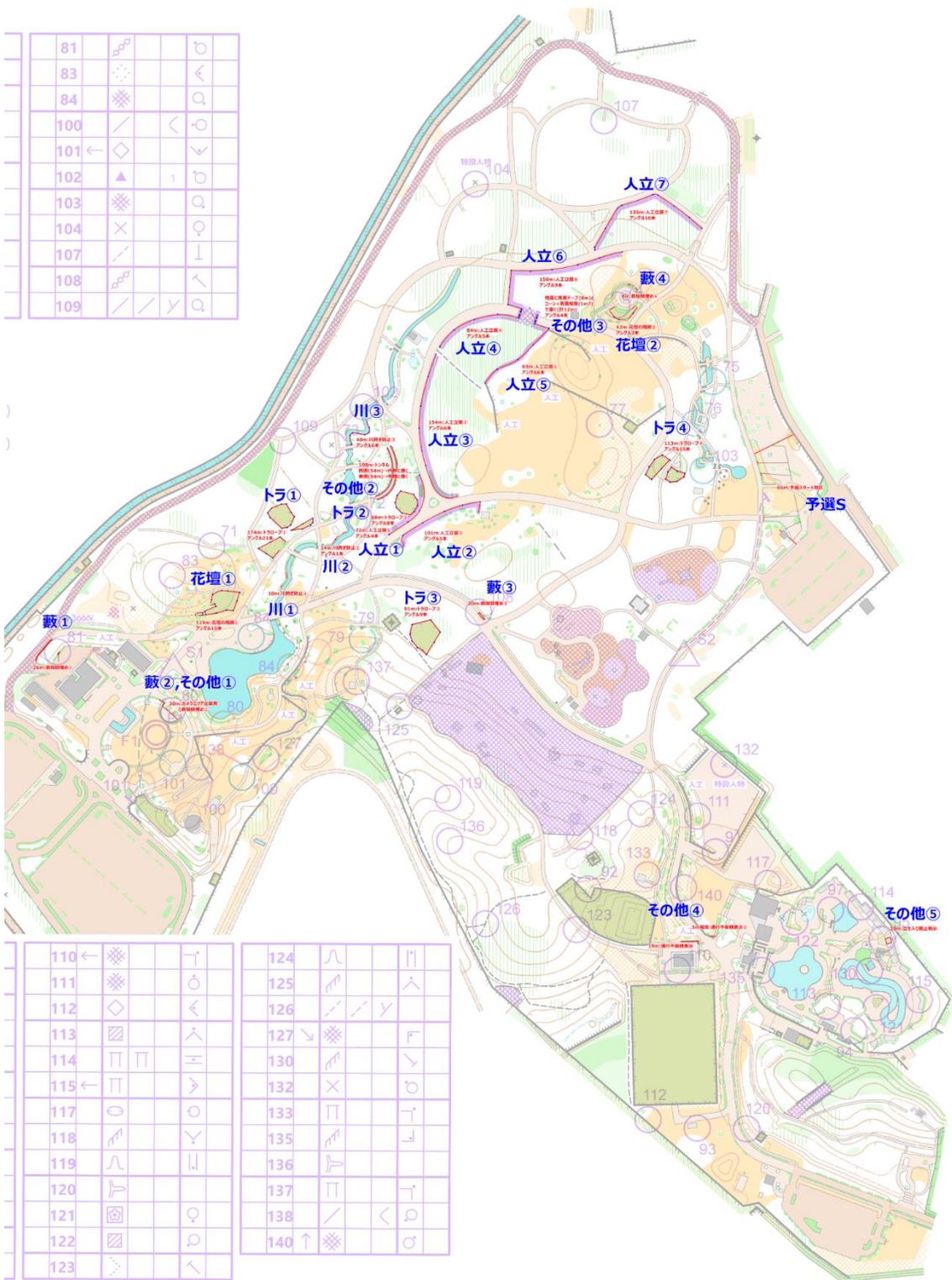
大会役員一覧

寄附協力者一覧

81					
83					
84					
100					
101					
102					
103					
104					
107					
108					
109					

110					
111					
112					
113					
114					
115					
117					
118					
119					
120					
121					
122					
123					

124					
125					
126					
127					
130					
132					
133					
135					
136					
137					
138					
140					



青黄テープ全体図



## エリア別役割・資材まとめ

エリア	前日	当日	業務	必要資材	備考
A(事務所裏)			コントロール、藪①	△3,青黄26m	早く終わったらC手伝い
B(会場)			コントロール、藪②+カメラ	△1,木6,青黄26m	
C			花壇①、川①	青黄126m,ア15	
D			トラ①	青黄174m,ア21	一定の高さに青黄を(トラ)
E			コントロール、トラ③、藪③	△1,木4,青黄111m,ア9	
E	担当者名 (前日と当日)		コントロール、川②③、トラ②、トンネル	△2,木2,青黄230m,ア15	
G			人工立禁①②③	青黄600m,ア30	
H			人工立禁④⑤	G参照	道塞きは当日予選後
I			コントロール、人工立禁⑥⑦、花壇②、藪④	△2,木1,青黄335m,ア22	当日人特用機
J(予選S)			コントロール、トラ④、予選S	△2,木2,青黄200m,ア15	3コントロールは予選時撤収
K			コントロール	△6	設置後L柵
L			コントロール、人工柵補強	△3,木3,青黄5m	"
M			コントロール、休憩所北柵	△3,木1,青黄19m	"
N			コントロール	△1,木4	"
O			コントロール、テント立禁	△3,木3,青黄26m	"

△:△下野アングル, 木:高野木製バンチ台, 青黄:青黄テープ, ア:アングル(青黄テープ用)

### 競技資料：エリア別資材表

### 青黄テープ(C)



114m:花壇の周囲①  
アングル15本

10m:川跨ぎ防止①

担当者名(前日と当日)

会場北の花壇と川①  
(合計 124m, アングル15本)  
→花壇エリアはアングルが必要なので注意。藪があるところは藪に結び付ければOK



競技資料(エリア別に資材と方法を明示)

## 4.4 会計

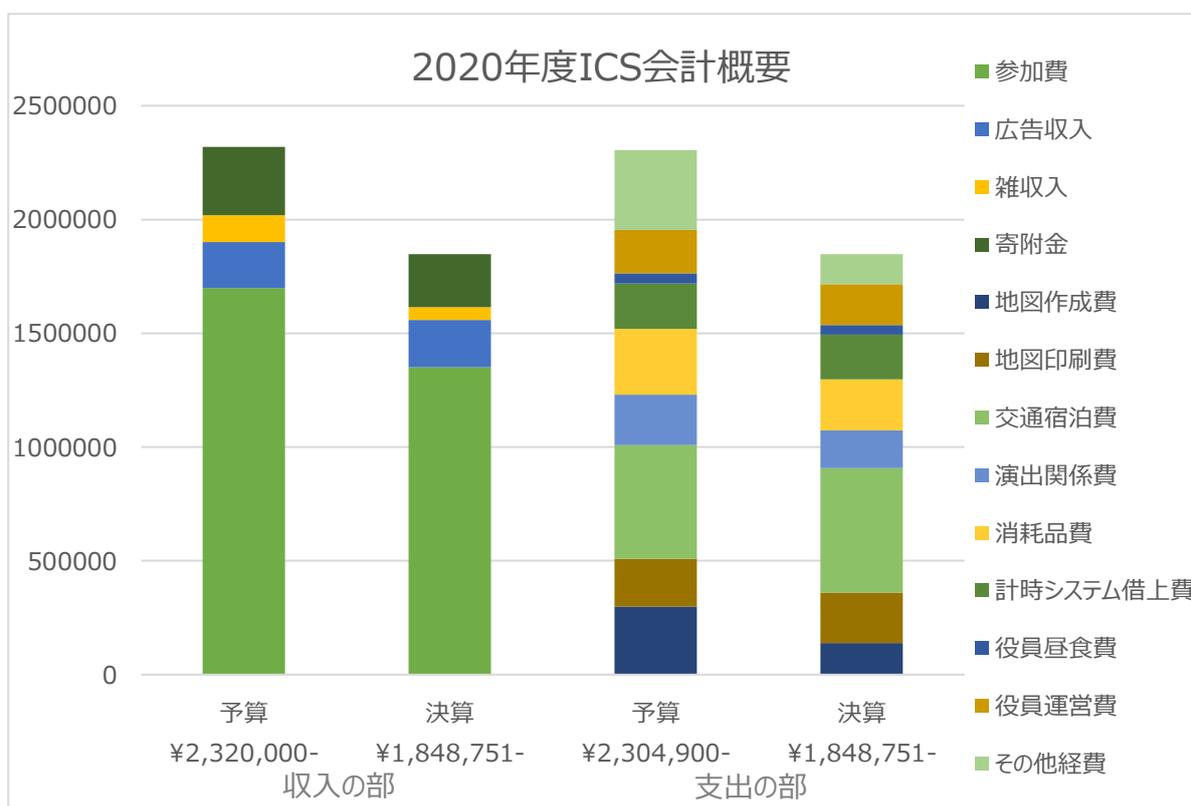
## イベント・アドバイザー 宮川 早穂

本項では、本大会における会計業務の結果と行動についての報告、および本大会を通して得られた今後への展望を記す。※事情により本稿はイベント・アドバイザーが執筆した。

### ▼4.5.1 簡易決算報告

まず初めに、本大会において、策定した予算と2021年1月24日時点での決算の結果概略を以下に報告する。予算は大会開催が確定した2020年9月時点の予算を掲載するが、実際には下記に記載の通り都度見直しをしながら会計を調整している。

以下項目では、この結果を中心に簡単な解説を行う。



#### ▼4.5.2 予算案の策定

##### ▽収入の部 (予算) : 参加者数・参加費について

2019年度インカレスプリントの参加者数は766名ではあったものの、ロングとの同時開催の取りやめ、新型コロナウイルスによる大学からの課外活動停止措置等の情勢を鑑み、予算策定段階での想定参加者数は400名とした。

また、参加費は選手権の部・一般の部ともに2020年度インカレロング(選手権の部)・2019年度インカレスプリント(選手権の部)と同額の4,000円とした。新型コロナウイルスの影響で大学生のアルバイトが出来ない状況であるという情勢を鑑みて設定した。

しかし、予算策定の時点で約30万円程度の寄附金または補助金等から収入を得る目途を付けない限り、ライブ配信を行うことは出来ない、という状況であった。

##### ▽収入の部 (予算) : 参加費収入以外の収入について

要項3へ掲載するクラブ広告宣伝費は例年予算の50%減である20万円を見込んだ。例年スプリントとロングは同じ要項であるため、秋インカレに向けた各クラブ・団体の広告予算は2競技分見込まれていないという予測から20万円として設定した。

例年実施している花束販売については運営負荷軽減のため見送りとした。人的リソース削減に加え、例年花束販売は実行委員会の買い取り販売を行っており、売れ残りが出た場合在庫分がそのまま赤字となるリスクを避ける形を取った。

地図販売は12万円の収入を見込んでいた。

また、新型コロナウイルスの影響によるエントリー数の大幅減少、それに伴う収入減収に際し、度々谷野実行委員長・YMOE山川氏、実行委員メンバーで検討を重ねた。クラブカップ7人リレーの会場において寄附を募る、日本スポーツ協会のスポーツ事業継続支援補助金の申請の2点を実施し、実行委員会・日本学連共同で開催に向けた費用の確保に向けて尽力した。

##### ▽支出の部 (予算) : 支出予算の策定に関して

予算策定のおおまかな流れとしては、①地図関連費用(作成費・印刷費)の決定、②試走・準備回数数の決定、③競技関連資材(SIステーション等)の決定を行うことで、大型の必要経

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

費を洗い出すことが出来る。その上で、演出関連資材の選定を行う流れとなる。

本大会では、ライブ配信の実施可否決定・ライブ配信で使用する機材の選定を、エントリー収入確定及び補助金の申請可否に伴い決めていく旨、坂野山遊地図企画の坂野氏と調整していた。予算は一度作成してから決算まで放置するのではなく、エントリー締切等の段階で区切り、都度見直しをかけ、実行・見直しをしながら精度を高めて行くことを推奨する。

#### ▽支出の部(予算): 日当について

2019年度のインカレスプリント・ロングの報告書に倣い、運営者への日当について確保したかったのだが、大幅な参加費収入減が見込まれていたため、この時点では運営参加1日あたり1,000円の日当のみ確保を目指していた。しかし、実際はこの日当の中で運営者自身の食費・風呂代を賄ってもらう必要がある、実質的には運営者個人への負担をかけてしまっているのが実情である。1日あたり2,000円程度確保するのが理想ではないかと考える。

また、コントロールガードを実施いただいた45名の運営者に対しては、交通費・日当について支払いを行えないという前提として募集を行い、コントロールガードの交通費・日当は予算には計上しなかった。(代わりに学生と同じコースを走っていただくことを対価とした。)有難いことにこのような条件であってもOBOGが集まってくれたが、本来はこちらも交通費・日当を支払うべきであり、予算時点で交通費・日当を計上しておく必要があると考える。

### ▼4.5.3 決算結果報告

#### ▽全体概要・総評

結果として、非常に多くの方からのご支援いただいたことに加え、日本学連が日本スポーツ協会のスポーツ事業継続支援補助金を取得いただいたため、収支ゼロで会計を締めることができた。今回は新型コロナウイルスという状況下で感染対策を講じながら開催を行ったということ自体に意義があったが、このような会計状況のままインカレが継続しないことを願う。

#### ▽収入の部詳細

##### ◇ 選手権の部・一般の部参加費

予算策定段階では400名のエントリー数を見込んでいたが、最終的なエントリー数は314名と大きく予算を下回った。結果、予算より236,000円少ない1,256,000円が参加費収入となった。また、今回、エントリー締切時は363名のエントリーがあったが、新型コロナウイルスにより大学から許可が出ない等の理由で49名のキャンセルがあり、日本学連の方針により振込前の申込者については参加費を頂かないこととしていた。

##### ◇ 地図販売費

例年の地図販売費を参考に、12万円の予算を見込んでいたが、約53%減の57,061円となった。地図販売は予約制としていたが、①参加する大学数の減少、②大会前の周知期間の短さが起因して減少したのではないかと予想している。大会後に一般の方向けに地図販売を行ったが、追加の地図販売希望者は6名と微増に留まった。

##### ◇ 寄附金

主にクラブカップ7人リレーの会場でOBOGの方々へ寄附金を募らせていただいた。日本学連の幹事メンバーが主体となり、インカレスプリントの開催に向けて寄附金を募り、合計220,000円の寄附を頂くことができた。この場を借りて、心より感謝申し上げたい。また、寄附をいただいた方の一覧を本報告書内に掲載させていただく。

#### ▽支出の部詳細

##### ◇ 地図作成費

元々YMOE社と300,000円にて地図作成費を実行委員会と合意していた。しかし、調査範

困が広く、調査日に雨等も続いたため地図作成の進捗が悪く、調査日が増加してしまった。結果的には、実質 500,000 円の調査費用がかかったが、実行委員会として確保できる予算はなく、著作権を所持している栃木県協会に余剰分（200,000 円）を支払いいただく形で調整いただいた。

また、地図作成費（及びライブ配信（後述））に対してスポーツ事業継続支援補助金を適用いただいたため、実質的に実行委員会では 137,500 円のみを負担する形となった。

多くの方にご支援いただき、那須野が原公園の競技用地図は完成したが、スプリントであっても 400,000～500,000 円程度の地図作成費の予算を確保しておくべきだと考える。

#### ◇ 演出費（ライブ配信費用）

実行委員会として、ライブ配信に関する意思決定を多く行った。会計に直接的に響くため、ライブ配信をどのようにコントロールするかについて最も苦慮した点である。しかし、坂野山遊地図企画の坂野氏、演出サブチーフの小柴氏に多く尽力いただき、実行委員会としても最も望んだ形でライブ配信を実施することができた。

実行委員会で決めるべき点は大きく 2 つ、ライブ配信を実施するか、予算をどれくらいかけるか（=どの程度機材をレンタルするか）という点であった。

9 月時点ではライブ配信に対して 20 万円の予算を見込み、準備を進めていたが、10 月に坂野氏に電波状況を確認してもらったところ、那須野が原公園の電波状況は非常に悪く、上りの速度が遅いため、インカレロングで使用した機材だけでは動画のアップロードが出来ないことが発覚した。ライブ配信を行うには追加で 70,000 円程度の機材レンタルが必要、とのことであった。

しかし、同じ頃エントリー締切が迫っていたが、想定より大きく参加者数が下回り、そもそもライブ配信自体の費用の確保に難航していた。そこで、実行委員会での支払いを最小限に抑えられる梅プランをはじめとして、撮影箇所（カメラ数）を増やした竹プラン、松プランと、複数の選択肢を坂野氏に提示していただいた。

その上で、日本学連幹事長でもある実行委員長谷野氏と運営幹部メンバーで話し合いを重ね、日本学連にてスポーツ事業継続支援補助金をライブ配信実施のために 20 万円を申請しライブ配信を実施することを決定した。

また、プランの最終決定を 11 月 28 日と大会開催の約 1 週間前までお待ちいただいた。プランが決まらない中準備を進めて頂いた坂野氏はじめ演出班メンバーには頭が上らない思いである。当初、補助金は申請後すぐに審査結果が出るという情報であったが、なかなか審査結果は出ず、最終決定の 11 月 28 日になってもプランを決められずにいた。梅プラン（最小構成）でライブ配信を実施するしかないかと覚悟していたが、本大会プランナーの上島氏のお母様がもし補助金が出なかった場合は梅プラン～松プランの差額約 2 万円をご寄附いただくという話になり、松プラン（最大構成）でのライブ配信実施を決めることが出来た。

最終的に、補助金の審査結果が出たのは 2021 年 1 月下旬であり、無事補助金を頂きライブ配信へ費用を充てることが出来たが、当時決断の際に寄附を申し出ていただいた上島乃英様へ、この場を借りて心より感謝申し上げる次第である。

ここまで書き連ねた通り、多くの援助があり実行委員会の出費としては約 170,000 円でライブ配信を実施することが出来た。しかし、実際には日本学連が 20 万円を補助金から坂野山遊地図企画へ支給しており、全体では約 370,000 円をかけてライブ配信を行っていることを記しておきたい。

### ▼4.5.4 今後のインカレにおける会計について

#### ▽今後の参加者数減少における対応

今回、「コロナウイルスの影響で・・・」という枕詞を常に使い、参加者の大幅減少に対する寄附を募ったり、ライブ配信を実施したりと多くの方々のご支援をいただく運営となった。今後、この情勢がどのように変わっていくかは、緊急事態宣言下で本報告書を執筆している 2021 年

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部（決勝）スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

1月時点では想定しがたいものであるが、来年以降、新歓がほとんど出来なかった世代（現1年生）を抱えながらインカレを続けていく必要がある、というのはほぼ変えられない事実であろう。

現時点で1年生の日本学連加盟数は46名（日本オリエンテーリング協会競技者登録者数より算出）であり、コロナ前に入学した世代の2～4年生である250～280名からは大幅に減数している。必然的に、今後3年以上インカレの参加者数が減ることは免れないし、その会計的な影響を鑑みながら予算組みを行っていく必要がある。

約200名の減数は参加費4,000円/人とするると80万円の減収となる。具体的な対応策として、何点か考察も含めて提示しておきたい。

### ①参加費の値上げ

一番簡単な収入増の策としては参加費の値上げではあるが、この点はこれまでインカレの会計として踏み切らなかつた施策であると認識している。現役学生が参加する大会として、適正金額は4,000円～5,000円程度であり、大幅な値上げは参加者の切り捨てにつながる。安易に参加費の値上げに踏み切らないよう、ここに記しておきたい。

### ②演出関連費用の費用構造見直し

競技に関わらない部分で見直しが可能であるのは、真っ先に演出関連費用が上がるだろう。例えば、2017年度のインカレロング（関ヶ原）から大型LEDビジョンの導入による演出が行われていたが、1日あたり約60～70万円のレンタル料がかかるため、その必要性は度々議論に上がってきた。2020年度のインカレロング・スプリントでは大型LEDビジョンの設置は参加者の密につながるため、ディスプレイの設置は行わず代替措置としてライブ配信を試みた。

今後、参加費の収入が下がることが見込まれている中で、演出費用をどのように確保するのか、それとも演出を行わないインカレを目指すのかは日本学連・今後のインカレ実行委員会では論点として挙がってくるだろう。様々な意見はあると思うが、演出によるインカレの特別感の創出はもちろん、インカレに参加していない学生や選手のご家族、そしてオリエンテーリングを全く知らない人に対しても届けることのできる施策を切り捨てることは、簡単ではあるが長期的に見ればインカレにとってマイナスな影響を及ぼすように考える。

ただし、演出費用を参加費から捻出する以外の方法もぜひ日本学連には検討いただきたい。というのも、演出というのは参加している選手の周囲に対して意味があるもので、参加費はあくまで地図作成・競技運営の準備資金として使われるべき、という意見も無視できない。今回は日本スポーツ協会の助成金を使用したがる、日本学連の会計からインカレ演出に関して費用を捻出する等、都度寄附金を集める以外の方法で、演出に関する費用構造を見直す必要があるのではないか。

### ③地図作成費の見直し

インカレの存続を優先とするのであれば、新規トレインや大幅リメイクが必要なトレイン以外でのインカレ実施という策も上げておきたい。フォレストで言えば、駒ヶ根高原や日光など、近年大きな大会が開催されて地図修正が入っているトレインを使用することで、地図作成に多く費用を投じることは避けられるし、地図修正の確認も含めた試走を行う必要もなくなる。

今後3年間かそれ以上は、そのような費用の確保を行っていくことを見据えたトレイン選定をしていく必要があるのではないだろうか。

一方、今回最も費用を投じている試走関連費用・運営者宿泊費や、運営者の日当に関しては、競技の質を確保する点、ボランティア体質からの脱却を目指すという点で削減対象としないことを推奨する。自らの身を削りインカレ運営を行うことは過去の報告書を拝読しても健全ではないと記されているし、長くインカレを続かせるためには必要な経費であると考えます。

また、上述の通りコロナ影響で谷間の世代が出来てしまったことはもう免れようがないことであるが、次期2年生が少ない中での新歓活動を乗り切るというのはこれからの現役学生のすべきことであろう。OBOG,日本学連,JOA含めて検討していく必要があると考える。これからのインカレを守っていくためにも、長い時間をかけてこの危機を乗り越える必要があるのではないだろうか。

#### ▽日本学連との連携に関して

今回は実行委員長が日本学連幹事長であるという体制であったが、これはイレギュラーな状況であった。基本的に、実行委員会と日本学連は別組織となるが、会計に関する意思決定が必要になった場合、日本学連の意見を聞き尊重することを推奨したい。

また逆に、日本学連は実行委員会に対してインカレを会計視点でひとつの事業としてどのように位置づけていて、どのような成果を期待するかどうかを整理しておくといいいのではないかと思う。実行委員会メンバーのほとんどはインカレ出場経験があり、それぞれに“インカレはかくあるべき”という理想像を持っているが、それらをOBOGから享受するだけでなく、日本学連がインカレをどうしていきたいのか、実行委員会にはどうインカレを創り上げてほしいのか、という思いを伝えることも必要ではないかと思う。

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

# 5 イベント・アドバイザー報告

イベント・アドバイザー 宮川早穂（立教12）

## 5.1 はじめに

日本学生オリエンテーリング選手権実施規則（以下、「インカレ実施規則」）34条に基づき業務を遂行した。本大会における業務報告、及びイベント・アドバイザー（以下、EA）の視点から本大会で競技成立のために行った施策と今後の提言を以下で述べる。

また、インカレ実施規則 35.2 項で規定の「幹事会、理事会及び技術委員会への活動報告」は本内容をもって代えさせていただく。

## 5.2 業務実施報告 概要

### ▼5.2.1 EAの任務・体制について

- 準備期間が3か月と短く、学生運営者が多いという状況であったため、石澤俊崇氏（早稲田卒）をEA補佐へアサインした。
  - 各パートチームも学生であるため、各パートにインカレ運営経験が抱負なOBを各パートのアドバイザーとして3名を配置し、学生主体での運営を保ちつつ競技が成立する道を模索した。
- \*ご協力いただいた石澤さんをはじめとしたアドバイザーチームの各OBOGにはこの場を借りて心からの御礼を申し上げます。

### ▼5.2.2 競技成立に向けて

- これまで過去5回開催されたインカレスプリントでは、競技成立に関わる調査依頼・提訴の発生や、失格者が多く出てしまった、という事象が歴代の各大会で発生してしまっている。
  - 各大会のインカレ報告書・インカレスプリント失格集（※）を参考に、競技成立に向けて懸念事項をひとつひとつチェックし、潰し、運営者全員と意識共有をし、本大会を競技成立へと導いた。
- ※インカレスプリント失格集とその対策案（筆：大石洋輔（早稲田大学4））  
（2019年12月7日 [オリエンティア Advent Calendar 2019](https://orien-advent.hatenablog.com/entry/2019/12/07/000000) 記事より）  
URL：<https://orien-advent.hatenablog.com/entry/2019/12/07/000000>
- 競技成立のためには、運営者が競技者目線を持つことと、競技者が規則を守り公平に競技を行うことの両方が必要であると考えている。運営者・競技者双方が互いに理解し合うことが大切であるため、EAとして運営者・競技者のどちらかに寄ることのないよう心掛けた。
  - 過去の事例をもとに本大会で掲げた競技成立に向けたポイントとなる事項を下記に記載する。

#### 1. スプリント競技で運営者側が注意するポイント・視点

##### ① トップスピードの選手は視野が狭くなり、また咄嗟の判断が出来ない

スプリント競技の競技者は1km当たり3分台の速度で競技を行う。**1km3分でのオリエンテーリングそのものに集中できる環境の用意**をすることを心がけた。特に、競技中のテープ誘導は選手にとっては「イレギュラー（想定外）なこと」となるため、スタート・フィニッシュ以外の誘導区間は設けなかった。また、危険回避のためのテープは腰の高さ以上の位置に青黄テープを張り視覚的に危険を回避できるようにした。

誘導・コース全般を確認する際も、歩いた時に視認できる範囲と、走っている時に視認できる範囲は異なる点を特に留意した。

##### ② 一般常識範囲内の立入禁止と、このレースの時だけの立入禁止

本大会では、競技者の安全を守るための立入禁止区域（車道など）、渉外上立入が出来ない立入禁止区域（池・花壇・植物保護区域・遊具エリアなど）、競技性を高めるために立入禁止・通過禁止とした区域の3種類の立ち入り禁止区域が存在した。

地図を読み、立入禁止区域に立ち入らないことは競技者の義務ではあるが、「日常生活で

は（一般常識的に）通っていい場所が、このレース中だけは（地図上では）通ってはいけない」という「特別」ルールは選手にイレギュラーな判断を強いることになる。**咄嗟の判断で選手が感覚的に「通っていい」と思ってしまうことを避ける**ため、そのような箇所には青黄テープの設置を行い、選手が視覚的に立入禁止であるとすぐに判断できる状況とするよう競技班へ依頼した。

### ③ 当日朝まで地図は変わる可能性がある

特に公園は日々管理をされており、突如あったはずの藪や花壇がなくなることがある。前日・当日朝の最終試走で異常がないかを念入りに確認した。

### ④ 演出時の競技に関する情報のトーク

本大会は坂野山遊地図企画とライブ配信を実施した。YouTube のライブ配信で伝えるため、競技に関する情報も実況がマイクを使って話すことが出来れば本来は良いのだが、ルートチョイスについてはスタートレーンやビジュアルを走る選手が聞いてしまうとタイミングによっては不公平になるため、話していい内容のすり合わせを事前に行った。

基本方針としては「事実のみ伝え、ルートに関する有利不利は話さない」「インタビュー中に競技情報を選手が話さないように注意する」という形で進めた。

演出・競技の公平性のバランスを考える際、IOF が提唱しているライブニッツ協定を参考にした。地図・コース以外の情報統制は行わず、観るオリエンテーリングの楽しさが将来のオリエンテーリングの発展に寄与することも留意する必要がある。

(参考 : IOF Rules Appendix 5: The Leibnitz Convention

<https://onedrive.live.com/embed?resid=663580750D0C0BCE%2146284&authkey=!APzhD5h04h7u8qs&em=2&wdHideHeaders=True&wdDownloadButton=False>)

## 2. スプリント競技で競技者側が注意するポイント・視点

### ① **SIAC の音と光の確認は競技者の義務である**

過去にセレクション等で SIAC の不通過に関する提訴の事例はあるが、**SIAC の音と光の確認は競技者の義務である**ことを運営者内で共通認識とした。具体的には、コントロールガードの業務内に選手のコントロールの通過確認は含まない（コントロールガードはコントロールが何等かの理由で移動されないように監視する役割とした）こと、調査依頼時の対応は SIAC Config を用いた通過記録の確認を行うこととした。

## 3. スプリント競技で運営者・競技者の双方が注意するポイント・視点

### ① **一般の公園利用者がある土地をお借りして競技を行っている**

公園利用者に何のイベントを行っているか周知するため、1 週間前から公園入口に 12/6 にオリエンテーリング大会を開催している旨を周知する看板を設置した。この取り組みは実際に当日の公園利用者向けに効果があったことが判明したため、今後も公園で大会を開催する際は是非実施していただきたい。

選手も運営者もつい目の前の競技・運営に一生懸命になってしまうあまり、他の公園利用者の配慮が足らずトラブルとなってしまう例がある。これを防ぐためには、選手・運営者双方の意識向上に加え、**しつこいくらいの注意喚起が必要**だと考えている。

### ② **コミュニケーションを怠った調査依頼や失格を減らす**

選手の失格時、コントロール不通過及びミスパンチの場合は計算センター担当者が、立入禁止通過時は競技責任者および EA が直接説明を行った。調査依頼の際も、文面そのままを受け取るのではなく、必ず申請者と文面に関して口頭での認識整合を行った。**調査依頼において EA の助言や該当者とのコミュニケーションは禁止されていない**という点を留意する必要がある。

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

- 本大会で競技が成立し、また選手権の部決勝の失格者数が過去最少であったことは、運営者・競技者全員の努力の賜物である。しかしそれに加えて、過去多くの競技者がスプリント競技に対する知見を共有し、競技規則や失格に対する意識が変わり、広く競技のレベルが向上していることを表していると考える。

## 5.3 業務実施報告

### ▼5.3.1 要項の内容確認

- 全ての要項及び発行物の公開前に、その内容がインカレ実施規則に準じている事と適正であることを確認した。
- また、インカレ実施規則を不適用とする事項について、実行委員会内での判断を確認し、技術委員への諮問及び理事会への申請を行った。

### ▼5.3.2 会場・テレインの適格性確認

- 本テレインを利用して競技を行うことを前提として適格性の判断を行った。
- 会場の広さ・立地条件・設備については現地視察により適切であることを確認した。
- 2016年12月に栃木県オリエンテーリング協会大会兼第3回OC△下野大会が開催されており、渉外上問題がなかったことを確認した。
- 東京大学オリエンテーリングクラブのクラブ員が数名東大大会前日大会のテレイン候補として下見のため一度だけ現地入りを行っていたが、競技に影響はないと判断した。

### ▼5.3.3 スケジュール全体の確認

- 大会準備期間のスケジュール
  - ◇ 各責任者と話し合いを重ね、渉外、地図作成、コース作成、試走後の修正、要項作成、印刷等の期間が十分に取れるような全体設計を行った。また、状況に応じた都度の見直しについても度々助言を行った。
- 当日のスケジュール
  - ◇ 課題は下記の4点であった。
    - ① 会場～予選スタート間の誘導区間が徒歩40分であること
    - ② 日の入りが16:30であること
    - ③ 公園の開園・閉園時間に制約があること
    - ④ 予選決勝方式であること
  - ◇ 予選～決勝間の時間はコントロールの付替え・柵の増設があることから60分の確保を進言したが、実際に確保できたのは50分であったため、事前の役割分担の明確化と前日のシミュレーションの実施を依頼した。
  - ◇ 決勝の出走者数を100名(女子40名、男子60名)から削減する提案には合意が得られなかったため、決勝の所要時間は自ずと決まっていた。男子エントリー数によってはMEQのコースを1本追加する調整をプランナーと行っていたが、結果的に男子のエントリー数は207名で70分以内に予選をスタートさせることが出来たため、3レーンでの実施が可能となった。
  - ◇ 公園の閉園時間を守るため、実行委員長谷野氏の呼びかけのもと約70名の選手が事前に協力を申し出てくれたため、迅速に片付けを行うことが出来た。
  - ◇ 余裕のないスケジュールだったため、予選で調査依頼・提訴が出た場合の対応についてあらかじめ決めておくよう進言した。基本方針としては「該当者および予選通過の可能性のある選手は全員決勝スタート待機所に隔離を行い、場合によっては決勝通過者を増やす」という大方針について承認をしていた。

#### ▼5.3.4 スタート・フィニッシュ・チェンジオーバーのシステムとレイアウト確認

- 競技責任者及び各地区のパート責任者と共に現地にて問題が無いことを確認した。
- 予選フィニッシュ
  - ◇ 会場フィニッシュであったため、スタートが早い選手のフィニッシュ及びラストの区間を走っている選手をスタートが遅い選手が見えることが可能であったが、競技上影響はないとしてテクニカルミーティング資料に記載することを条件に承認とした。
- 決勝スタート待機所
  - ◇ 屋外（駐車場）となることはレイアウト・渉外都合上致し方ないとして承認した。冬季であったため、車内待機を可能とした。
  - ◇ 該当の駐車場は貸し切りにすることが出来なかったため、一般の来園者も利用する中での運用となった。園内周知を事前に行ったこと、一般来園者は利用の少ない駐車場のエリアであったことの2点から渉外上のトラブル等は起こらなかったが、スタート待機所は可能な限り屋内で十分なスペースを確保すべきである。
  - ◇ トイレから会場周辺の柵のレイアウト（予選から位置を変更しているため競技情報に類する）が見えてしまうことが問題であった。トイレ周辺エリアについて決勝出走予定者は立入禁止とし、目隠しをしてトイレまで車輸送を行うことで対応した。スタートパート員が色々な工夫を施し、車輸送時から目隠しをしてトイレ内までに誘導するという方策を取った。  
輸送車の待機列が延び選手からのクレームが発生したが、1台輸送車を追加し対応を行った。

#### ▼5.3.5 計時システムの信頼性と正確性の判断

- SportIdent 社製のタッチフリーが可能な計時システムを採用した。
- IOF Rules で 0.1 秒計時は行っていないため昨年度のインカレスプリントで採用されている 0.1 秒単位の計時は廃止した。
- サブ SIAC（1 選手が 2 個の SI カードを所持し出走する）の貸し出しを検討したが、予算上 SIAC を確保できない点から見送り、SIAC の予備計時システムにはピンパンチを採用した。
- スタート方式
  - ◇ 予選・一般クラスは複数人が同時出走するためパンチングスタートを採用した。
  - ◇ 決勝は 1 分間に 1 名のみ出走となるためタイムスタートを採用した。
  - ◇ スタート方式の違いによる混乱を避けるため、テクニカルミーティング資料での周知を進言した。
  - ◇ 予選出走者の内、実際のスタート時刻の約 1 分後にパンチングスタート忘れを思い出しスタート地区に戻りパンチングを行った選手がいたと報告があった。該当の 1 分間は地図を見ることが可能なため、パンチングを行った時刻ではなく実際のスタート時刻からの計時に修正を行うことを承認した。
- フィニッシュ方式
  - ◇ ループアンテナを用いたフィニッシュライン通過を採用した。

#### ▼5.3.6 地図が規定に合致しているかの確認、及び地図の正確さ、作図、印刷の妥当性確認

- 競技責任者・コース設定者と共に現地及び机上での検証を経て、地図図式規定 (ISSprOM2019) に適合していること、判読性について問題がないことを確認し、競技用地図として適切な水準の地図であることを確認した。
- 第二回試走時に完成とされた地図は競技に影響があるレベルで地図精度が不十分であると判断した。調査者に地図修正を依頼し、追加で 2~3 日の地図調査を行ってもらった。追加分の調査費用については予算外であったため栃木県オリエンテーリング協会様にご負担いただき、地図は完成した。

- コース完成後の地図確認について、各段階で防ぐことのできるミスを洗い出すため、公認 EA 資格所有者の坂野氏監修のもと、事前に下記のチェックリストを作成した。

#### ◆実施者

- ・Eクラス：プランナー／競技責任者／EA（※全工程ダブルチェック）
- ・Aクラス：上記3名のうち1名／他の運営者（※全工程ダブルチェック）

#### ◆チェック項目

##### (1) 入稿前チェック

- ①円の中心の特徴物とコントロール位置説明確認
- ②全コントロール図と比較しコントロールの番号と円の位置が一致しているか
- ③立禁・誘導・救護所・給水・移動柵の位置が正しいか

##### (2) 印刷後：1週間前チェック

- ①全地図：地図品質チェック（インク、しみ）、シーリングチェック
- ②全地図：地図／コントロール位置説明枚数確認
- ③各コース1枚のみ：円の中心の特徴物とコントロール位置説明確認
- ④各コース1枚のみ：
  - 全コントロール図と比較しコントロールの番号と円の位置が一致しているか
- ⑤各コース1枚のみ：立禁・誘導・救護所・給水・移動柵の位置が正しいか
- ⑥各コース1枚のみ：地図の位置説明／配布コントロール位置説明が同じ位置説明か
- ⑦コントロール位置説明：東が全て同一のコントロール位置説明か
- ⑧全地図：地図の東が全て同じ地図か
- ⑨地図裏印刷ありの場合：コース／地図裏の内容が合致しているか

##### (3) 前日チェック

- ①全地図：地図／コントロール位置説明枚数確認
- ②全地図：地図の東が全て同じ地図か

#### ▼5.3.7 コースの適格性確認

- 現地での試走会と競技者のレベルを考慮し適切であると判断した。
- 人工柵の設置について、予算が限られていること・渉外上の理由・大会前日に設置することから、プランナーに対して下記3点を要求した。
  - ✧ 人工柵の総距離が調達可能距離を超えないこと
  - ✧ 公園内の通行路横断箇所を最低限にとどめること
  - ✧ 設置するエリアを3か所以内とすること
- 競技性を高めるため、キャンプ用の机を使用した人工特徴物の仮設置（2箇所）を行った。
- 予選に関して、レグ線が入り組んでいるため地図表裏のフリップ方式にしたいとプランナーより申出があったが、競技責任者・競技責任者補佐との検討の結果、2019年度のインカレスプリントにおいて、地図交換地点付近で失格者が複数名発生していたため不採用とした。
- 予選のパターンによって、ループを採用しているコース（MEQ1,3）と採用していないコース（MEQ2）の2種類が存在したが、予選は各パターン内での順位争いのため統一することよりも各コースの競技性を高めることを優先した。
- WEQにおいて、6番コントロールと9番コントロールが隣接しており、地図の折り方によってはコントロール飛ばしを誘発しかねない位置であったため、テクニカルミーティング資料への記載による注意喚起を依頼した。

### ▼5.3.8 コントロール位置説明が適切かどうかの確認

- コントロール位置を現地で全て確認し、競技用地図について適切なコントロール位置説明が使用されていることを確認した。
- コントロール位置説明が ISCD2018 に適合していることを確認した。

### ▼5.3.9 式典が適切かの判断

- 式典の準備及び当日の進行について確認した。

### ▼5.3.10 報道関係者、観客に対する処遇

- コロナ感染防止ガイドラインに従い選手以外の現地観戦を不可とした。
- 上記に代替し、坂野山遊企画にライブ配信事業を実施した。谷野実行委員長を含め日本学連と綿密な予算検討を行い実施に舵を切ったが、現地に観戦に来られなかった OBOG、出場できなかった選手等多くの反響を得ることが出来た。  
\*選手名のテロップ・タイム速報を画面に挿入できるよう協力いただいた的場さんへこの場を借りて御礼申し上げます。
- 決勝の競技エリア内の他選手の現地観戦に関して観戦場所を限定することは行わなかった。このような措置は世界選手権のスプリント競技でも採用されており、オリエンテーリング競技の観戦の楽しさを提供できたと考えている。

### ▼5.3.11 運営組織、人事、会計及び競技運営全般の確認

- 運営組織
  - ◇ 出走する運営者と出走しない運営者で情報のセキュリティレベルを分け、「見ない」「見せない」の共通認識を運営者全員に持ってもらうことで、学生・OBOG が一体となった運営を実現した。
  - ◇ 特に、地図情報・コース情報に関しては最も高いセキュリティレベルでの管理を依頼した。競技・運営・渉外責任者・プランナー・EA 以外の閲覧を不可とした。
  - ◇ 当日の運営者は 41 名（内 OBOG19 名）、当日出走するが準備を手伝ってくれた運営者は 7 名であった。
  - ◇ 41 名のうち、配信班は 13 名（内 OBOG9 名）であった。
  - ◇ また、これに加えて 45 名の OBOG がコントロールガード・裁定委員として運営協力をしていただいた。
  - \*当日の日当・交通費が支払えない状況の中、数時間トレイン内に佇み業務を遂行いただいた 45 名の皆様に心から感謝申し上げます。
- 会計
  - ◇ エントリー数が 315 名（昨対比 451 名減（学生のみ）、約 180 万円減）という状況下で工夫した運営が行われていた。詳細は会計報告の項で述べる。
- 競技運営全般
  - ◇ 予選でのウェアラブルカメラの使用について、予選・決勝の使用エリアが異なり、また重なるエリアについても柵の位置変更を行うため問題ないとした。

## 5.4 本大会において見られた課題

### ▼5.4.1 失格に関する事例及び対応

- 5.3.2 に記載の考え方のもと、競技者目線での競技運営を心掛けたが、想定を超えた事例が 2 件発生したため下記に共有する。
- 事例 1：通行禁止表記の池の飛び越え

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部（決勝）スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

MEF6 番コントロールの脱出において、通行禁止表記の池を飛び越える選手がいるのではないかとプランナーからの申し出があったものの、地図表記上での池の表現を誇張するのみとし、現地での青黄テープ等の設置は行わなかった。

現地は男子選手であれば飛び越えが可能である距離であったが、木道を外れ池を飛び越える行為は“普通”行わないだろうという判断をしてしまった。

結果、1名の男子選手が池を飛び越えてしまい失格措置を行うこととなってしまった。

運営側としても、自分自身が女性 EA であったため男子運営者の意見を尊重するべきであったし、選手側としても、通行禁止表記の通過について今一度注意いただきたい、と考えている。

#### ➤ 事例 2：立ち入り禁止の主要道の通行

ビジュアル後の 81 番コントロール脱出時に、西側の立ち入り禁止（パープルハッチ）とした主要道を通行する選手が複数名確認された。（4.3.3 項に競技責任者報告記載）

該当の立ち入り禁止は車道のため「危険回避のための立ち入り禁止」としており、想定ルート外かつ目立つ太い車道であったため青黄テープの設置は行わなかった。

しかし、コントロールガードより該当箇所への選手の立ち入りの報告が上がり、競技責任者・競技責任者補佐で話し合いを行った後、「危険回避のための立ち入り禁止」であることを理由に立入しようとする選手への声掛けを行うこととした。

競技前半では声掛けを行っていないこと、該当箇所を通過してもコース設定上有利にはならないことから、失格措置を行わず、該当選手へは競技後本件に関して報告・注意を行うのみとした。

## 5.5 おわりに・将来への提言

特殊な環境下で、運営者が団結し、無事競技を成立させることができたことに、心から安堵している。このような状況であっても国際レベルのスプリントを提供したいという思いを持ち高い水準のコースを用意した競技責任者の西下氏・コースプランナーの上島氏、その思いを実現させ形とした運営責任者の友田氏・競責補佐の瀬川氏、他運営者全員の尽力があったからこそ、今大会の成功につながったと思う。

個人的には昨年度の春インカレで中止という決断を受け入れた 1 人として、ロングに引き続きインカレ自体を開催できたことも同時に安堵を感じている。2019 年度春インカレの爪痕は深く、未だ当時の選手・運営者・学連関係者たちの心のどこかに傷を残したままのように思う。インカレ運営、オフィシャル、そしてオリエンテーリングの選手として、どこかでそれぞれがこの“借り”を皆が返すことができる日を願うばかりである。

さて、そのような思いはあるものの、このような状況で開催し“どうにか形になってしまった”、という思いもある。インカレは多くの課題を持ちながらも人々のインカレにかける情熱を燃料としてここまで続いてきた歴史がある。ただ、スプリントはその歴史は浅く、課題は多い。今回、「競技成立」という根本的であり最も重要な課題に向き合い、一旦の成功を見た。いや、成功してしまった、のかもしれない。

この場を借りて（長くなり恐縮ではあるが）、学生・学連関係者・若手 OBOG に対し、将来に向けたインカレスプリントの持つ課題を提示し、EA 報告として締めたいと思う。

### ▼5.5.1 学生は本当にインカレスプリントを求めているのか？

2019 年度のインカレスプリント参加者数 766 名に対して、今回は半数以上（約 59%）の参加者が減り、参加者は 315 名であった。①コロナにより自ら・親・学校の要請等で参加を諦めた学生、②コロナにより 1 年生が集まらず F クラスの参加者数が減った、という要素が大きいだろう。②に関しては昨年度 F クラス参加者数が 231 名だったのに対し、今年はたった 40 名であったのだ。しかし、②を差し引いても、約 260 名の学生は①のコロナ理由またはその他の理由（主にスプリント

の単日開催であることと推測)により、インカレスプリントへの参加を諦めている。260名という数は参加者の単価を4,000円とすれば100万円を超えるのだ。新入生の減収分も合わせると180万円はエントリー収入が落ち込んでいる。

### ▼5.5.2 山川さんがいないと「結局何とかなる」とはならない

これまで、インカレスプリントに関する議論は少なからずあったと思うし、今も日本学連で議論されているのは耳にしている。しかし、今までは「結局何とかなってきた」。今回も、山川さん(YMOE社)がろまんちっく村でインカレスプリントの開催ができなくなった途端、代替となる予選決勝の開催が可能なテレインを提示し、谷野氏を実行委員長とし、私をEAとした。主要な渉外は全て山川さんが行い、宮西氏への調査の算段を付けた。

「結局何とかなる」部分のコアな要素は、今は山川さんが握っているのである。

その、山川さんが「来年度以降はインカレスプリントに関与しない」と仰っている。そして、ロングの報告書にもある通り、山川さんが存命のうちに組織で山川さんに代わる体制を構築しないとインカレスプリントだけではなくインカレ自体の存続が危うい。“運営が大変だから来年度以降は出来ない”と日本学連内でアンケートが回っていると聞かすが、なかなかいち学生では本当の現状を想像しがたい説明の仕方だと思ってしまう。

つまりは、上記のような実情(単に人手が足りないことが問題ではない)をどうクリアにしているのか、知恵を出し合い、多くの関係者が当事者意識を持ち考えていく必要があると考える。

### ▼5.5.3 スプリントのテレインは有限である

フォレストのテレインも同じことが言えるが、スプリントのテレインはさらに顕著に数に限りがある。スプリントが出来るほど広く、ただのパークOにならない特徴物・障害物があり、会場が用意出来て、渉外上使用がOKとなるテレインはあとどれくらい日本に存在するだろうか。

それにも関わらず、この5~6年で多くのスプリントテレインを“消費”してきた。テレインに関してはインカレも何も関係ない。全日本大会・学生大会も含めて良質なスプリントテレインが資産であるということを認識し、大切に扱っていく必要がある。(JOAのスプリント委員会ではこの課題に正面から向き合っていることをここで伝えておきたいし、広く認識してほしい。)

そのような状況下で、本当に、新規テレインでのスプリントセレの開催は必要だろうか？

### ▼5.5.4 予選決勝方式の課題

スプリントセレを省略するため、今回のように予選決勝方式を前提とした開催という案も出るだろう。しかし、予選決勝方式は“今回だから”開催できた、という側面も記しておきたい。

まずは、テレインの広さ。今回の那須野が原公園はかなり条件が良かった。予選・決勝それぞれでほとんど使用するエリアの重複なしにコースを組むことが出来た。とはいえ、第一回試走の直前まで山川さんに交渉いただいていたプールエリアの使用が出来なかった場合、予選はテニスコートまわりをぐるぐると回る単調なコースにせざるを得なかったし、今回の大会への印象も大きく変わっていただろう。

次に、エントリー者数。上述の通り、今回のタイムスケジュールはかなり厳しかったが、男子予選のエントリー者数が207名と予想から約60名分下回ったからこそ実現ができた。他レーンと同等のレベルのコースを4パターン作成することに苦慮していた中で、3レーン×70分のスタート時刻で抑えられたために、予選のスタート時間を想定よりも短くすることが出来、なんとか1日の中に予選・決勝のタイムスケジュールを組み込むことが出来た。実際、昨年と同等数のエントリー数があったら、スタート時間が延び、予選決勝の間の準備時間を十分に確保出来ず、競技が成立していたかどうかは分からない。でも今回のように一方では、エントリー数が足りないがゆえに調査費用・運営者の日当も十分に支払えない不健全な運営となる。(今回はスポーツ事業継続支援補助金・寄附・県協会のご厚意・コントロールガードのご厚意に頼った運営であることを改めて強調しておく。)

このジレンマに、予選決勝方式を持って乗り切るのは困難を極める、と言わざるを得ないのでは

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

ないだろうか。

### ▼5.5.5 学生が運営者となること

5.3.11 項に記載の通り、今回の運営者は約半数が学生であった。OBOG は配信班に偏っているため、実際競技に関する運営という意味では 28 名の運営者のうち 10 名が OBOG で、半数以上が学生の運営者となっていた。今回、“学生主体”という名目のもと実行委員会が組織され、たしかに数から見ればそうではあるものの、正直、学生が主導してこの運営が進んでいたかというところとは言いえない。「学生主体って何？」という思いに包まれながら、私はこの運営を進めていた。

やはりその中で感じたのは、学生たちがどこか「結局何とかなる」と思っているというところ。彼らにインカレ運営経験がないから、とか、そういう話ではない。(もちろん学生運営者たちは彼らなりに精一杯頑張ってくれていたが、恐らく“気持ちの表れ”がそのような感想につながっている。)でも、では自分が学生時代の時にそのような“インカレの危機”に曝されていたかというところというわけではないし(むしろインカレが必ず毎年用意されている幸せな時代だった)、学生たちに何を求めているかという答えはない。本当は、4 年生は出場してほしかった。「私は出場したいからもっと OBOG で運営してもらえませんか？私が声掛けします」という学生の言葉がほしかったのか。「今のエントリー数では配信が出来ないからもっと広報しましょう！」という言葉だったのか。(結局配信が出来るようにあれこれ知恵を絞っていたのは OBOG と谷野だけであった)

この問いに答えはないが、5.5.1 項とリンクはしている。

学生自身が運営すれば解決する話ではない。学生がインカレスプリントをどうしていきたいか、それを強く問いかけたいのである。

### ▼5.5.6 ライブ配信の可能性

ここまで、強いメッセージを発してきたが、最後は 2020 年度のインカレロングおよびスプリントで試みたライブ配信について触れて終わりとした。今は、コロナ禍だから観戦に来られない OBOG や出場できなかった選手に向けて配信を行うという名目で配信プロジェクトを行っている。しかし、これはコロナがもし収束しても、ぜひ続けてほしい事業であるとしてここに記しておきたい。

もちろん、お金がかかる話ではある(約 20~30 万円の財政確保が必要。なお、これはビジョーカー 1 台の 1 日あたりの借入金額の半額に近い)ので、「誰のために何を見せるか」ということは常に問い続ける必要があるが、今まで内向きだったオリエンテーリングという競技に少しでも風穴を開けることが出来るのが、配信や UNIVAS ではないだろうか。

私はこの配信を通じて、少しオリエンテーリングから遠ざかっていた人がオリエンテーリングを思い出すきっかけになったり、選手のご家族・友人がオリエンテーリングを応援できる新たな形となると考えている。コロナだから現地に来られない、だから配信を行う、という話で最初は始まったかもしれないが、今後もインカレだけでなくオリエンテーリング界の新たな文化として育てていってもらいたい。

インカレスプリントの今後について、どのように議論を進めるべきか日本学連幹事たちが悩んでいるように見えたので、ここに論点を示させてもらった。私なりの解は日本学連幹事長に伝えてあるので、ぜひ意見の 1 つとして扱ってもらい、今後、議論がより活発になることを願う。

ここに書いてあることが全てではないし、いろいろな意見・考えがあつていいと思う。もし思うことがあるのであれば、直接日本学連の幹事たちに伝えてあげてほしい。

インカレが学生たちにとって、いつまでもかけがえのないものでありますように。

## 6 将来への提言

### 6.1 運営組織、人事、会計及び運営全般

運営責任者 友田 賢吾

#### ▼業務委託契約

業務分担の明確化、コストの可視化において有用であるため、今後も委託できる業務については継続して業務委託契約を締結することが望ましい。

#### ▼情報伝達

繰り返しになるが選手と運営を兼ねる者がいる実行委員会構成は今後一切なくすか、名目上の役職とすることが望ましい。本大会で活用したコミュニケーションツールでは選手を兼ねる者と、そうでない者でアクセスレベルを設け、それらに応じて共有情報の管理を行ったが、如何せん負担が大きい。ただし、学生主体運営については全くの理想論ではないと断言する。

#### ▼渉外業務の進捗管理

本大会ではYMOE社におおかたの渉外を委託したが、スケジュールの観点からコミュニケーションは密に行い、適切な報告・連絡・相談が行われていたように感じる。なお本大会は渉外責任者に業者が入るイレギュラーな構成となっているため、通常のインカレにおいては本大会を参照されることを勧めない。

#### ▼当日パートの管理

本来は運営責任者の管轄のもと管理がなされるが、運営責任者および競技責任者の両方がインカレ運営未経験であったこと、一部パートに選手を兼ねる者がいたこと（それにより競技情報の厳重な管理を行わなければならなかったこと）、開催直前まで当日運営者の追加・入れ替わりがあったことを鑑み、両責任者が人事面と競技面において役割を分担し、共同で管理・運用を行った。

### 6.2 競技全般

競技責任者 西下 遼介

#### ▼役割の分担

スプリント競技がインカレの正式競技となってから5年以上が経過し、国際大会を意識したルールとコースによって、競技の質は年々上がりつつある。しかし、それに伴って競技責任者やEAの作業量も増大した結果、良質なスプリント競技を開催できるだけのベース部分の準備が追いつかず、軽微なミスが重なり、競技不成立に近いような物議を醸す事態を引き起こしやすくなってしまったといえる。そこで、大会準備の初期段階において、責任者がどのような作業を行うべきかを事前に運営者同士で認識を擦り合わせ、負担が大きければ作業量を分けられるような人員を増やすべきである。実際に本大会では、競技責任者とイベント・アドバイザーの負担が大きくなることを考え、それぞれサブを付けたことでうまく大会を回すことが出来た。ただし、人員を増やし過ぎると、少人数と比較して連携を取るまでに時間を要するため、あくまでも「必要最低限」に留めるべきである。

#### ▼演出を意識した大会へ

今年度から公に配信を行うことが可能となったため、今後はこれを意識したコースや会場レイアウトも考慮しなければならない。どのような演出を行うかの基本となる部分については、IOFルール付録のライブニッツ協定に示されているので、責任者や配信事業者は是非参考にさせていただきたい。また、演出によって、競技の公平性に関わる事案が生ずることについても考えていかなければならない。例えば、本大会では一部の選手に対して追走を行ったが、追走されている選手の位置が後ろの選手から特定されたことによって、さらなる追走の可能性も考えられる。このように演出面のリスクにおいても、競技責任者はあらゆる可能性を想定して大会に臨まなければならない。

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

## ▼インカレ実施規則とスプリント競技部門ガイドライン

実施規則においてスプリント競技の記載が少なく、また世界基準に比べて古いものが多い。2019年度の報告書においても改善の提案がなされているが、早急な修正と更新をすることを再度求める。

## ▼インカレ実施規則と JOA 競技規則の整合性

インカレ実施規則そのものを否定する気はないが、JOA 競技規則と乖離する部分が多く戸惑う面があったことは事実である。乖離している点についてはその要不要を検討されるべきで、敢えて並行して規則を設ける意味を再考されることを学連部外者の立場として推奨する。

また上記 2 点については早急な対応がなされることを期待する。

## 6.4 加盟校に向けた提言、お願い

## ▼競技マナー教育

本大会は例年に比べ立入禁止区域への侵入等の違反事例は少なかった。この点について実行委員会側が十分な対策を行ったこともあるが、日頃から各校においてマナー教育がなされていることの表れであるようにも感じる。

一方でコロナ感染対策として大声を出すなどは控えるよう求めていたが、やはりインカレ競技の熱さにあてられ忘れてしまう参加者もいたことについては、再度実行委員会側が求めるルールに準拠いただくよう各校で指導をお願いしたい。

特に 1 度の不注意が多大な影響を及ぼしかねないこの状況下においては、一層自分自身の行動に自覚を持っていただきたい。

# 付録資料及びインカレスプリントガイド ラインについて

(有) ヤマカワオーエンタープライズ 山川克則

## 7.1 はじめに

2020年3月11日(水)に2020年度インカレスプリントの為の最初の企画持ち込み渉外を道の駅うつのみやろまんちっく村に対して行ったあとそのまま入った病院、腎臓病である私の治療(透析)中において大きな不調をきたし、その後も業務は続けていたものの、体調悪化(頻繁な不整脈)をずっと引きずり、とうとう血行障害を引き起こし、7月15日に入院手術。手術中に心拍異常、4分半心肺停止状態になり、蘇生術により7月20日に意識を取り戻し生還。という状態を経て、他でも報告されているようにこれ以上カラダに負担の大きいスプリントの渉外活動は生死にかかわると思い、入院中に「もうこれ以上インカレスプリントの初動企画からの渉外を自分では行わない宣言をしよう!」と思い、次の幹事会の議題に上げて諮っていただいた。その際に運営資源・トレイン資源の関係から、全日本スプリントとの融合も視野に入れてはどうかという提言込みで、9月26日駒ヶ根での(対面)幹事会での最初の議論となった。下の表にあるようにここまでのインカレスプリントに大きな足跡を残しながら、“カラダがきついので抜けます”だけでは無責任かと思い、この報告書のページを借りて色々20数年に渡って取り組んできたことや当時当時の論調を記録に残しておきたい。

## 7.2 スプリント黎明期

1990年代になって、IOF(世界オリエンテーリング連盟)ではそれまでのフォレストでのオリエンテーリングを「クラシック競技」と呼び、異なる競技性要求として、「ショート・ディスタンス」、「パークO」などの種目が導入され始めた。日本でも1993年よりインカレショートが始まっている。

([http://www.orienteering.com/uofj/ics2002/bulletin3/02\\_history.pdf](http://www.orienteering.com/uofj/ics2002/bulletin3/02_history.pdf))

またさらにも楽しめる競技として、パークOも分化し始める。初期の頃(1970年代後半)より、公園での大縮尺のオリエンテーリングは安全面から導入プログラムとして良い、ということで行われていたものであるが、より適した別の地図記号体系を制定したのもこの頃。国際的競技会は各国のエリート選手を集めて世界を普及がてらツアーで回るPWT(Park World Tour)という形で開始、日本でもアジア最初の開催地として立川市の国営昭和記念公園で1999年10月11日に行われている。

2004年にはそれまでの「クラシック競技」を「ロング・ディスタンス種目」、「ショート・ディスタンス競技」を「ミドル・ディスタンス競技」と世界の情勢に合わせて改称し、インカレは秋と春で開催種目の交換を行っている。そしてパークOは「スプリント種目」として改称されると共に、ルートチョイス課題が中心で、公園だけでなく市街地でのオリエンテーリングも可能とする形(その混合系もあり)に変容した。そしてスプリント用の地図図式もさらに洗練される。2005年は愛知県三河高原でアジア初の世界選手権誘致を成し遂げ、スプリント種目も開催される。(日本人選手がロングでは遠い存在だったファイナリスト、スプリントでは複数決勝進出者を輩出する。)しかし、どのような競技性がスプリント種目として適するのか、この頃は世界でもまだ定まっておらず、試行錯誤が続いていたように思う。日本での世界選手権は世界でのスプリントとしてはあまり良い評価を得られなかったようだ。そんな中、日本でも世界の歩調に合わせて2008年から全日本スプリントが始まる。私も第2回全日本スプリントを新潟での全日本リレーの前日大会として、長岡市の国営越後丘陵公園で引き受けた。学連のスプリントも2009年からインカレスプリント実施の可能性について議論が始まっている。全日本スプリントでの学生特別表彰の機会も第1回~第3回で採っていただいた。そして以降2回か3回、時期尚早ということでインカレスプリントの導入を学連の正式議論の場で否決されている。

当時の日本でのスプリントは見せる(魅せる)ことに主体が置かれていて、世界の“瞬時のルート

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

チョイスを問う”コンセプトは、まだ定着していなかった。加えて、2005 世界選手権後は、いわゆるロスト時代でもある。精度要求が厳しくなった風潮において、地図作成に多量の負担を要する広いフォレスト地図での大会は財政面からも忌避されるような流れになり、全日本ロング（全日本大会）の開催を返上する県協会が相次いだ。折しも当時は学生を中心にオリエンティア減少に悩んだ時期でもあり、(特に地図作成に負担の少ない) パークO ならやれるよ、で持ち回りの義務を果たしたとする県協会やクラブもあったように思う。そんな感じなので、世界の潮流とは別に全日本スプリントが地方協会主管で開催され続け、パークO とスプリントの違いも明確でないまま進んでいた時代と現在からは評価されるであろう。

### 7.3 インカレスプリント開始まで

この頃はまだまだこの種目の”普及”に重点を置かねばならない状況だったように思う。私もスプリント競技の本質を深く理解しないまま、まずは普及からと 2010 年度から「山スペ」なるシリーズ戦を始めている。

[http://www.orienteering.com/~ymoe/yamakawa\\_special20160511.pdf](http://www.orienteering.com/~ymoe/yamakawa_special20160511.pdf)

そして、数回の否決を経ても尚、スプリントインカレも開催しようと学連議論の場を言い続ける。しかし当時は、ただでさえインカレ準備は大変なのにそんな議論を持ち込む山川は迷惑、そんな雰囲気がありありであった。そんな中 2014 年 3 月の「矢板日新」でのインカレに乗じてインカレスプリントの実験大会を強引に開催、バタバタ運営も批判の対象になり、この実験大会だけではインカレスプリントの開始議論は尚も早計ということになり、もう 1 回インカレ実行委員会スタッフ同意の上でロングと並行準備の元、ちゃんと準備してちゃんと運営してそれから開始するか判断しよう、という議論になった。最初は私の独走気味で始まった導入議論もやっと晴れて皆で共有できる議論になり、試行大会を経てやっと翌年から正式にインカレスプリントが開始される訳である。

	開催日	開催場所	テレイン	山川	翌日	全日本スプリント
実験	2014/3/7	栃木県矢板市	矢板運動公園	○	矢板日新	始まりは 2008 年千葉県大房岬自然公園
試行	2014/10/11	福井県あわら市	トリムパークかなづ	△	あわら迷図	朝霧野外活動センター (この年が第 7 回)
1	2015/10/3	長野県富士見町	富士見高原リゾート		富士見高原	信州スカイパーク
2	2016/11/19	栃木県下野市	天平の丘公園	○	前高原	宮崎市民の森
3	2017/11/11	岐阜県大垣市上石津	時(とき)	○	関ヶ原古戦場	国営アルプスあずみの公園 大町・松川地区
4	2018/9/15	長野県駒ヶ根市	駒ヶ根高原家族旅行村	○	駒ヶ根高原	国営木曾三川公園 祖父江砂丘
5	2019/11/9	岐阜県中津川市	中津川公園	○	桜の湖	福島市あづま総合運動公園・水林自然林
断念	2020/10/17	栃木県宇都宮市	ろまんちっく村	○	ミツモチ山麓	光が丘公園/光ヶ丘団地エリア (断念)
6	2020/12/6	栃木県那須塩原市	那須野が原公園	○	単日大会	阪神奈大会 奈良県立馬見丘陵公園 第 13 回

以降の実績は上の表の通りである。“山川”というのは、私が企画立案に関わったかどうかを示すものである。福井は、当時プロマッパーとして活動を始めていた福井生まれ神戸大卒の三上氏が 2012 年度の全日本大会を引き受け、地図作成は遅れに遅れ、当初開発予定を大幅に縮小したものであった。それでも会計は県協会に大きな打撃を与えるほどの大赤字だったのを見て、地図は拡大して作成完遂、スプリントは同じ会場付近を ISSOM(当時規定)で作直せばよいのではないかと私が(彼に成長してもらう意味でも)言い出して機会を提供したものであるから△とした。翌年の第 1

回は、これまた当時プロ Mapper 稼業を開始していた西村氏に企画から関わってみてよと持ち掛け（それだけ私は後進の Mapper の出現を複数望んでいた）、氏が丸ごと引き受けてくれたので、ここには記号が入っていない。

## 7.4 インカレスプリントガイドラインについて

さて、長い長い議論を経て、ようやく正式に開始する決定に至ったインカレスプリント、その際に 2015 年 3 月の幹事会・総会で、今後運営を主管していただく実行委員会への指標として、それまでの議論を反映して私が文章に落とし込んだのが「インカレスプリントガイドライン」である。学連 Web の奥の方にあるので探しづらいが、「規約書庫」→「日本学生オリエンテーリング選手権大会に関する規約」の中にある。

[http://www.orienteering.com/~uofj/media/rules/20150406-2015\\_ICS\\_guideline.pdf](http://www.orienteering.com/~uofj/media/rules/20150406-2015_ICS_guideline.pdf)

この頃は、まだスプリントに関しては世界でも刻一刻と価値観が変わるような発表があり（地図記号も今は ISSprOM2019 であるように、随時それに応じて変更され続けている）、色々世界の情勢を見ながら改定していこうと 5 年をもって見直すとし、ロング種目とセット開催でも分離開催でもよいとか、現役学生の運営参加もあるだとか書いている。そして問題は「要件の優先順位」である。「スプリントとしての競技性優先」は、このガイドラインには書いていない。それはその頃でも容易に、公園にしろ市街地にしろ大人数が集まることの交渉の困難さが予想されるが故の観点であるが、ここが 5 年間の見直し議論で大きく考え直しを要する部分となった。そして、コロナのせいではないとロング報告書にも書かれているが、きちんと見直し議論をしないまま（その余裕も学連にはなかった）、6 年目を迎えて、失敗と評される中止判断に至る。そこを詳しく見ていく。

## 7.5 テレイン選択と渉外面からみる最初の 5 年間の評価

### ▼7.5.1 2015 年度「富士見高原リゾート」

前述したように、初回は西村氏に初動企画からロング合わせてやってねで、相談していた。その際にしばらくフォレストの大会をしておらず、洗練された今風のマップに仕立て直すことに意義がありそうということで「富士見高原リゾート」に氏は目を付け、施設内でスプリントも行えばよいと企画した。案の定、渉外はほぼリゾート施設とだけ行えばよく、一人 1 日 500 円の使用料さえ払えば、入山に関する費用も選手権待機所もスタートへのバス輸送も余分な費用が掛からない構造であった。そして無事初回のインカレスプリントは盛況のうちに継続基調で終了することができたのである。（一方、衆人環視の中、多くの学生選手が平然と青黄色テープを突っ切って（飛び降りて）行く様子を真当たりにして、各校のスプリント競技ルールの徹底、マナー教育の必要性も大きく指摘されたことも付記しておく。）

### ▼7.5.2 2016 年度「天平の丘公園」

そして第 2 回である。ロングは矢板の番であった。結局その後は上の表で“山”に全部〇が付くわけであるが、長い長いインカレスプリント導入論議の中で他の人に頼れない状況下では自分が何とかするしかなかった。（この“山川が何とかする体制”に関する考察は宮川 EA 文書も参照）私が栃木県内の 3 テレインを選定し、集まってくれた実行委員達と 2016 年 5 月 28 日に行くことになる。

（ちなみにヤマカワハウスは前年の 2015 年 8 月に開設）一番適と評価した某テレインは施設側から言下に不許可を頂き下見むなしく撤退、二者択一になったが、競技性の面で圧倒的に評価が違い、県北のロングテレインからは最も遠い県南の「天平の丘公園」で開催と決まった。ここで得た教訓は、天平の丘公園は花見スポットとして県内一の場所であり駐車場の収容力（1000 台）は問題ないものの、文化財が絡む渉外では、占有の交渉とか、公共輸送機関がないことからバス輸送の問題とか、当初見積もりより渉外の手間が思いのほかかかったことである。交通費も県北～県南で結構嵩むし、早速ガイドラインを持ち出し、予算不足分を学連幹事会に 20 万円の補助金申請している。（この頃、一般クラスは無しでチャレンジのみ、あとそれでも会計をゼロで閉めるために調査費で調整している）

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部（決勝）スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

### ▼7.5.3 2017年度「時(とき)」

第3回は私の郷里である岐阜県協会の思惑もあって、ロングは関ヶ原を永い眠りから復活させまじはインカレを誘致しようということで、西村氏に調査も早々に依頼していた。しかしスプリントを行う場所選定には非常に苦労した。岐阜県協会事務局を巻き込んでの渉外活動となった。県内の関ヶ原からアクセス可能な公園は、3か所ほど下見したがごとごとく第2回までに醸成したスプリントの価値観から言って明らかに不適であった。苦慮のあげく隣県木曾川の対岸まで下見範囲を延ばし、一宮市の「138パーク」なら天平の丘公園水準のスプリントができると見込んだ。木曾三川公園は、岐阜・愛知・三重にまたがる国営公園であるが、管理事務所は岐阜県側にあり、普段の交渉窓口も岐阜県協会にある。「かさだ広場」でのオリエンテーリング実績もあることから、岐阜県協会事務局に「138パーク」でのインカレスプリント開催可否の交渉を依頼した。数回の折衝の末にいただいた回答が“子供の来客が多いからダメ”であった。その際に“ワイルドネイチャープラザ”(祖父江砂丘のこと)なら、開催していいよ。シクロクロス(マウンテンバイクの競技種目)の開催実績もあるし、オリエンテーリングの許可も出せるとの回答でした。早速下見に行ったところ、スプリントの競技性としてはうーんといったところ、まだ決めるにはと悩んでいたところ(リザーブ扱い)、岐阜県協会の会員から、上石津なら超田舎だしロゲイニングの開催実績もあるし、当時ヨーロッパで流行りだした市街地スプリントも受け入れてもらえるのでは、との提案が入り早速それにすがりつくことになる。紹介してくれた方と一緒にまずは現地に企画持ち込み渉外、交通規制はしないけど、運よく開催には了解はしていただけました。警察にも段取りしてくれて、使用許可も出す、ということで、正式試合として日本初の(注釈:2005愛知WOC中に集落スプリントを3か所ほどでトレーニングキャンプにきていた外国選手相手に実験的に開催している)市街地スプリントが披露されることになる。その後の報告は実行委員会がしているので省くが、学連の補助金申請も前回同様明らかに不足が見込まれるので幹事会決済の20万円を申請、地元説明会はその後3度(最後は糸井川実行委員長も同席)、そして実行委員による大会前の全戸挨拶と(工数が非常に多い)渉外活動につながる。一般クラスもこの回はチャレンジのみで開催。そして余談だが、当時慶応義塾大学3年の上島君から卒業したら、是非インカレスプリントのプランナーやりたいとの発言を私がしっかり覚えていて2020年度の声掛けにつながる。

### ▼7.5.4 2018年度「駒ヶ根高原アルプスの丘」

第4回は、いよいよロングも案が詰まってきたりやる場所がない、誘致に動く地方協会もない、2017年3月マキノでの春インカレの理事会宿にてどうしようかの話し合いがもたれ(当時はテレインクローズの観点もあり、まだ1年以上前に計画して動く体制であった)、出席者2名が太鼓判押せる唯一のネタということでYMOE社が著作権を押さえている駒ヶ根高原でということになった。スプリントの地図も過去からの修正財産があり、結局ロング・スプリントの同一会場は、福井での試行大会と第1回・この第4回の3回しか実現していない。しかし広大なフォレスト部分は、スプリントには適さないという判断になり、公園施設部分のみで2マップ、フリップ式という競技形態になる。一方財務問題はこの回から、インカレスプリントの一般クラスも開催することになり、定着度から出場人数も予測の範囲内となり、一気に秋インカレの赤字体質は改善する。

### ▼7.5.5 2019年度「中津川公園」

第5回は、第4回で経験した通り、いよいよロングの誘致に動く地方協会もクラブもなく、開催計画行動自体が窮地に陥る。そして学連からある県協会に著作権など有利な条件を持ち掛け開催打診に動く(2018年3月)。しかしその県協会からは渉外問題を理由にお断りの回答が来る。そうこうしているうちに夏になり、状況を夏の同年9月の学連総会に報告、ロングは駒ヶ根に引き続きリメイク以外に方策はないと判断するが、駒ヶ根以外の私の持ちネタの椀の湖が矢板かどちらがよい?で非公式に挙手してもらい(矢板だと秋も春も全部栃木で連続になる、逆に椀の湖だと東海ばかりに役員稼働が集中する)、大体2:1で椀の湖に票じられたので開催に動く。問題はスプリント。周辺に天平の丘公園タイプも上石津タイプも適地はない。中津川市が運動施設を一つにまとめて大型運動公園を造成していたのでそれにかけてみるべく下見挙行、運動施設をお金積んで丸ごと借り

て、色々人工の細工をすれば可能ではないかと思ったのがその年の真夏。秋の移動時に立ち寄って年間予約状況でも探るかと飛び込みで訪問したのが 2018 年 10 月、下調べのつもりだったのがすでに 1 年以上前のその時点で、私が考えていた室内ドームは全土曜日押さえられていて、陸上競技場なら 11/9 のみ開放できる、とのこと。結局この年は学連の他の誰にも相談することもなくロング合わせて日程をこの段階で決断することになる。あとは、当時の報告書の通り陸上競技場を利用したテレイン改変に実行委員会が工夫を凝らす工程に入っていくことになる。

#### ▼7.5.6 今年度、露見した涉外問題と評価

そしてこの報告書が対象とする 2020 年度である。ロングは 2019 年度までの開催地決定に至るまでの大きな苦労を踏まえ、また（駒ヶ根含めて）東海地区開催が秋も春も続いていたので、矢板でやるしかない、しかし、矢板の里山ではロングも会場選定でネタ切れ、学連の新規地図作成事業で隙間を埋めていく事業がせいぜいで、冬には雪に埋まるもっと標高の高いところを目指す、県民の森をターゲットにする。でもここは栃木県協会が前から企画を温めていたところで版權を学連に渡したくない。しかし栃木県協会主体で運営からすべてを企画実行できる力はない（この辺は運営責任者桑君の文章参照）、ということで栃木県協会が誘致したという形にするが運営体制はインカレ然としたまま、という組織的にはちょっと混乱気味の実行委員会体制になる。関東で続くことになるのでスタッフ集めが悩むかもと考えていたところ、幸いにして？コロナで中止になった 2019 年度春インカレのメンバーの気持ちが消化しきれなかったのか続々と集まってもらった。問題はスプリント、もうテレインネタは無いのである。ここまで長く書いてきたが、テレイン選定基準はガイドライン上は競技性ではなく、まだ今も収容力観点なのである。そこでアクセスの便利さ、収容力（駐車場）、施設側の危険を伴うスポーツイベント開催への理解度（ろまんちっく村もシクロクロスの全国レベルの大会を開催していることを知っていた）で、過去の 1 年前以上に初動交渉行うという基準に遅れること、7.1 章で述べた 2020 年 3 月 11 日に県協会理事長と一緒に最初に施設を訪れることになる。

そして、この時点でここも 10 月 17 日しか秋は空いていないことを知ることで、自動的に 10 月 18 日がインカレロング開催日となる。加工を施そうと考えていた大広場にはサーカス団が興行テントを設置していたが、秋には東北巡業に行くからいなくなる、10/17 は大丈夫ということであった。その後の経緯は競技責任者だった八神氏が述べているので省略するが、数々の規制事項も発覚し、サーカス団もコロナで巡業に出られず居座るわで（この時点で広場の改造は無理になった）、その上興行テント内は密になるということなのか、我々が考えていた公園内の別の構造物込みの広場にも野外ステージを作られるわで、とてもインカレスプリントの競技性を保証できない、ならば撤退しようということになる。（そして、ろまんちっく村での競技観点での却下事項がすべて通っていたとしても、どのみち各大学の宿泊不許可規制でインカレスプリントは開催できなかった、ということになる。）

そして 7 月に死の淵を彷徨って戻ってきて、入院中のベッドの中で、上の表のように私頼みの準備は、年々ハマリ度は悪化しているし（準備期間がどんどん短くなっている）、これ以上私が初動企画に関わるのは学連にとってもよくないことじゃないか？と思うに至る。でも今年度に関してはこれだけの思いをして時間とエネルギーを注ぎ込んできたインカレスプリント、何とかよい継続への橋渡しはできないかと考えて出したのが「那須野が原公園」である。ここはかつての県大会で使用実績があるし（参加者 30 名）、他の県営公園でも私も県協会理事長も涉外の実績を踏んでいる。人気の公園ではあるが、閑散とする 12 月なら許可は多分出る。駐車場広い。（実は簡単な部類に属する）このテレインは加工で何とかできる。準備も非常に短期間ではあるが自分が責任をもって寄り添う涉外をしていけば可能……これらの思いが巡り入院中にどうしたらインカレスプリントらしい大会が開催可能か考え、ガイドラインとも照らし合わせ、学生主体で OB とうまくコンバインドするインカレ、競技準備の主役は全部若いエネルギーで状態の良い人たちに任せる、で人事構想を練り、西下・上島・谷野・宮川に声をかけることを決意。早速、退院翌日の 7 月 26 日にしおや 4Days に登場し、その裏で直接それぞれ会って動いた、という訳である。そしてこうして開催してみても結局全部うまくはまった訳だが、ここでもプールの使用という難しそうな涉外要望を競技性観点から

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部（決勝）スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

突き付けられた。幸いに所長決済で理解をもらえてよかったが、ダメ元の交渉であったことは付記しておきたいし、今のガイドライン基準では、収容力とこの(ある意味危険な競技への)施設側(集落スプリントなら地元側)の理解度の方が上位の価値観で述べているのである。5年経過して見直すとしているのであるが、まだ見直案の発出まで議論は至っていないし、もう私主導でそれを書くべきでもないだろう(そのためにこの長い資料を書いている)。

## 7.6 まとめ

さて一方では悪弊とも言われかねない程、私の初動企画あってこそでインカレスプリントが継続できてきたわけだが、この報告書で各氏が述べているように、それ故に色々な問題が露見しているし、また光明も見えてきているとも言える。それらをまとめて、新たなガイドライン制定への橋渡しとしてこの長い文章を終える。

まず事業者(プロ) = 渉外兼任、ということに関して。ここには2点重大な側面があって、学連の歴史は創設以来(1983年12月創設、その年度のインカレ(第7回)から、個人競技とリレー(団体)の2日間形式)に変容して以来、就職もせず(社会不適合者と言われる所以…実は数社落ちた)ずっと愛を注ぎ込んできた、私の人生 = 学連・インカレという経緯。プロ事業者になったのも学連の為、インカレの継続の為の側面が大きい。(このあたりは、[https://www.o-support.net/too\\_9f](https://www.o-support.net/too_9f) や、[https://www.o-support.net/too\\_9](https://www.o-support.net/too_9) 参照。)プロ事業者というより渉外の場では学連副会長の立場で相手に対してモノを言っている場面の方が大きいこと。そして第2点、学連の範疇を超えて自分が関係する県協会の渉外利益も考えないといけない点である。渉外資産というのは継続的な関係あってこそで、それ故に先方からの信頼も得られる。他の県では大きな渉外問題に発展しかねない場面でも、ヤマカワハウス周りなら若い(青い)学生が何かしでかしても私がすぐ謝りに行って、火消しに走れば大きな問題にはならなく信頼関係は揺るがない。あと学生は1年交代で替わるので強固な信頼関係にまではいきつかない。こういう点で渉外を自分が押さえている訳であるが、そろそろ年齢的にも何とか引き継がないといけない時期であるとも言える。相手も年下の場面が多くなってきているし、時に応じてこれからの日光、これからの矢板・塩谷を担っていく青年と宮西や坂野を引き合わせたりしている。結局 YMOE という会社をどう誰が引き継ぐかという問題に直面し、病気で足がうごかなくなった今も渉外面では現役で活動、事業継続しているという状況である。

また、渉外が事業者担当というのは、評価という面でも実は問題が多い。成功・失敗、その評価の分かれ目が極めて微妙。負担が大きい割に委託仕事としての評価基準があるのか? という疑問が付いて回る。組織内の者が担当するなら、〇〇(スポーツ競技)連盟とかだと専任従業者として給料が出るし、お役所だと税金から給料が出る仕事。大成功すれば出世するかもしれないけど、失敗したからと言ってクビになるわけではない。業務委託の場合、失敗したら評価無しになるのだろうけど、事業者にも生活がかかっている。また、過去のインカレでもボランティア業務として渉外を行う場合、精神面で続けることが難しく、ドロップアウトが一番多いパートでもある。その際は、より上位の実行委員長なり、副会長なりが登場して何とかフォローしてきたという過去例もいっぱいある。それらを含めて“山川が何とかしてきた”という歴史を、深く噛みしめていただきたい。

一方、光明という点では、1. 市街地スプリントが先鞭から普及に向かっている兆しがあること(延期になってしまったが、2020年度全日本スプリントもこの範疇)。2. 一見、素のままなら簡単な公園トレインでも、人工柵など加工を施し、練りに練ったコースであれば十分にスプリント競技足り得ること(くしくも今回2連勝したチャンピオン小牧が、“スプリントはプランナー次第”という発言をしている)。3. 現役学生の運営参加(専念も一部参加も有り)は、今回各人が感想として述べてくれている通り、経費削減という面だけでなく、インカレへの継続熱量という点でも非常に効果的であったということ。この3つが大きく挙げられる。

昨年9月の私が渉外撤退宣言、そしてその前に恵那市の望郷の森での春インカレの時の学連総会で打ち出した山川企画以外のインカレ開催へのロードマップ

([http://www.orienteering.com/~ymoe/ufoj/intercollegiate\\_next\\_plan20190317.jpg](http://www.orienteering.com/~ymoe/ufoj/intercollegiate_next_plan20190317.jpg))

このフロー表からしても、本来なら2019年3月理事会には諮っていないといけない2021年

度秋インカレの開催計画を私は全く切り出していない。まったく今もって学連の場で、何も実施計画のアナウンスは行われていないのである。報告した実績例が示すように1年を切ったインカレスプリント規模の会場確保は、それが例え許可がおりるテレインであったとしても、すでに予約満杯で使用できないということも十分あり得る。コロナ禍でなくても非常にお先真っ暗な状態である。

実は私が直接問題提起を投げかけたフロー表に従い、プロジェクト名「NitiUプロジェクト」という4世代に渡る幹事長経験者で構成されるワーキンググループが動き出している。そこで2021秋インカレを考えてもらっています。この時期からの確保で果たして並行してインカレスプリントまでできるのかという問題は今現在も大きく立ちはだかっています。私としては実験大会で使用して、その後のセレでも使われている「矢板運動公園」ならば、保険（リザーブ）として使えるよ、渉外もするよ、という提案だけはしておきます。上記光明2.と3.を組み合わせれば、スタンドのある野球場も休業中のプールも広い駐車場もありますからそれらを利用してインカレスプリントらしさはリメイクでも創出できるとするものです。（しかも野球場部分は地図だけできていてまだ未公開。）また私自身の方も自分の管理する他のスプリントテレインで、リメイクであっても2.の観点の実践をより踏んで、さらに評価を洗練させていきたいと考えています。（あくまでもNitiUがプランを出せないときのリザーブ案です。）ロングに関してはずっとノープランのままで、成り行きを「NitiUプロジェクト」に託します。

## 7.7 最後にガイドラインへの提言

1. さすがに新ガイドラインでも「収容力」や「渉外理解度」を先頭価値に置くのは無理がある。というか、競技準備に必ずあとでしわ寄せが行く。「観る楽しみや高負荷下での判断スピード（ルートチョイス）が求められる競技の楽しみが本質」であることをまず述べる。その上で収容力や相手方のこの競技への理解度を述べる。

2. しかし、それにはテレインに限りがある。100人程度のパークOと500～600人を収容するインカレスプリントでは施設（地元）に掛かる負荷が全然違う。加えて同規模になる関東のスプリントセレも同義である。100人と500人は渉外負担が全然違うことを認識するべきで、地区セレ含めてスプリント競技の大会の全体構造から根本的に考え直すべき。昨年9月幹事会に全日本スプリントとの融合も案として出したが、それは学連としてはあまり歓迎の論調ではなかった。ならば学連として独立してスプリントを継続して行きたいのであれば、今後どう展開していけばよいのか、もっと真剣に重く議論すべき。

3. それでも、ロングとの分離開催はあり得ること、予選決勝方式も採用され得ること、そして現役学生の運営参加は可能なこと、学連本会計からの財政出動は必要ならあり得ること、これらの観点はガイドラインには引き続き書いておくべき。（そして新観点の演出・配信面）

これらを提言として、この原稿を終えます。

さらに付録として今回設置した臨時柵を競技本番は黒色で地図表記しましたが、朱色に変えたもので資料展示します。青黄色テープもオレンジネット（トータス所有）も過去国内最大量（それも圧倒的 maximum）を使用しました。これらの資材もハウスに残っているので、今後うまく活用して新しい価値観の創生に役立たせていければと思います。

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部（決勝）スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧



調査原図  
国土地理院公開基礎地図情報  
調査期間  
2020年8月～11月  
調査・作成  
宮西徳太郎 (宮西山野精園)  
OCAD2020  
License No.20562  
地図調製  
(有)ヤマカオエーターグラフィス  
2020.12  
フイニッシュ閉鎖時刻 12:10  
臨時設置柵

OCAD<sup>TM</sup>  
the smart software  
for cartography  
宮西山野精園  
Issued in 2020  
Scale 1:4,000  
Vertical Interval 2m  
240m

2020年度日本学生オリエンテーリング選手権大会  
スプリント競技部門  
2020年12月6日(日)  
栃木県那須塩原市

緊急連絡先  
090-8041-4673  
山川

特殊記号  
x 人工特徴物  
(遊具・自立ポール  
・配電用機器・  
水道設備など)

# 那須野が原公園 (南部)

© 栃木県オリエンテーリング協会



- 目次
- ご挨拶
- 公式成績
- 入賞者コメント
- 競技結果と解説
- 大会運営報告
- イベント・アドバイザ一報告
- 将来への提言
- 選手権の部(決勝)スタートリスト
- 大会役員一覧
- 寄附協力者一覧

ICS 2020 Qualification				
WEQ1	2.5 km	54 m		
▷	52	☒		○
	79	☒		○
	80	←	☒	○
	84	←	☒	○
	91	☒		△
	92	☒	☒	☒
	93	☒		☒
	94	☒		☒
	95	△	☒	○
	97	☒		△
	100	☒		△
	101	△	☒	○
	110	☒		☒
	111	☒		○
	112	◇		△
	113	☒		△
	114	☒	☒	☒
	115	←	☒	△
	117	○		○
	118	☒		△
	119	☒		☒
	120	☒		○

121	☒			○
122	☒			○
123	☒			△
124	☒			☒
125	☒			△
126	☒			☒
127	☒			☒
130	☒			△
132	☒			○
133	☒			☒
135	☒			☒
136	☒			☒
137	☒			☒
138	☒			△
140	↑	☒		○

ICS 2020 Qualification				
MEQ1	3.1 km	64 m		
----- 180 m -----▷△				
▷	111	☒		○
2	123	☒		△
3	93	☒		☒
4	120	☒		○
5	121	☒		○
6	130	☒		△
7	122	☒		○
8	110	←	☒	☒
9	140	↑	☒	○
10	117	○		○
11	135	☒		☒
12	114	☒	☒	☒
13	115	←	☒	△
14	136	☒		△
15	125	☒		△
16	79	☒		○
17	138	☒		△
18	100	☒		△
19	101	△	☒	○

ICS 2020 Qualification				
MEQ2	3.2 km	64 m		
----- 180 m -----▷△				
▷	91	☒		○
2	110	←	☒	△
3	112	◇		△
4	120	☒		○
5	130	☒		△
6	114	☒	☒	☒
7	110	←	☒	☒
8	118	☒		△
9	111	☒		○
10	117	○		○
11	135	☒		☒
12	94	☒		☒
13	115	←	☒	△
14	119	☒		☒
15	137	☒		☒
16	84	←	☒	○
17	127	☒		☒
18	100	☒		△
19	101	△	☒	○

ICS 2020 Qualification				
MEQ3	3.1 km	70 m		
----- 180 m -----▷△				
▷	132	☒		○
2	140	↑	☒	○
3	112	◇		△
4	120	☒		○
5	94	☒		☒
6	130	☒		△
7	97	☒		△
8	110	←	☒	☒
9	92	☒		☒
10	124	☒		☒
11	117	○		○
12	135	☒		☒
13	95	△	☒	○
14	115	←	☒	△
15	119	☒		☒
16	137	☒		☒
17	84	←	☒	○
18	138	☒		△
19	100	☒		△
20	101	△	☒	○

ICS 2020 Qualification				
WEQ1	2.5 km	54 m		
----- 180 m -----▷△				
1	132	×		○
2	140	↑	☒	○
3	112	◇		△
4	120	☒		○
5	94	☒		☒
6	114	☒	☒	☒
7	122	☒		○
8	135	☒		☒
9	121	☒		○
10	130	☒		△
11	118	☒		△
12	136	☒		△
13	125	☒		△
14	79	☒		○
15	138	☒		△
16	100	☒		△
17	101	△	☒	○

ICS 2020 Qualification				
WEQ2	2.5 km	54 m		
----- 180 m -----▷△				
▷	111	☒		○
2	133	☒		☒
3	93	☒		☒
4	120	☒		○
5	130	☒		△
6	97	☒		△
7	135	☒		☒
8	94	☒		☒
9	121	☒		○
10	140	↑	☒	○
11	126	☒		△
12	119	☒		☒
13	137	☒		☒
14	84	←	☒	○
15	127	☒		☒
16	100	☒		△
17	101	△	☒	○

ICS 2020				
MUA	2.9 km	62 m		
----- 180 m -----▷△				
▷	132	×		○
2	123	☒		△
3	93	☒		☒
4	120	☒		○
5	113	☒		△
6	114	☒	☒	☒
7	122	☒		○
8	110	←	☒	☒
9	140	↑	☒	○
10	117	○		○
11	135	☒		☒
12	95	△	☒	○
13	115	←	☒	△
14	136	☒		△
15	125	☒		△
16	79	☒		○
17	80	←	☒	○
18	100	☒		△
19	101	△	☒	○

ICS 2020				
WUA	2.5 km	54 m		
----- 180 m -----▷△				
▷	91	☒		△
2	110	←	☒	☒
3	93	☒		☒
4	120	☒		○
5	113	☒		△
6	97	☒		△
7	122	☒		○
8	135	☒		☒
9	94	☒		☒
10	130	☒		△
11	133	☒		☒
12	123	☒		△
13	119	☒		☒
14	125	☒		△
15	79	☒		○
16	80	←	☒	○
17	100	☒		△
18	101	△	☒	○

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザ一報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

# 那須野が原公園

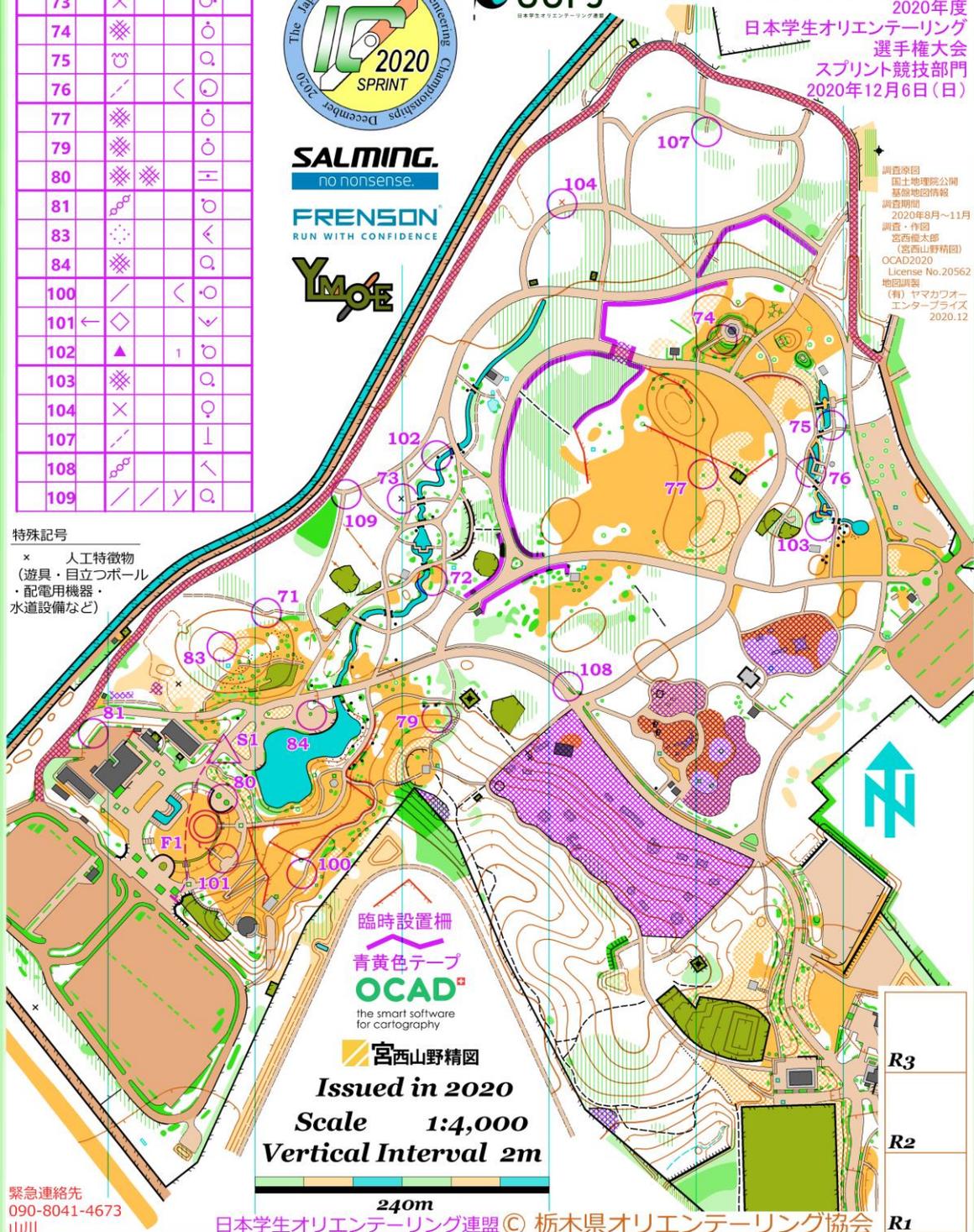
## 栃木県那須塩原市

2020年度  
日本学生オリエンテーリング  
選手権大会  
スプリント競技部門  
2020年12月6日(日)

ICS 2020 Final			
▷ S1	/	/	× ♀
71	←	/	<
72	↓	※	♂
73	×		♀
74	※		♀
75	♂		♀
76	/	<	♀
77	※		♀
79	※		♀
80	※		♀
81	♂		♀
83	⋯		<
84	※		♀
100	/	<	♀
101	←	◇	▽
102	▲	1	♀
103	※		♀
104	×		♀
107	/		↓
108	♂		<
109	/	/	♀



特殊記号  
 × 人工特徴物  
 (遊具・目立つポール・  
 配電用機器・  
 水道設備など)



調査地図  
 国土地理院公開  
 基礎地図情報  
 調査期間  
 2020年8月~11月  
 調査・作成  
 宮西徳太郎  
 (宮西山野精図)  
 OCAD2020  
 License No.20562  
 地図編集  
 (有) ヤマカワオー  
 エンタープライズ  
 2020.12

臨時設置柵  
 青黄色テープ  
**OCAD**  
 the smart software  
 for cartography  
 宮西山野精図  
 Issued in 2020  
 Scale 1:4,000  
 Vertical Interval 2m  
 240m

R3  
 R2  
 R1

緊急連絡先  
 090-8041-4673  
 山川

日本学生オリエンテーリング連盟 © 栃木県オリエンテーリング協会

ICS 2020 Final					
MEF	3.4 km	44 m			
----- 140 m ----->△					
▷		/ /	×	♀	
1	71 ←	/	<		
2	72 ↓	※		♂	
3	73	×		○	
4	74	※		○	
5	75	☺		♀	
6	76	/	<	○	
7	77	※		○	
8	104	×		♀	
9	107	/		↓	
10	108	☺		<	
11	79	※		○	
12	80	※ ※		≡	
13	81	☺		○	
14	83	☺		<	
15	84	※		♀	
16	100	/	<	○	
17	101 ←	◇		▽	
○----- 40 m ----->⊙					

ICS 2020 Final					
WEF	2.8 km	32 m			
----- 140 m ----->△					
▷		/ /	×	♀	
1	71 ←	/	<		
2	72 ↓	※		♂	
3	102	▲	1	○	
4	74	※		○	
5	75	☺		♀	
6	103	※		♀	
7	77	※		○	
8	109	/ /	γ	♀	
9	79	※		○	
10	80	※ ※		≡	
11	81	☺		○	
12	83	☺		<	
13	84	※		♀	
14	100	/	<	○	
15	101 ←	◇		▽	
○----- 40 m ----->⊙					

- 目次
- ご挨拶
- 公式成績
- 入賞者コメント
- 競技結果と解説
- 大会運営報告
- イベント・アドバイザー報告
- 将来への提言
- 選手権の部(決勝)スタートリスト
- 大会役員一覧
- 寄附協力者一覧

# 8

# 選手権の部(決勝)スタートリスト

ME(1/2) 参加人数60			
No.	スタート時刻	氏名	学校・学年
60	14:30	伊藤嵩真	東京大学3
59	14:31	立松空	早稲田大学2
58	14:32	小林伸次	東北大学3
57	14:33	鈴木京佑	横浜市立大学4
56	14:34	鈴木琢也	横浜国立大学3
55	14:35	金城和志	大阪大学4
54	14:36	菅沼友仁	茨城大学4
53	14:37	古池将樹	京都大学4
52	14:38	根岸龍宏	筑波大学2
51	14:39	羽田拓真	横浜国立大学2
50	14:40	山田峻大	東北大学3
49	14:41	碓井玲	横浜国立大学2
48	14:42	古関駿介	東北大学3
47	14:43	豊田健登	茨城大学4
46	14:44	龍堀巧	東北大学4
45	14:45	寺田直加	東北大学3
44	14:46	櫻井一樹	東京工業大学4
43	14:47	加藤千晴	東北大学3
42	14:48	片岡佑太	大阪大学4
41	14:49	堀内颯介	茨城大学2
40	14:50	用松知樹	慶應義塾大学2
39	14:51	渡邊寛希	筑波大学大学院4
38	14:52	朝間玲羽	東京大学3
37	14:53	祖父江有祐	筑波大学2
36	14:54	根本啓介	筑波大学2
35	14:55	宮川靖弥	東京工業大学3
34	14:56	伊地知淳	千葉大学3
33	14:57	津田卓磨	横浜国立大学4
32	14:58	江野弘太郎	慶應義塾大学4
31	14:59	平岩伊武季	筑波大学2
30	15:00	山崎嘉津人	東京工業大学2
29	15:01	小寺義伸	東京工業大学4
28	15:02	池田直樹	東京大学4
27	15:03	伊藤元春	東京大学3
26	15:04	菅波崇志	筑波大学2
25	15:05	中嶋律起	横浜国立大学4
24	15:06	森清星也	早稲田大学1
23	15:07	蘭部駿太	東北大学4
22	15:08	大田知也	京都大学4
21	15:09	栗生啓介	名古屋大学3
20	15:10	田淵ヒカル	慶應義塾大学3
19	15:11	住吉将英	名古屋大学4
18	15:12	小林尚暉	東京大学3
17	15:13	田中琉偉	法政大学3
16	15:14	稲毛隆太	東北大学2
15	15:15	平岡丈	京都大学2
14	15:16	嶋崎涉	東北大学4
13	15:17	池田匠	早稲田大学3
12	15:18	唐木朋也	東北大学4
11	15:19	大石洋輔	早稲田大学4
10	15:20	小林俊介	東北大学3
9	15:21	浅井寛之	東京大学4
8	15:22	二俣真	京都大学2

MEスタートリストは右上に続く

ME1(2/2) 左下の続き			
No.	スタート時刻	氏名	学校・学年
10	15:20	小林俊介	東北大学3
9	15:21	浅井寛之	東京大学4
8	15:22	二俣真	京都大学2
7	15:23	金子哲士	東北大学4
6	15:24	保苺優	東北大学4
5	15:25	本庄祐一	東京大学2
4	15:26	今野陽一	東北大学3
3	15:27	小牧弘季	筑波大学4
2	15:28	谷野文史	筑波大学4
1	15:29	山田基生	東北大学4

WE1 参加人数40			
No.	スタート時刻	氏名学校・学年	
140	13:40	佐々木亜珠	宮城学院女子大学3
139	13:41	吉永紗弥香	法政大学2
138	13:42	中野真優	桐山女学園大学4
137	13:43	崎原美咲紀	千葉大学2
136	13:44	猪股紗如	千葉大学2
135	13:45	佐藤隆奈	筑波大学2
134	13:46	菅原真優	日本女子大学4
133	13:47	明田彩里	桐山女学園大学3
132	13:48	鈴木日菜	実践女子大学3
131	13:49	池ヶ谷みのり	一橋大学3
130	13:50	松田千果	横浜市立大学4
129	13:51	小林璃衣紗	青山学院大学3
128	13:52	坂巻朱里	十文字学園女子大学2
127	13:53	中村咲野	立教大学3
126	13:54	菊池美結	岩手大学3
125	13:55	藤井明日香	関東学院大学3
124	13:56	須本みずほ	桐山女学園大学3
123	13:57	吉田菜々子	東京理科大学1
122	13:58	秋山美伶	早稲田大学4
121	13:59	大栗由希	茨城大学3
120	14:00	岩崎佑美	慶應義塾大学3
119	14:01	榎戸麻衣	日本女子大学2
118	14:02	水上玲奈	東北大学2
117	14:03	山根萌加	京都大学3
116	14:04	菊地美里	東北大学2
115	14:05	上島じゅ菜	お茶の水女子大学2
114	14:06	阿部朱莉	東京理科大学3
113	14:07	八木橋まい	東北大学4
112	14:08	宮本和奏	筑波大学4
111	14:09	片岡孝悠	東京大学4
110	14:10	佐久間若菜	筑波大学4
109	14:11	清野幸	横浜国立大学4
108	14:12	長瀬麻里子	お茶の水女子大学2
107	14:13	世良史佳	立教大学4
106	14:14	富永万由	早稲田大学4
105	14:15	阿部悠	実践女子大学3
104	14:16	近藤花保	名古屋大学2
103	14:17	伊部琴美	名古屋大学4
102	14:18	香取瑞穂	立教大学4
101	14:19	小林祐子	東北大学4

## 9

## 大会役員一覧

実行委員長	谷野 文史 (筑波 17)		
競技責任者	西下 遼介 (慶應義塾 16)	競技副責任者	瀬川 出 (東京 14)
運営責任者	友田 賢吾 (東京経済 18)		
コース設定者	上島 浩平 (慶應義塾 15)		
渉外責任者	山川 克則 (栃木県協会)	渉外副責任者	荻田 育徳 (栃木県協会)
広報責任者	楊 馨逸 (早稲田 16)		
会計責任者	佐藤 珠穂 (法政 17)		
エントリー責任者	伊部 琴美 (名古屋 17)		
会場・表彰チーフ	伊藤 頌太 (慶應義塾 18)	会場・表彰サブチーフ	栗本 美緒 (津田塾 17)
スタートチーフ	富山 詩央里 (実践女子 18)	スタートサブチーフ	小田 隼人 (東京農工 18)
フィニッシュチーフ	根本 夏林 (東京 17)	フィニッシュサブチーフ	鈴木 璃土 (筑波 19)
パトロールチーフ	松尾 怜治 (東京 14)		
配信チーフ	坂野 翔哉 (東京理科 14)	配信サブチーフ	小柴 滉平 (筑波 12)

## &lt;スタートチーム&gt;

生田 峻 (関東学院 17)	金子 詩乃 (日本女子 17)	若月 俊宏 (東京工業 18)
阿部 遼太郎 (横浜国立 18)	友田 雄大 (早稲田 14)	加藤 涼子 (慶應義塾 19)

## &lt;フィニッシュ・計センチーム&gt;

大鶴 啓介 (東京大学 17)	根岸 健仁 (一橋 19)	室井 葉介 (横浜市立 18)
柏田 芳樹 (一橋 17)	大西 正倫 (東京 13)	

## &lt;会場・表彰チーム&gt;

明神 紀子 (聖心女子 18)	海老 成直 (中央 04)	中川 和音 (日本女子 19)
-----------------	---------------	-----------------

## &lt;配信・演出チーム&gt;

桑原 大樹 (東京 13)	長井 健太 (東京農工 15)	前中 脩人 (東京 13)
勝山 佳恵 (茨城 15)	北川 賢也 (横浜市立 15)	栗山 ももこ (横浜市立 19)
大竹 達也 (金沢 13)	岡野 幹生 (東京工業 18)	金澤 晴樹 (京都 18)
池ヶ谷みのり(一橋 18)	尾崎 高志 (早稲田 01)	

## &lt;パトロールチーム&gt;

日本学連 OB/OG 有志の皆様

## &lt;選手名鑑作成チーム&gt;

羽田 拓真 (横浜国立 19)	坂巻 朱里 (十文字女子 19)
-----------------	------------------

## &lt;イベント・アドバイザー&gt;

宮川 早穂 (立教 12)

## &lt;イベント・アドバイザー補佐&gt;

石澤 俊崇 (早稲田 93)

## &lt;地図調査者&gt;

宮西 優太郎(宮西山野精図)

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧

本大会において計 155 名の方々にご寄附をいただき大会の無事開催に至ることが出来ました。大変多くの皆様のご協力、誠にありがとうございました。

下記に、寄附いただいた皆様のお名前を一覧（年度順）で掲載いたします。多くのご支援、誠にありがとうございました。また、敬称については省略させていただいております。

前川一彦	大阪 OLC		井倉幹大	東京大学	2013 年度
沖浦徹二	大阪市立大	1981 年度	石山良太	名古屋大学	2013 年度
下山敬史	静岡大学	1981 年度	稲吉勇人	名古屋大学	2013 年度
寺嶋一樹	京都府立大学	1982 年度	大西正倫	東京大学	2013 年度
佐藤信彦	東京大学	1983 年度	桑原大樹	東京大学	2013 年度
広江淳良	東京大学	1983 年度	澤口弘樹	早稲田大学	2013 年度
山本賀彦	千葉大学	1983 年度	瀬尾峻汰	京都大学	2013 年度
玉木圭介	大阪大学	1985 年度	築地孝和	神戸大学	2013 年度
橋本裕志	神戸大学	1985 年度	戸上麻美	茨城大学	2013 年度
天野仁	早稲田大学	1986 年度	中村茉菜	早稲田大学	2013 年度
寺嶋貴美江	京都橘女子大学	1990 年度	増田七彩	東京大学	2013 年度
西村和人	大阪大学	1990 年度	松島彩夏	立教大学	2013 年度
木俣順	名古屋大学	1991 年度	圓山大貴	茨城大学	2013 年度
石澤俊崇	早稲田大学	1993 年度	植田翔大	東京大学	2014 年度
土屋周史	京都大学	1994 年度	大東祐汰	東京大学	2014 年度
石井泰朗	東北大学	1995 年度	加藤岬	東京大学	2014 年度
飯野雅人	東京大学	1996 年度	河野大和	東京大学	2014 年度
金谷敏行	東北大学	1996 年度	武田悠作	東京工業大学	2014 年度
今泉知也	早稲田大学	1997 年度	田中翔大	東京大学	2014 年度
紺野俊介	早稲田大学	1997 年度	濱本徹	東京工業大学	2014 年度
寺垣内航	早稲田大学	2000 年度	三科圭史	東京大学	2014 年度
八神遥介	東北大学	2002 年度	伊佐野はるか	東北大学	2015 年度
菅麻里絵	京都大学	2005 年度	上野康平	東京工業大学	2015 年度
寺岡倫子	獨協大学	2007 年度	大田将司	一橋大学	2015 年度
宮本佳記	京都大学	2007 年度	奥尾優理	茨城大学	2015 年度
山上大智	東京大学	2007 年度	香取菜穂	千葉大学	2015 年度
田邊拓也	東北大学	2008 年度	神谷孫斗	金沢大学	2015 年度
山下智弘	京都大学	2008 年度	川名峻介	東京農工大学	2015 年度
中村憲	東北大学	2009 年度	齋藤佑樹	早稲田大学	2015 年度
平方遥子	東北大学	2009 年度	佐藤遼平	東京大学	2015 年度
柳川梓	筑波大学	2009 年度	塩平真士	北海道大学	2015 年度
杵田士郎	大阪大学	2010 年度	柴沼健	早稲田大学	2015 年度
細淵晃平	一橋大学	2010 年度	高橋友理奈	東北大学	2015 年度
糸賀翔大	東京大学	2011 年度	殿垣佳治	東京大学	2015 年度
稲毛日菜子	お茶の水女子大学	2011 年度	長江有祐	東京大学	2015 年度
小菅一輝	京都大学	2011 年度	中島緑里	立教大学	2015 年度
佐藤大樹	東京工業大学	2011 年度	濱野奎	慶應義塾大学	2015 年度
阿部稜	東北大学	2012 年度	村山友梨	十文字学園女子大学	2015 年度
伊藤陵	京都大学	2012 年度	山岸夏希	筑波大学	2015 年度
伊東瑠実子	東京大学	2012 年度	青代香菜子	東北大学	2016 年度
春日直也	金沢大学	2012 年度	青芳龍	東北大学	2016 年度
衣川浩輔	一橋大学	2012 年度	荒木亮哉	京都大学	2016 年度
戸上直哉	東京工業大学	2012 年度	石坪夕奈	東京農工大学	2016 年度

出田涼子	大阪大学	2016年度	鈴木日菜	実践女子大学	2018年度
伊藤光祐	東北大学	2016年度	竹下晴山	茨城大学	2018年度
岩井龍之介	京都大学	2016年度	永山尚佳	神戸大学	2018年度
岩垣和也	名古屋大学	2016年度	名雪青葉	筑波大学	2018年度
大橋遼	早稲田大学	2016年度	西浦裕	東京大学	2018年度
河村優花	名古屋大学	2016年度	西田直人	茨城大学	2018年度
北見匠	東北大学	2016年度	溝井翔太	茨城大学	2018年度
木本円花	北海道大学	2016年度	明神紀子	聖心女子大学	2018年度
澤田陸	名古屋大学	2016年度	村田千真	筑波大学	2018年度
篠塚みづき	横浜市立大学	2016年度	山賀千尋	大阪大学	2018年度
下江健史	広島大学	2016年度	渡辺鷹志	京都大学	2018年度
菅原農太郎	東北大学	2016年度	佐藤佑亮	東京大学	2019年度
高見澤翔一	一橋大学	2016年度	永山遼真	筑波大学	2019年度
谷口恵祐	東北大学	2016年度	根岸健仁	一橋大学	2019年度
種市雅也	東京大学	2016年度	堀内颯介	茨城大学	2019年度
茶谷知哉	名古屋大学	2016年度	本庄祐一	東京大学	2019年度
中川真緒	奈良女子大学	2016年度	金子隼人	東京大学	2020年度
長谷川望	早稲田大学	2016年度			
羽鳥咲和	京都女子大学	2016年度			
比企野純一	東京大学	2016年度			
藤本拓也	京都大学	2016年度			
古屋洸	東北大学	2016年度			
邊見侑也	東北大学	2016年度			
三浦一将	名古屋大学	2016年度			
茂原瑞基	慶應義塾大学	2016年度			
八重樫篤矢	東北大学	2016年度			
湯浅博晶	北海道大学	2016年度			
池田直樹	東京大学	2017年度			
生田峻	関東学院大学	2017年度			
大石征裕	東京農工大学	2017年度			
金子哲士	東北大学	2017年度			
栗本美緒	津田塾大学	2017年度			
小林祐子	東北大学	2017年度			
佐藤珠穂	法政大学	2017年度			
菅沼友仁	茨城大学	2017年度			
住吉将英	名古屋大学	2017年度			
世良史佳	立教大学	2017年度			
高柳知朗	筑波大学	2017年度			
谷野文史	筑波大学	2017年度			
砥石真奈	東京農工大学	2017年度			
徳地研人	京都大学	2017年度			
根本啓介	筑波大学	2017年度			
橋本花恵	茨城大学	2017年度			
保苺優	東北大学	2017年度			
宮本佳記	京都大学	2017年度			
宮本和奏	筑波大学	2017年度			
桃本一輝	大阪大学	2017年度			
山田大雅	中央大学	2017年度			
有澤達哉	東京大学	2018年度			
伊地知淳	千葉大学	2018年度			
大栗由希	茨城大学	2018年度			
佐藤加奈	立教大学	2018年度			

目次

ご挨拶

公式成績

入賞者コメント

競技結果と解説

大会運営報告

イベント・アドバイザー報告

将来への提言

選手権の部(決勝)スタートリスト

大会役員一覧

寄附協力者一覧